
白滅の賢者

shallku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白滅の賢者

【Nコード】

N1741S

【作者名】

shallku

【あらすじ】

「賢者」サヴァン——

それは、神より与えられし力に目覚めた者。サヴァンは、この世界に何らかの影響をもたらしに来る異世界からの訪問者、「異界人」クリーチャーを追い払うため、古来から世界の裏側で日々戦い続けていた——

ひょんなことからサヴァンの力に目覚めた、なりたての高校生、桜木白真は、時にクリーチャーから、時にサヴァンから、時にもっと強力な敵から大切なものを守り抜くため、戦うことを決意する。

（厨二要素の強い作品です。不定期更新です。読んでいただいた方

は、お手数ですが、厳しめのコメントと評価を頂けるよう、お願い
申し上げます）

現状報告 「プロローグ」(前書き)

初めまして。 shallkuと言います。
初投稿で初作品。処女作つてやつです。

とりあえず読んでみてください。

どうぞ。

現状報告 「プロローグ」

——現状報告——

四月七日、午後 七時十四分

春先とはいえ、日が沈むと、まだ冷たい風が肌に触れるこの季節。仕事を終え、我が家の温もりに触れるため、帰路に立つサラリーマンと、長い時間運動をして、くたくたであろう部活帰りの少年少女達が、街灯やビルの明かり、店の照明などが、幻想的な、一種のイルミネーションを醸し出しているこの街を、行き来し、埋め尽くしている。

大通りを抜け、住宅街に入っていくと、そこでは、また一風変わった風景がある。食事中の家族の会話とその家のテレビの音。家一つ一つの、心温まる、柔らかな光。先ほどのサラリーマンや、少年少女にとっては、一日の疲れを癒す、至福の光にも見えるに違いない。

これ以上、幸せで平和な夜の風景はないだろう。それは例え、照明を落として、暗く静まり返った学校であろうと、そんな住宅地に囲まれていれば、例外ではないはずだ。

だが、ここ凜城学園はそんな住宅地のど真ん中にあるにもかかわらず、温かい雰囲気など微塵も感じられない。

むしろ、ここは今、学校という名の戦場だった。

(……ゴクリ)

唾を飲み込む音が、こんなにも大きく聞こえたのは初めてだ。

俺は今、校庭の隅にある木の裏に身を潜めている。

こんな時間に学校にいたら、警備員のおじさんに怒られるかもし

れない――。

なんて、そんな心配は不要だ。

――なんで？

――どうして？

そんなの、決まってる。

だって、俺のすぐ近くで倒れているんだからな。

（おもいつきり気絶している……）

死んではいないみたいだ。

ちよつと安心した。

目線を、目の前の戦場に移す。

その先には、牛のような頭で、ゴリラに似た体をした黒い怪物と、俺と同じ制服を着た、見た目普通の女子高生がいる。

互いに睨み合い、緊迫した状況にあったが、瞬間。

ボオオオン！！

女子高生の手から発せられた、大きな炎によって、沈黙は破られた。そして、炎はその先にある黒い怪物に直撃する。

「ギヤアアア！」

大きくゆらゆらと煌めく炎。

それに包まれ、もがく怪物。

その影が、校舎の壁に大きく映りだされ、夜の学校の奇怪さをより一層際立たせる。

さらに、人とも獣ともロボットとも取れない、この世の生き物とは思えない絶叫がよく響く。

自分は、幻覚を見ているんだ――そう思いたくなくなってしまふ光景

だった。

だが、怪物もすぐに体勢を立て直して、筋肉隆々の剛腕で炎を振り払うと、グルルルと、低い唸り声をあげて、再び女子高生を睨んでいた。

……ダメだ、見てられない。

俺は、思わず拮抗している二つの怪物から目を逸らした。（俺からすれば、女子高生も怪物同然だ）

冷や汗が頬をつたう。

走ってもいないのに、呼吸が乱れる。

なんだよ……なんだよこれ！

ここ、学校じゃないのかよ！

頭が混乱している。

思考が追いつかない。

（……落ち着け、落ち着け俺。とりあえず思い返すんだ。俺はどうしてここにいる？ あの人は一切何者だ？ 今日は一体何の日だったんだ？ 今日の、一日の始まりから思い返してみろ！）

それでも、無理やり自分の脳みそに働きかける。そもその原因はなんだったのか。今日一日、何があったのか。非現実的な光景を目にし、焦る気持ちをグツとこらえて、俺はゆっくりと回想を始めた――。

現状報告 「プロローグ」(後書き)

いかがだったでしょうか？

たぶん、意味わかんなかったと思います。かなり短かったし。あらずじを読んでもいけば、少しは分かったでしょうけど。

でも、この後の第一章はすぐに掲載しますんで、それで判断してください。

感想はともかく、誤字脱字ありましたら、教えてください。

よろしくです。

入学式 「サッキ」(前書き)

回想からスタートなんて小説、あまりないでしょうね。

まあ、読んでください。

どうぞ。

入学式 〃サツキ〃

朝、お日様はようやく顔を完全に出し、雀がチュンチュンと可愛らしく鳴き始めた頃、カーテンの間から差し込むわずかな光に照らされ、俺はゆつくりと起き上った。

シャツと勢いよくカーテンを開けると、優しい光が一人暮らしにしては広すぎる部屋を包み込み、窓を開けると心地よい風が優しく頬を撫でた。

「……平和だー」

開口一番、自分で言っという何だが、じじくさいことをつぶやく現十五歳の俺、桜木白真さくらぎ はくまは、今日やっと高校生になる。

受験のために必死になって勉強をやり、友達に質問されたら懇切丁寧に説明してあげ、試験前日になって祖母の容体が悪くなっても、迷わず会いに行ってやった。

そついう日頃の行いの甲斐もあってか、見事、第一志望校に合格し、（まあそんな頭いい学校じゃないけど）今日に至る。

さて、まずは顔でも洗ってすっきりしますか。と背筋を伸ばしながらそんなことを考えていると、

ピンポーン！ ピンポピンポピンポピンポーン！

と、先ほどまでの平和な空間を、まさかの呼び鈴五連発によって打ち壊された。

そして俺が知る限り、朝っぱらからこんな躊躇のない呼び鈴マシンガンをするやつは一人しか知らない。まあ、いつも通りならあと二人いるはずだけど。

（……。）

およそ二秒。この間に私わたくし、桜木白真の、実に明晰な頭脳がフルパワー

―で活動し、この非常事態への対策を練った。

結果、「無視」という素晴らしい答えが導き出される。

起こしに来てくれたのにひどい？ 確かにそうかもしれないな。けどな？

約束した時間より、一時間も早く来られたら、それはただの悪戯だろ！（ここ大事）

「と、いうわけで無視！」

いやゝさすが俺。今日も素晴らしく正しい判断を下したな。^{ジャッジ}さて、朝食は何に――

ガチャガチャ、がちゃ。

バンッ！

「白真あ――！ 無視してんじゃないわよ――！」

「おはよーすつ白真あ――！ 今日から高校生だぜひゃっほう！」

「ちよつ、ちよつと二人とも！ え、あ、お、お邪魔します！」

「まてまてまてまていつ！ なんで！？ なんでさも当然のように俺の家の鍵を開けて入って来れるの！？ ていうか、そしたらさっきの」「あ、いたわね。とりあえず蹴り上げ！」「呼び鈴五連打の意味ないごふあっ！？」

ツツコミさえ口々にさせず、いきなり急所を蹴り上げる幼馴染が、そこにはいた。

男にとって、朝の目覚ましとしては効果抜群の処置だが、それは年頃の女の子がやることではないと思う。ていうか、年頃の女の子じゃなくてもフツーやらない。

「……もつと、優しくは出来ませんかね、彩菜さん」

「うっさいわね。起こしに来てあげたんだからむしろ感謝しなさいよ」

股間を抑えながら床に倒れている幼馴染を、暴力少女――片桐彩菜^{かたぎりあやな}

さんは、腕を組んでそれはそれは冷たい目で見下していらっしゃいました。とほほ……。

曲がったことが大っ嫌いな委員長タイプ。女子なのに腕っぷしが強く、そこらのチンピラじゃあ歯が立たないだろう。だが、見た目は美少女の枠に入る整った顔つきで、後輩女子の人気が高く、去年のバレンタインは男子を含めて校内で一番多かった。

ちなみに、俺は一個も貰っていません。神は理不尽だッ！

まあまとめると、顔もスタイルも高得点。だからこそ、性格がアレなのがとても惜しい。そんな幼馴染だったりする。

したがって、今の過激な暴力も俺達の間では挨拶のようなものだった。

「まあまあいーじゃねえか白真。どこかの誰かさんは自分の新しい制服姿を見てもらいたかっただけぶごあ？！」

と、後ろからひよっこり顔を出した少年は、何かを言い終える前に彩菜から股間蹴り（かかと振り上げバージョン）という素敵なプレゼントをもらっていた。

「それ以上喋るようならアンタも蹴るわよ。将太^{しょうた}」

その少年——吉村将太^{よしむらしょうた}と言われている少年は「それは蹴った後に言うことじゃねえ……！」と俺と同じく股間を抑えながら必死の抗議をしている。ホント同情するよ。うん。

将太は、俺の幼馴染その二。目立ちたがり屋だけど、服装や頭髪は特別派手ってわけじゃない。グレてこそいなかったものの、自分や仲間に危害を加える奴は、容赦なくボコボコにしてきたため、不良連中には目をつけられている。不良というよりは、いたずらっ子に近く、さっき俺のドアの鍵を開けたのも、どうせテレビかなんかの影響だろう。それでも、ちゃんと犯罪の域には踏み込まず、成績

も優秀で通る、とにかく器用なヤツだ。

俺、彩菜、将太の三人は小学校からの付き合いである。それはすなわち、この暴力挨拶も長い間行われてきたことを意味しているのだが、

「そ、そんなだめだよ彩菜ちゃん。今のはさすがに白真君も将太君も痛かったんじゃない……」

と、未だにこの三人のやり取りに慣れてない少女、谷原日和は倒れこんでいる男二人をわりと本気で心配してくれる。

日和は、とにかく優しい性格の持ち主である。彼女は中三の始めに俺ら三人のクラスに来た転入生で、越してきた家が全員の近所だったこともあり、すぐに仲良くなった。クラスにも、その性格の良さと、なにより彩菜と同じく美少女だったこともあり、すぐに馴染んでいった。

そんな四人は、第一志望は違えど、何かの縁なのか、揃いも揃って同じ高校に進学し、今日このように集まっていた。

「いいから、とっとと着替えなさいよ。すぐ行くわよ!」

そういえば。と、俺は自分の体に目をやる。まだパジャマ姿だった。あれ？

「いやいや、何の悪戯だお前ら。まだ早すぎだろう!」

「……は?」

「だって今六時だぞ? 約束した時間は七時でしょうがっ!」

そう言っただけ俺は玄関の時計を指差した。針は六時五分前を指している。

なんだよ。俺を叩き起こすためだけに、三人は予定より一時間以上も前から集まったのか?

いくら友達とはいえ、さすがにイラツとくるな、これが、返ってきたのは思いもよらない言葉だった。

「はぁ？ 何言ってるの？ 今は七時七分。むしろあんた七分の遅刻よ。」

「……はい？」

言ってる意味が分からなかった。

残る二人に聞いてみても、

「俺の時計も同じ時刻だぜ？」

「私も。私のは電波時計だから、ずれることはまず無いんだけど……」

などと言っている。

「いや、でも、確かに時計は——」

と言いながら、俺はもう一度時計を確認して——絶句した。

あれ、時計が、動いてないんですけど？

自分でも、サーッと顔が青くなっていくのが分かる。

振り返ると、みんなが、頬を引きつらせていた。

結論。朝から平和じゃなかった。

* * *

結果的に言えば、間に合った。

だがあくまでも結果的にだ。それまでの過程を見れば間に合ったのは奇跡としか言いようがない。

振り返ると、三人は「ぜーはーぜーはー」と荒々しく肩で呼吸していた。
「……ハア、あんた……なんか言うこと……あるんじゃないの」

「彩菜、バテすぎだろ。少し太ったんじゃないのかって嘘です冗談ですごめんなさいしませんでしたマジ反省してますだから門の前で堂々と関節技を極めないでえ！」

「白真、知ってた？ 肘って曲がらない方向にも曲げられるのよ？」

「『曲がらない方向に曲がる』って、言葉のニュアンスがおかしいことに気付こうよ！ って痛っ！ なにこれちよウソでしょ、ぎゃあああああああああ！」

俺の悲鳴で慌てた日和が止めてくれなければ、マジで逝っていたかもしれない。

俺は三人にそれはそれは深く頭を下げる。日和は苦しそうな顔をしつつも笑顔でOKサインをだしていた。

うう……いいやつすぎる。

「まあ結果オーライだからいいじゃねーか。許してやれよ彩菜」

「じゃあ、せめて罰として私たちのバッグを持ちなさい」

「関節技は罰の枠に入らないんですね」

「なんか言ったあ？（パキポキ）」

「彩菜さんのような聖人君子はほかにいないと思います！」

悪魔だ。悪魔がいる。

「まっ、それよりよ、掲示板観に行こーぜ」

「そうね。同じクラスだったら、また後でも拷問できるし」

「まだやる気かよ！？ ていうか拷問って言っちゃってるし！」

そう叫んだ時にはもう将太と彩菜はいなかった。二人は掲示板前の生徒をかき分け、ズカズカと前に出て行っている。

日和はというと、

「え、えと、大丈夫白真君？ 重くない？」

と、遅刻の罰として四人分のバックを持たされている俺を、親切にも心配していた。

うう……いいやつすぎる（その二）。

「ぶっちゃんけ結構重いけど、これで日和に甘えたら、後で彩菜に何アイツ

されるか分かんないから……。ありがとな、日和」

「ふえっ！ い、いやそんな、感謝されるようなことでもないよ……」

笑顔で素直に礼を言うと、日和は顔を赤く染め、俯いてもじもじしだした。

体調でも悪いのか？ 俺は日和の顔色を窺おうとして止め、バツと急に顔を上げた。

殺気——もしくは、それによく酷似した気配。

昔から人に比べ五感が鋭く、また、人ではない何か（……）を感じ取る、いわば靈感のようなものが俺には強い。これが自分だけに向けられたものではなく、ここ一帯の生徒全員に向けられたものだと思えた。しかし危険性は今のところ感じられない。その気配についていろいろ思考を働かせっていると、

「——まくん！ 白真君！」

と、日和の呼びかけで我に返った。

「どうしたの？」

「へ？」

「急に黙り込んだじゃうから……」

日和はいつの間にか元の調子に戻っており、顔色を窺おうと至近距離まで顔を詰めていた。

「おおおっと！」

慌てて日和と距離をとる。一応俺も健全な男子高校生なので、年頃の女の子と顔を近づけてドキドキしないはずがない。加えて日和はなかなかの美少女だったので、なおさらだった。

本人も自分の挙動に気づいたのか、顔を先ほどよりも赤くして「ごめん」と小さく謝罪をしていた。

……ここまでとは言わないが、彩葉も日和の素直さを見習ってほしいものだ。

「い、いや別に。それより、さっき、その、なんか感じなかったか？」

「……何かって？」

「あーいや、何でもない何でもない」

今はもう気配（もとい殺気）は感じられない。俺は再度辺りを見渡す。先ほどと何一つ変わらない平和なままだった。どうやら気配に気づいたのは自分だけらしい。

何も奇怪な事が起こっていないのだから、これ以上深く考えても仕方ない。

「とにかく、俺らもクラス確認しないと」

「そ、そうだね！」

そして何事もなかったように日和と掲示板目指して走り出す。しかし、後にまたこの殺気を感じる時が来るなど、この時の俺は予想もつかなかった。

入学式 「サッキ」(後書き)

いかがだったでしょうか？

こんな調子があと3〜4くらい続きます。

評価、コメント厳しめをお願いします。

生徒会長 「ホホエミ」 (前書き)

ギャグが受けてるのやら受けてないのやら……

では、どうぞ。

生徒会長 「ホホエミ」

入学式を終えて、俺たち四人は、また一緒に廊下を歩いていた。

クラスはと言えば、彩葉は二組、将太は五組、そして俺と日和は運よく同じ七組だった。

将太が日和に何か耳打ちすると、日和が顔を赤くして俺をちらちらと見てきた。また何か変な事教えてんな、アイツ。

その一方で、そんな日和と俺を見て、彩葉はどこか不満げな顔をしていた。

「どーしたんだよ、何怒ってんだ？」

「うっさいわね。怒ってなんかいいわよ」

口ではそう言っているものの、態度はごまかせてなかった。そもそも彩葉は、本当に不機嫌になると逆に暴力は振ってこなくなる。代わりに、背景が歪んで見えるほどの不機嫌オーラを放ちだす。とにかく、目が怖い。

一人では対処しきれなくなり、俺は将太にアイコンタクトで助けを求める。

（彩葉の機嫌が悪い。原因追及を求む。ていうか何で？）

（！　どこまで鈍感なんだよてめえ！！　ああもうだからお前つてやつは……）

（あ、もしかして……将太。原因が分かったかも）

（……どうせ間違っているだろうが、念のため聞いておく。お前が導き出した答えは？）

（ズバリ！　自分はクラスが違うのに、俺と日和だけが一緒のクラスになって羨ましいからだ！）

（聞いている限りは当たりなのに、肝心なところだけ分かってねえ！）

（え、なにハズレ？　じゃあ、もう分かんない。将太がどうにかして）

（無茶言っつな！　原因が分かっているにもどうにもできねえ時もある

んだよ！ 入学早々保健室のお世話になるつもりはねえ！

先ほどから不機嫌オーラを全力放射中の彩菜と、幸せオーラで絶賛妄想中の日和。真逆の二人がいつ爆発してもおかしくないこの状況をどうにかすべく、俺は将太はあーだこーだと目と目で激論を交わしている。

しかし、将太のふとした一言で、意外にも早く問題は解決した。

「おっ、生徒会長様じゃねえか！」

将太がアイコンタクトを中断して目を移した方向に、俺だけでなく彩菜と日和までもがつられて目を移す。

彩菜と日和が自分の世界から目を覚ますほど、生徒会長である少女の存在感は強かった。

「三年二組篠原涼華^{しのはらりょうか}。本校初の二年連続生徒会長を務め、成績優秀スポーツ万能。その上かなりの美人で性格もいいと、全く隙のない完全無欠の会長様だ。その美貌に目を奪われた男どもは数知れず。しかしそれだけモテているにも関わらず、彼氏をまだ一度も作ったことがないんだとよ」

隣では丁寧にも将太が一通りの説明をしてくれた。確かに綺麗な人だと思う。

きちんと手入れされた綺麗なロングヘアをポニーテールにしており、身長もすらつと高く、どこかひどく大人びて見えた。美少女というよりも美人というイメージのほうが近い。

容姿だけではない。入学式での生徒会長は高校生とは思えなかった。まるで国会議員のような丁寧で分かりやすい挨拶で、校長先生のありがたい（＝つまらない）お話がひどく幼稚に思えてしまった。

辺りを見渡すと、会長に気づいたのは俺達だけではなかった。男女問わずほとんどの生徒が釘づけになっており、会長が起こす仕草一

一つに見とれていた。

「いくら女に疎いお前でも、あの人が美人な事ぐらいさすがに分かるよな？」

将太がニヤリと不気味な笑みを浮かべ、尋ねる。「疎い」と言われたことが多少引つかかったが気にしないことにした。

「ああ、確かに綺麗な人だと思うけど……別にそこまでじゃないだろ。俺からすれば彩菜と日和とあまり変わらない気がする」

瞬間、彩菜と日和が同時にバツと俺に振り向き、まるでサプライズパーティを受けたかのような、驚きと喜びが入り混ざった表情を見せた。そして女子二人は向き合って手を取り合い、「日和！」「彩菜ちゃん！」と、スポ根漫画の一ページにありそうな熱い握手を交わしていた。

「……あー、何やってんですか？ この人たちは？」

「お前は分からなくていい。てかお前にはぜってー分かんねえよ」突然すぎる二人の態度の変化に俺はポカンとしており、将太は二人が元通りになって、ホッと安堵の息をついた。

しかし、その生徒会長が、俺達四人を見て意味ありげに微笑んでいる事に、当の俺達は気づいてなかった。

* * * * *

学校は午前中に終わったので、俺達四人は昼食を摂るためファーストフード店にいた。

最後に注文した白真が三人の待つテーブルに戻ると、早速将太が口を開いた。

「俺のクラス、みんな真面目なやつらばっかで、担任も厳しくて有名な三島ってやつでさ。なんかこう、空気がビシッとしてて堅苦しいんだよなあ」

「確かに将太君の性格を考えたら、ちょっと合わないかもね」

「アンタの腐った性格を直すにはちょうどいいんじゃない？ あ、ていうか、生まれつき腐ってるんだから今さらどうしようもないか」
「俺の十五年間全否定！？ てかお前だけには言われたくねー！！」
「何それ！？ どーゆー意味よ！！」

「ふ、二人とも落ち着いて。あと食べながら話すのは止めた方が…」

…」

店内の迷惑など、全く考慮に入れず口喧嘩をする彩菜&将太と、そんな二人を必死になだめている日和。（全然効果は見られないが）三人はいつもどおり、楽しく（？）バカ騒ぎを起こしている。

しかし、俺は一人、険しい顔つきのまま死んだように動かないでいた。

五回。

さすがに多すぎる。

朝の罰ゲーム中に感じた、あの『殺気』と同じものを、その後四回も感じた。

あの時は、自分の思い過ぎだったのかも。と、考えたりもしたが、これだけ感じれば嫌でも確信せざるをえない。

俺は、まあいろいろあって他人からの視線には敏感で、なんとなく分かってしまう。

だから、視線、靈感、雰囲気などの気配を、何度も感じることで自体はそう珍しくない。

しかし同じ場所に、たった四時間で、しかも全く同じ『殺気』を感じたことはさすがになかった。

おそらく向こうは本気だ。誰かを本当に殺す気かもしれない。だとしたら誰かに伝えるべきか？

しかし、誰が信じる？

他の生徒や教師が気づいている様子はなかった。なので、例えば自分

が話をしても、鼻で笑われるだけだろう。下手をすれば、高校生活たった二日目で教師に目をつけられてしまうかもしれない。それは勘弁してほしい。

はーっと、深い溜息をもらす俺。

はーっと、深い溜息をもらす彩菜。

理由は違えど、同じタイミングで二人は溜息をついていた。彩菜にも思うことがあるらしい。

「あたしの担任の桂、マジひどいよ。刷ってくるプリントの枚数間違えるし、何すればいいのかすぐに隣の教室の担任に聞きに行くし、ハゲだし、しまいには生徒の名前の漢字を間違えて読むし。ってあーもう！ 思い出したらまたイライラしてきたー！」

言動こそ乱暴だが、意外にも、彩菜はこの四人の中で、最も真面目で勉強もできる優等生だ。今までだって何回も学級委員をこなしてきた。そんな彼女からすれば、自分のクラスの担任が頼りないのが不満なのだろう。小学校から今までずっと同じクラスだった俺と将太からすれば当然の反応である。

そう言つて、うーっと唸り、目の前にあったジュースを乱暴に取つてぢゅーっとすごい勢いで飲み始めた。

「あ」

俺は先ほどまで自分の世界に没頭していた。

なので、何か言おうとした時にはもう手遅れだった。そんな俺の様子に気づいた彩菜は、視線で「何よ」と訴え、また飲み始めた。

「いや、お前が飲んでいるそれ、俺のなんだけど」

ピタツと彩葉が動かなくなる。そしてわなわなと震えだし、顔が一瞬にしてイチゴのように真っ赤になった。

……いや、イチゴは可愛らしすぎるか。紅しうがか？

スッパアアアン——！！

「早く言いなさいよ！！　あと紅しうがって何よ紅しうがって！　トマトレベルならまだしも、あたしはまだ十五よ！　遠まわしにババアって言いたいわけ！？」

「……前者は彩葉がいきなりなのがいけないんだろっ……！　あと人の心を読むな！　てかなんで分かるんだっ……！？」

「……ちなみに日和だったら？」

「それこそイチゴ」

スッパアアアン——！！

「……」

「なぜ叩いたあと無言！？　それ逆に怖いわ！」

「まあまあそれくらいにして、他のお客さんに迷惑だよ。ねえ、将太くん」

「……にやついた顔で言っても説得力ねえぞ、日和。あとそっちの二人。話の論点がずれてんぞ？」

その後、しばらく店内でぎゃあぎゃあ騒いでいた俺と彩葉は、店員さんに注意され、叱られて終焉した。

そんないつも通りのバカをやっているうちに、俺は殺気のことなんて忘れてしまっていた。

生徒会長 「ホホエミ」(後書き)

いかがだったでしょうか？

これだけ見てるとほのぼのギャグですね。
バトルまでもうちよい待ってください。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

爆発音 〃ハジマリ〃（前書き）

とくに書くこともないので、
どうぞ。

爆発音 「ハジマリ」

長年窮屈と感じていた戒めから解放されると、人々は歓喜によりつい浮かれてしまうものである。

それはつまり、人類が地球という戒めから、未開の地としてきた月に、初めて足を踏み入れた時の気分と似ている。または、どこそのメジャーリーガーが前人未踏の大記録をたたき出した時とも、やはり似たものである。

自身のことではないのに、喜び、感動する。近くの仲間たちと、どんな騒ぎを起こし、今の気持ちを分かち合う。

しかし、その度合が過ぎると、後々後悔する時がくる。狂喜すぎた若者達が、すっかり社会のルールを破り、お巡りさんのお世話になつてしまった場面を見たことがあるだろう。そして後悔するのだ。もっと、冷静に考えて行動すべきだったと……。

「そんなアンタの哲学的思想はどうでもいいから、とつと探さないよ」

そう。俺は今盛大に反省&後悔中。

「大体、昼食の後、ボーリングだのカラオケだのゲームセンターだのと遊び浮かれているから家の鍵を落とす羽目になるんでしょ！　いくらなんでも浮かれすぎよ！　ちゃんと反省してんの！？」

つまりはそういうこと。

昼食後、「せっかく高校生になったんだから、受験勉強で遊べなかった分、パークと行こうぜ！」という将太の案に乗った俺たちは、ボーリング、カラオケ、ゲームセンターと遊び放題。駐輪場に到着してさあ帰りましようとなった時に、自転車の鍵と一緒にポケットに入っていたはずの家の鍵が紛失しているのに気付いた。

そして今現在、三人に手伝ってもらい、元来た道を探し戻っていた。

こればかりは、本気で申し訳ないと思っている。

「なあゝはくまゝ。なんか覚えてねえのかよゝ。これじゃラチ明かねえぜゝ」

「ボーリング場にも無いとなると、後は学校とお昼のとしかないよね。でも、もう日が暮れちゃうし……」

「どーすんのよー！」

順番に、遊んで疲れ切った将太、文句ひとつ言わずに探してくれている日和、怒り心頭の彩菜。

当の落とした本人、つまり俺はというと、頭の中が不安と焦りで押し潰されそうになっているため、三人の言葉など左から右へと受け流し状態である。だって、家の鍵をなくしたら、誰だって不安になるよね？ まあ俺の場合は皆さんの想像以上で――

（あー！ やべーよどーすんだよー！ これで三回目になっちゃうよ大家さんマジで怖いんだよてか空手四段に柔道四段に合気道三段で現在健康づくりのためにウエイトリフティングやってる六十五歳とかアンタ死ぬ間際に今さら何目指してんだって話だよ下手すりゃってか絶対そこらにいるちゃらちゃらした不良高校生よりも強いに決まって――）

「聞いてんのかコラー！」

ドガッ！

「こはッ……！」

彩菜の鋭い右アッパーで俺は我に返る。

恐ろしい妄想を見てしまった。が、我に返っても恐ろしいのだった。

……ちなみに、実際に大家さんは、コンビニでたむろしていた不良高校生四名を完膚無きまでに叩きのめし、二時間もの説教と人生論を聞かせて、不良四人を更生させているのだが、それはまた別の話である。

「よく思い出しなさい！　なんか思い当たる節があるんじゃないの！？」

自分が放ったアッパーで親友が涙目になっていることなど気に留めず、強い語調で俺に尋ねてくる。

うゝん。と、俺はもう一度朝から記憶を辿ってみる。朝起きて、みんなが来て、学校に行って、教室に入って、入学式のために一度ポツケのケータイと鍵二つを机の中に……

「つて、あー！　思い出したー！」

思わず出してしまった大きな声に反応して、三人は俺の方に顔を上げる。

「どこに落としたのよ！」

「あれだ。入学式の前に、鳴るとまずいからって机の中にケータイと一緒に鍵も入れたんだった！」

「このまぬけえ！」

ドガツと腹に回し蹴りが炸裂。鳩尾に入れなかったのは、些細な優しさとしておこう。それでもやっぱり痛いけど。

（まあでも思い出せてよかったー！　もう背負い投げだとか牢固めだとかはごめんだし。本っ当によかったー！）

「な、なに蹴られてニヤニヤしてるのよ……気持ちわるッ……！」

「お前が蹴ったり殴ったりしすぎてゝ、とうとう頭おかしくなっちゃまったんじゃないのか？」

何やらいろいろ言われているが今の俺は気にしない。何だっさいわい！

「んな事よりよゝ。学校かよゝ、戻んのかあゝ？」

学校というワードを聞いてさらにげんなりする将太。道を辿り戻っ

てきたとはいえ、今いるボーリング場から学校までは、歩くとなると結構ある。言えた義理じゃないけど、忘れた張本人の俺も憂鬱になってくる。

口に出すとまた何かくるだろうから、（もち彩菜さんに）絶対に言わないが。

薄気味悪い笑いを止めて（自覚あり）、俺は将太に振り返る。

「今日はサンキュ。朝から今まで迷惑かけっぱなしで悪かった。本当にありがとうな。場所も思い出したことだし、これ以上は暗くなるから先に帰ってもらっておーけーだ」

時刻は六時四二から、今四三分になったところ。日は今にも完全に沈みそうだし、これ以上付き合わせるのは、さすがに申し訳ない。

「おっしやー！ 帰る！！ じゃあまた明日なあーっ……！」

待つてましたとばかりに立ち直り、駐輪場方向に一八〇度ぐるつと向きを変えてピューン、と走り出した将太。よっぼど退屈だったらしいな。あいつ。

「ちょ、ちよつと将太！ ……たく、いいの本当に？ どうせここまで来たんなら最後まで付き合ってあげるわよ？ あんたも行くでしょ日和？」

完全に帰ってしまった将太を呼び止めるのを諦め、同意を求めて日和に振り向く彩菜。

やはりクラス委員長候補とだけあって、誰かが困っている時に手を差し伸べる姿は頼もしい。怒ったり蹴り入れたりしながらも、なんだかんだで友達思いなところは、いつも尊敬する。これでもつと素直になればいいのに、ちよつと残念だ。

日和は誰かと電話をしているようだった。なにやら真剣な表情だ。……時間遅すぎて、親に叱られちゃったか？

少し経って電話を終えた日和に、彩菜は再度質問を繰り返す。

「このバカが学校に忘れたとか言い出したから、急いで戻りましょ。日和も来るでしょ？」

「あつ、えつと、実は……」

そういつて日和は言葉を切る。困っているようだ。やっぱり親に叱られたみたいだな。

「だから、いいって彩葉。あとは俺一人で行くから。日和も、さっきの電話、親からのお叱りコールだったんだろ？」

親切心で、俺は日和に助け船を出す。日和は一瞬「えっ」と戸惑ったような表情になったが、すぐにコクコクと頷いた。

「悪いな、こんな遅くまで付き合わせちゃって。そういうわけだから、お前も帰った方がいいぞ、彩葉」

「けっ、けど……」

「心配してくれるのはうれしいけど、女子高生が夜に歩き回るのは危ないって」

「っ！　べ、別に、あんたのことなんか心配してないわよバカ！　ほっ、ほら！　ささっと帰るわよ日和！」

突然顔を真っ赤にして、彩葉は強引に日和の手を握るとそそくさと歩き始めた。日和は虚ろを突かれて、ビクツとしたが、俺に「気を付けてね……本当に」と言い残し、彩葉に連れて行かれた。

……てかなんで最後の最後にバカって言われたんだ？　忠告してやっただけなのに。長年あいつと一緒にいるけど、こんな風にたまによく分からないことがある。あと日和の最後の方が聞こえなかったな。なんだったんだろ？

考えても分かりそうにない難問だったので、俺は途中で思考回路を切り替えて、目的である鍵をとりに行くため、一人、暗く静かな闇の中へと走っていくのだった。

* * * * *

午後　六時五八分

学校手前に来ると意外な人物を目撃した。

(……生徒会長？)

そこには慌てた様子で校門を駆け抜ける篠原生徒会長の姿。距離があるうえ、急いでるらしく、こちらには気づいていない。何やら平穏な雰囲気ではなかったが……

（生徒会長様も忘れ物か？）

そっとうの無縁に見えるけど、案外おつちよこちよいなのかもしれないな。と、ひとり合点し、俺も急いで校舎の中に入っただった。……でもなんで校門空いてたんだ？

* * * * *

午後 七時一〇分

教室に入り机の中を探すと、案の定鍵が出てきた。俺は一気に脱力する。

（よかった〜〜！ 今日、帰れないんじゃないかと思った〜〜！ 学校広くて軽く迷っちゃうし。見回りの警備員には見つかりそうになるし。焦るあまり何もないところでこけるし。不安と緊張で心臓バクバクで死ぬんじゃないかと思ったー！）

この時の俺は、言った通り、夜の学校で一人迷子になり、再び不安と焦りで泣きそうになっていたので、それらの系からやっと解放されて完全に気が抜けていた。

（あゝあ、よかった。んじゃさっさと帰りますか。夜の学校は不気味で怖いし。何より警備員に見つかりと厄介だしね。）

午後七時十二分

それ（・・・）は突然訪れた。

バリイイインー！！

ドゴオオオオン——！！

！

夜の静寂に包まれた学校では、まず聞くはずのない破壊音。そして伝わる震動。教室全体が揺れ、机やイスがガタガタと震えだす。

難しいことは差し置いて、ここが「危険」だと伝えるのには十分なサインだった。

浮かれていた気持ちは、再び不安と焦りに変わった。鍵を落とした時とは比べものにならない、圧倒的な不安と焦り。教室の窓に駆け寄り、音のした方を見つめる。

騒ぎの原因はそこ——校庭にいた。

火事かと勘違いするほどの炎が立ち上がる中、そのすぐ傍らで向かい合っている人影が見えた。

一人は男、もう一人は女。どちらも、見知った顔だった。

しかし突然、見知っているはずの男の顔が歪み始める。

男は顔だけでなく、体も変化していった。

「ヒーローの変身」とはほど遠い、バケモノになっていく。

服は破れ、代わりに体中から毛が生え始めた。爪は伸びて、やせ細っていた体は、たちまち筋肉隆々のガタイのいい形になる。身長も三メートル近くはありそうで、極めつけは頭に牛のような角がついていた。

「なんだよ……これ……」

足が震えているのが分かった。窓越しでも分かる威圧感に、俺は潰されそうだった。

しかし、向かい合っている少女は、全くひるんでいる様子など無い。

今日、初めて見た人。

今日、素晴らしい演説をした人。

今日、生徒が皆釘づけになった人。

明らかに、昼とは違う雰囲気を漂わせるその人は、最初、その人だと気づかなかった。

そしてこの瞬間こそ、俺、桜木白真が「世界の真実」に足を踏み入れた瞬間だった。

爆発音 「ハジマリ」（後書き）

いかがだったでしょうか？

これで頭に戻ります。

それでも、この世界観に関する説明はまだ先なんですけどね。

第二章は一週間以内に掲載します。

次も読んでいただけると光荣です。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

電話 ⅡタスケⅡ（前書き）

一週間おきとか言いながら、作者が待ちきれなくて投稿してんじやん。

これからは、最低でも一週間以内ってことで。

では、どつぞ。

電話 Ⅱ タスケⅡ

回想終了。

その後、不安で怖くてたまらないはずなのに、怖いもの見たさからか、俺の足は吸い寄せられるように二人へと近づいて行って、結果、すぐ近くの木まで来てしまった。

炎、炎、炎——暗い静寂の中で、少女が放つ火の玉だけが、不自然に煌めいている。

俺はもう一度、その戦っている少女の顔を確認する。

戦っているのは、やはり篠原生徒会長だ。

しかも——

（会長が押してる！）

あのドでかい不気味な怪物を前に、会長はひるむどころかリードしていた。

遠くから撃ち放つ炎の塊は、怪物がその剛腕で振り落としてしまい、全く攻撃にならない。そこで会長は、炎を怪物の顔にめがけて撃ち、そこで生まれるわずかな隙について、体に直接当てていた。

しかし、そんなことより、

（なんで誰も気づかないんだッ……！？）

暗い夜の真ただ中で、これだけの騒音と炎が立ち上がっているにもかかわらず、学校の近所は静寂を保ち続けている。これで、ただ気づいてないだけだというのなら、この町の人はまだ別の意味で怪物だろう。

俺の汗ばんだ右手には、ケータイがしっかりと握り締められているが、ぶっちゃけ役に立ちそうにない。待ち受けを開いてみても、

左端には二本アンテナの代わりに「圏外」の文字。

こんな住宅地の中の、大きな学校で、圏外になるような場所があるなど到底思えないが、圏外は圏外。嘆いたところでどうしようもない。

なので、こうしてケータイを握り締めているのは、気休めのためだけだ。

（どうする？ ケータイが使えない以上、学校の電話を使うしかない。そのためには、ここから動かなくちゃならない）

木の陰から、まるでストーカーのように二人を盗み見る。

会長はゴリラのような怪物と、激しく混戦中。互いに相手に夢中で、こちらには気づいていないようだった。

行くななら今しかない。でも、見つかったらタダじゃすまない。

行くか？

やめとくか？

どうする？

どうする？

「キャッ！」

！

悲鳴の聞こえた方を見ると、怪物が会長を殴り飛ばしていた！

会長の——華奢な女の子の体が、壁に叩きつけられる。

「——っ！」

女の子が、痛がっている。

苦しそうにしている。

……何してんだ、俺。

決めたんだろ？

困っている人がいたら、なりふり構わず助けに行ける。

そんな兄貴の姿を見て、

そんなヤツに、自分もなつてやろうつて、
決めたんだろ？
やってきたんだろ？

——助けたいんだろ！

「そうだ！」

パァン！！

俺は、思いっきり自分の頬を叩く！

「決めたんだ！ 絶対に助けるって決めたんだ！ 何いまさらウジウジしてんだ！ 婆ちゃんが持つている重い荷物を運んだ。迷子になった子の親と一緒に探した。それとなんら変わらねえ！」

兄さんがいつも言っていた言葉。

——大事なのは、動くことだ。

そうだ、動かなきゃ始まらない。

同情のまなざしを向けることなら、誰だってできる。

それを、行動力に変換できるかだ。

事情はどうあれ、助けを求めているのなら——

「全力で助ける！！」

気が付いた時には、俺は校舎に向かって、走っていた。

* * * * *

「助ける」と言っても、あの怪物に刃向うわけじゃない。
そんなことしたって、ただの一般高校生が敵う相手じゃないし、

会長さんの足を引っ張るだけだ。

いや、下手をすれば、あの鉄筋コンクリのような腕で殴られて、死ぬかもしれない。

なりふり構わず、とはいっても、死んだらそこで終わりだ。

だから、何もできずに死ぬよりも、できることをやる。

それが今回は、「警察に通報する」ということだ。

（職員室、職員室……ここか）

悪いとは思いつつも、倒れていた警備員さんから拝借した鍵で、扉を開ける。

ガラガラ——夜の、誰もいない校舎の中、扉を開く音が、やけに大きく聞こえた。

とりあえず、一番近くの机に歩み寄り、電話を探そうと試みる。
が、

「きつたねえ！」

なんか、ものすごく散らかっていた。

職員会議の書類やら、今日の新聞やら、昼に食べたであろうコンビニのゴミやら……そして、ついには、

「ぶっ！ エロ本？！ 教師が学校に持ってくるなよ！！」

思わず怒鳴ってしまったが、後から気づいた。

「あ、没収品か」

よくよく見ると、雑誌の裏には『没収品』と書いた紙が貼っている。

まあ、フツーに考えてみたら、こういうものは、発情期と葛藤中の男子高校生なんかが所持するものであって、一介の教師が学校に持ってくるはずがないわけで。

……なんかホッとした。

ドオオオン！！

！

会長と怪物が戦っているであろう場所から、爆発音が聞こえた！
その音のおかげで、一気に現実に戻される。

「いけね……」

机の上にはかり目がいつて、本来の目的を忘れていた。

今も会長さんは、戦っている。

そつだ、こんなことを考えている場合じゃない。

俺は、気を取り直して、電話の搜索に戻ろうとして――

「こ、ここ、こら！ な、何をしているんですか！」

――怒られた。

驚いて、すかさず振り返ると、職員室の引き戸の傍に、懐中電灯を片手に持つ、ハゲたおっさんが、ぶるぶる震えながら立っていた。
えーと、誰だっけ？ 確か……

「あ、桂先生？」

昼に、彩菜が頬を膨らませて、愚痴っていたことを思い出す。

ハゲで、漢字読めなくて、頼りのない。白衣を着ている辺りからすると、理系の先生なのだろう。しかし、その白衣も、しわくちゃで、お世辞にも綺麗とは言えなかった。

態度は、どうもオドオドしっぱなしで、はつきり言ってしまうば、
『軟弱』な印象を受ける人だった。

確かに、こりゃイライラするかもな……彩菜が愚痴りたくなるのもうなずける。

その桂先生はというと、正体が学校の生徒だと知ったからか、少

し安堵した表情を見せた。

が、何か気づいたように目を見開くと、俺を指さして、一言。

「わ、私の机で、何をしているんですか！」

あんたの机かよッ！

なんと、あさっていた机の持ち主登場。

夜の学校で、自分の机をあさっている人を見たら、そりゃドキツとするわな。

机の汚さに関して、いろいろツツコミたかったが、状況が状況なだけに、ぐっとこらえる。

というか、これじゃ不審者扱いだ。誤解を解かなければ、説教では済まされない。

「いや、あの、これはですね！」

俺は、なんと説明したらよいものか、あれこれ考えていると、「あつ！」と、桂先生が、今度は俺の右手を指して、驚嘆の声を上げる。

今度は一体何事かと、自分の右手にあるものを確認すると、

そこには、エロ本があつた。

[illegible]

これじゃあまるで、没収された工口本を、夜な夜な職員室まで取り来たみたいじゃないか！

俺の脳内は軽くパニックに陥る！ 何か言わねばと思うが、わたしたちするばかりで、むしろ肯定しているようにも見えて――

…待てよ。

考えてみれば、この桂先生本人が、もともとの持ち主から取り上げただから、俺がこれを取り戻しに来たとは思わないじゃないか！――最悪の誤解は免れ、ホツと安堵の息をつく俺。

「そ、それは、私が三沢先生から取り上げたものです！ 勝手に取らないでください！」

—— 衝撃の事実を聞かされた！

会長と怪物のことさえ忘れて、思わず叫んでしまう俺！

！　　そもそもあの女だろう！　　確かに変人オーラバリバリ出ていたけど、そこまでとは思わなかったよ！

……なんか、もうヤダこの学校。

変態教師に怪物ゴリラ教師って……

こんなことしている場合じゃない。

か、思わず気を抜いてしまふくらい、エロ本の話がショックだった。つい大声でツツコミを入れてしまったため、ビック！ と、体を震わす桂先生。

そういえばこの先生、さっきまでの音が聞こえてなかったのか……

「先生、すごい爆発音がしたんですけど、気づいてました？」

な変態教師がいる学校に、あるわけないじゃないですか！」

「本音、思いつきりぶつちゃけましたね!!」

とはいえ、桂先生にはあの爆発音が聞こえていない、ということ
は、あの怪物には気づいていないということだ。

どうして見えないんだ？ 俺にも会長にも、確かにあの姿は見えて
いるのに。

いや、むしろ、見えない方が正常なのか？

今までの様子を見ていて、会長さんはただの一般人ではないとい
うのが、とてもとてもよく分かる。

フツーじゃない人には見えて、一般人には見えない。
だったら、

「俺は、いつたい……？」

「ちよつ、ちよつと？ もしもし？」

桂先生に体をゆすられ、ハツと我に返る。
そうだ。

考えても答えが出そうにない問いは後だ。

「け、結局、あなたは何組の生徒で、こんな夜にいったい何を……
？」

「その前に、先生！ 電話はどこに——」

その時、気づいた。

職員室、いや、ここあたり一面の、妙な静けさに。

さっきまでの爆発音が、全くしていないことに——

グシャ

電話 Ⅱ タスケⅡ（後書き）

いかがだったでしょうか？

桂先生も大変ですね。

担任もちゃんと出す予定です。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

桂先生 「バケモノ」 (前書き)

実は、話のストックがあるので、しばらくは毎日投稿します。
あ、でも学校始まっちゃうと厳しいかもしれません。

ちなみに、これを投稿した時点では、もう新キャラの登場場面を執筆していたり。

とりあえず今日のお話です。
どうぞ。

桂先生 「バケモノ」

見間違いだ。

初め、篠原涼華はそう思っていた。

こんな結界の中で、自由に動きまわれる一般人など、いるはずがない。

だから油断した。

彼の姿を見たときは。

その一瞬の隙を突かれ、涼華は壁に叩きつけられた。
しかし、それでも、素早く敵に反応し、急所を逃れたのは、さすがというべきか。

反応がもう一步でも遅ければ、気を失っていたかもしれない。
少年がいた場所を、もう一度横目で盗み見る。

すでに、彼の姿はなかった。

軽く辺りを見渡すが、それらしき人物は見当たらない。

校舎に逃げ込んだと分かった時、涼華はホッと安堵の息をもらした。

感知した敵は一体のみ。

ゆえに、別の敵が彼を襲うことはない。

（あの子には、後で事情を聴く必要があるそうね……）

目の前の敵を睨みつけながら、涼華はゆっくりと立ち上がる。

「グワアアアアアアアア！」

「気持ち悪い声を出さないでもらえるかしら？ 耳が痛いんだけど？」

強く叩きつけられたにもかかわらず、怪物に対して、文句をひょうひょうと言いのけるほどの余裕が、彼女には残っていた。

怪物は唸りながら、右腕、左腕の順に腕を振り回してくる。

当たれば致命傷だが、避けられない攻撃ではない。

涼華は、とつさに横に飛び退き、敵の無防備な足に向かって、炎の玉を打ち込んだ。

足元をすくわれ、無様にも転倒し、壁にぶち当たる怪物ゴリラ。

「グギヤアアアア！」

まるで泣き叫ぶように吠える怪物。至る所から血が噴き出し、皮膚は炎によってボロボロに破けていた。体はふらつき始め、あと一撃でも決めれば、勝敗はつくだろう。

しかし、涼華はこの怪物に対して、小さな違和感を覚えていた。

「……死ぬ前くらい、一言喋ったらどう？」

彼女は、今までも、同じような怪物を相手にしてきたが、会話能力があった。

人の言葉を話し、感情を持っていた。

そう、怪物とはいえど、こんな話すことも出来ないような、まんの怪物は、見たことがなかった。

「グルルルルル……」

（話すことができない種類？ いや、そんな知能の低いやつらが、ここにいるはずない。だってここは——）

そこで思考は途切れた。

ハッと顔をあげると、目の前には、おぼつかない足で歩み寄ってきた怪物ゴリラが、力を振り絞り、涼華に剛腕を振るわんとする（なんか腑に落ちないけど、とりあえず片を付けようかしらね）

涼華はそれを避けようとせず、逆に、前に出る。

腕を振り下ろされるより前に怪物の懐に入り、左手でしっかり添えた右手を体に押しつけ、そして――

「THE・END」

ポオオオン！

——今宵最大の炎を放った。

* * * * *

「見た目通り、タフだったわねー」

吹っ飛ばされたゴリラの怪物を見ながら、ふうと息をつく涼華。彼女は自分のスクールバックから包帯を取り出すと、慣れた手つきで、出血している左脚を手当てしていた。

（にしても……こんなヤツもいるのね。結局最後まで喋らなかったし、動きもただの獣と変わらなかった。今まで私に感づかれることなく動き回れたのが、不思議なくらい）

包帯を巻き終えると、立ち上がって、自分の体に異常がないのを確認する。

「ん！ 大丈夫。問題なし」

一人、そうつぶやく。

すると、突然、目の前にあった怪物が淡く光り始め、光輝く粒子となって飛んでいく。

（回収、し始めたわね）

粒子となった怪物は、空高く飛んでいき、消えてゆく。

（さて、あとは校舎にいる彼を見つけて、事情聴取と行きましょうか）

光る粒子に背を向けて、校舎へと歩き出す涼華。

なんと言って話を切り出そうかしら、などと考えている涼華の意識は完全に校舎に向いており、背後の怪物など、もう気には留めていなかった。

だから、

ドサッ

そんな音が背後からするなんて、思いもしなかった。

「！」

慌てて後ろに向き直り、体勢を整える涼華。

しかし、彼女の目に映ったものは、先ほどの怪物のような奇抜なものではなく、もっとよく知る人物だった。

「香坂先生！？」

三年生の体育教師、そして、この学校の生活指導をしている、普段からよく接触していた人物だった。

自分の知り合いが倒れていれば誰でも焦るが、彼女の焦りの矛先は、そこではない。

（なんで……なんで回収されない？ 香坂先生は、向……側のヤツらだったんじゃない……）

倒れている体に近づくと、その右腕に、遠くからでは気づかなかった傷跡が見えた。

何度も引つ掻き回したように見え、皮膚はなく、肉が見えている。その中心には、小さな穴が開いていた。

どうみても、注射の跡だった。

（こっちはダミー！？ じゃあ、まさか……！）

校舎に目を向ける。

外での様子を見届け、なおかつ、自分の気配を感じづかれにくくするのなら、高く、そして入り組んだ場所に身を潜めるのは、もはや定石。

「まずい……！」

絶叫。

静まり返っていた夜の校舎が、再び奇怪なものに変わる。

「なぜ、この結界の中、何のチカラも持たない小僧が自由に歩き回っているのか。とねえ」

血塗られた赤に染まった、特大の針のような腕。それが、月夜に反射して、怪しい赤光を作り出す。

腕を抜き取った時の小さな反動だけで、俺は大きくよろけ、そのまま地面に倒れた。

甘かった。

誰も、敵が一人なんて言っていないじゃないか……！

「……く、そ」

「ほおう、腹を貫かれて、まだ話すことができますか」

桂先生——いや、バケモノは、俺を見下しながら感心したようにため息をつく。

対して俺は、バケモノを睨みつけるのが精いっぱいだった。

少しでも気を緩めたら、気を失ってしまうだろう。

「ただの人間にしては、大した生命力ですねえ。感心しますよ。ですが、もう一人の小娘に気づかれると厄介ですし、早々に死んでもらいましょう」

俺の首に狙いを定め、大きく振り上げられる針腕。

逃げることはおるか、叫ぶことも出来ない。

くそっ！

ちくしょう！

とぼつちりにあったとは考えない。

今さら不幸だなんて言わない。

あの時、校舎に向かって走り出した時、その時から覚悟はできていた。

死ぬかもしれないと、分かっていた。
なのに。

なのにつ！

「く、そ……！」

やっぱり、死にたくねえ……！

振り上げられていた針腕が、勢いよく振り下ろされる。

思わず、俺は強くまぶたを閉じた。

そして、針腕は、俺の首を、貫き——はしなかった。

その代わりに、

ボオオオオン！！

熱風が俺を襲った。

「！？！？！！！」

もはや、聞きなれてしまった爆発音。

だが、聞こえた音の大きさはかなりのものだった。

耳が、正確には鼓膜が悲鳴をあげる。

何が起こった？

おそろおそろ、目を開いてみる。

俺に振り下ろされるはずだった相手の腕は、俺とは別の方向に下ろされていた。

桂先生も、腕を振り下ろした方向を向いている。

俺も同じ方向に目を向ける。

黒い煙の、その向こう側に、人影が見えた。

すらっとスタイルの良い、長めのポニーテール。

影だけで分かる。

その人の名を、もうほとんど動かない口に出そうとして——

炎の玉が飛んできた。

「！！！」

それをまた、針腕が相殺する。

ボオオオオン！！

先程聞いた音と、何一つ変わらない音がした。

その音を聞いた桂先生は、まるで新しく友達ができたかのように、楽しそうに、でもどこか含みのある笑みを浮かべていやがる。

「あらら、見つかってしまいましたか。思っていたよりもお早い登場ですねえ」

煙が晴れていく。

その中を、悠然と進んで行く人影。

こんな非常事態の中でも、昼間見かけた時となんら変わらない。

むしろ、貫録が増しているように思えた。

すげえ。

ただ立っているだけで、こんなにも圧倒されるものなのかよ……！

そして、救世主は現れた。

「よくも騙してくれたわね。桂先生」
バケモノ

桂先生 「バケモノ」 (後書き)

いかがだったでしょうか？

補足があります。

基本、主人公である白真がない場面は、神の声で進みます。

あしからず。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

雷撃 Ⅱ チカラⅡ（前書き）

やっぱり学校始まると厳しいなあ（汗）

まあそれでも、週一は守り抜くよう努めますよ。……とか言いたいんだけど、2、3日後にはテストがあるから、ビミョーなんだよね……いきなり週一守れないかも……

ストック、あるにはあるんですが……

悩んでも仕方ない！

今回の話を、
どうぞ。

雷撃 Ⅱ チカラⅡ

表情は対称的だった。

無表情の女子高生、笑うバケモノ。

しかし、相手を強く睨みつけているという点では、両者どちらも同じみたいだ。

会長が目線を俺に向けてきた。

目と目が合う。

今にも吸い込まれそうなキレイな瞳に、状況を忘れて見入ってしまっ

だが、会長はすぐに目線を戻してしまった。

「気に入ってもらえました？ 実験物の方は」

相変わらず、にやけた顔で尋ねてくる針男。

実験物？

なんだ、実験物って。

「時間稼ぎにもならないわよ。駄作ね」

それに、会長が強い口調で返す。

意味が分からない。

あのゴリラ野郎は、コイツの仲間だったんじゃないのか？

「十五分も稼げれば充分ですよねえ。ましてや、私の存在に気付かなかったのですから」

ギリッ。

会長の拳が強く握り締められる。

「それに比べて、この子は優秀でしたよねえ？」

グッ！

そう言つと、針男は、すぐ傍で倒れている俺の顔を踏み潰してきやがった！

「がア………！」

忘れていた激痛が再び襲ってくる。

その声を聞いた会長が、反射的に攻撃体勢をとる。
だが、

「下手に動くと、この小僧を串刺しにしますよ？」

針男は、自分の腕の矛先を俺の首筋に向けてきた。
いわゆる人質。

これでは会長も動けない。

くそっ！

結局、俺は会長の足手まといになってるじゃないか！

自分の無力さに怒りが込み上げてくる。

しかし、そんな俺の心情とは無関係に、桂先生は話を進める。

「で、何でしたっけねえ……あーそうそう、この子の話でしたねえ。
あなたも見習ってみてはどうですか？ この子は、昼間私が向けて
いた殺気に、ほとんど気づいていたんですからねえ」

やっぱりあれは殺気だったのか。

昼間の違和感を思い出す。

けど、俺は、それが誰のものかまでは分からなかった。

今、この場で臆せず戦うことのできている会長さえ気づかなかった。
た。

それだけ、この怪物は手ごわいということなんだろうな。

その話を聞いた会長は、「驚いた」という顔ではなく、なぜか、

「もしかして……」とでも言いたそうな、期待をこめた表情を俺に
向けてきた。

？

もちろん、俺にはその表情に隠された真理など、理解できるはず
もない。

くら。

(やばっ……)

めまいがした。

腹に穴を開けられてから、なんとか意識を保っていたけれど、俺の肉体はとうに限界を超えていたみたいだ。

会長はそんな俺の表情をくみ取ったようで、キツと再び桂先生を睨みつける。

当の桂先生も、俺の表情をのぞき見てニタアと笑ってきた。

「本当なら、ショック死してもおかしくはなかったんですけどねえ。いやーここまでよくもちましたよ。もう一度言いますが、ただの人間にしては大した生命力でしたねえ。褒めてあげますよ」

やべえむちゃくちゃム力つく。

だが表情には出さない。いや、出せない。

自分が思っていた以上に、体は衰退していたようだ。

まぶたが重くなってきた。

あ、死ぬかも。

半ば諦めてかけ、心も体も弱くなっていく俺。

最後に聞こえてくる声は、桂先生のもの。

「このまま人質にしてもいいんですけどねえ、もうこの子死んじやいますし……。あ、それともあの教師みたいに一般人を実験物にしちやいましょうかねえ」

……は？

遠のく意識を呼び戻すように、再び、俺の目がはつきりと見開かれる。

こいつは、今、何と言った？

「いやー滑稽でしたねえ！ あのもがきよう！ 腕に注射針をプチツと刺したら、泣いて喚いて叫び続けて！ すがりつくように私を見て！ 『助けてー』なんて言い出して！ ム力つくから蹴り飛ばしましたけどねえ、いいですねえ！ 今度からはもっと多く作って、手ごろな人間に刺していきましようか！ 替えは、この世界に腐るほどいますしねえ！」

目玉をひんむいて、狂ったように爆笑し始めた桂先生。不快で奇妙な声が校舎に響く。

会長は、より一層強く拳を握りしめる。

てことは、何だ？

あのゴリラ怪物は、もともとただの一般人で？
無理やり、ゴリラ怪物にされて？

この、目の前のバケモノに利用されて？

それで、

それで、

この戦いとは全くの無関係で……。

「予備として持っていたやつが、まだ一つありましたねえ」
ひとしきり笑い終わると、桂先生は、白衣のポケットから注射器を取り出す。

会長の目が見開かれた。

ホントにまずい——そう言いたげな顔をしている。

だが、俺という人質をとられている以上、下手に動くこともできない。

対して、俺という人質をとっている桂先生は、余裕の笑みを崩さない。

[illegible]

再び、狂ったように笑い出す桂先生。

言い換えれば、バケモノなりの勝利の雄叫びなのだろう。

うるさかった。

不快だった。

怒りが込み上げてきた。

だから――

「――ぎやははははははは――は？」
止めてやった。

初めて、バケモノから余裕の笑みが崩れる。

足元に視線を落とした桂先生は、心底不機嫌そうな顔をした。

いや、

正確に言えば、強い力で桂先生の足を掴む、人質の姿を見て、だ。

「……ざけ……やね……」

「ああ？」

蚊の鳴くような俺の声に、桂先生は、変わらず不機嫌な顔と声で、俺に聞き返してくる。

だからもう一度、聞こえやすいように、俺ははっきりと言ってやった。

「ふざ、けんじゃ、ねえって……言ったんだよ！！」

！

俺の腹の底から絞り出すような声に、俺から距離のある会長は面食らった表情になった。

だが、俺のすぐ傍にいるはずの桂先生は、ひるむ様子などなく、さらに不機嫌な顔になる。

「……前言撤回です。胸クソ悪くなりました。こんなゴミクズは利用するに値しませんねえ。てことで、とっとと死ね」

一度引いて、勢いよく突き出される針。

狙いは首筋。

「やめっ——！！」

会長が短い悲鳴とともに、駆け出そうとする。

死んで、たまるかよ！

俺は、咄嗟に左手を突きだして、

ズシャッ！

真正面で止めてやった。

左手は貫通してしまったが、しっかりと針を掴んでいる。

不思議だ。思うように体が動きつつある。

「なっ……！！？」

これには、さすがのバケモノも驚きを隠せないらしい。あきらかに動揺している。

対して会長は、驚きつつも嬉しそうな表情をしていた。

言っておくが、もちろん左手には激痛が走っている。

だがそんなこと、今の俺にはどーでもいい。

顔をあげて、自分でも信じられないほどの恐ろしい剣幕で、桂先生を睨みつける。

「関係、ねえ、人まで、巻き込んで……人の、平和を、踏みにじりやがって……そんなこと、して、いいと、思ってたのか……？」

言葉の一つ一つに力を込めながら、俺は無傷の右手に力を込めて、体を起こそうとした。

「ひっ！」

さっきまでの余裕はどこへやら。桂先生は短い悲鳴を上げて、突き刺したままの腕を慌てて抜こうとする。

——逃がすかよ！

グッ！

「！？」

だが、さらに力のこもった俺の左手が、それをよしとしない。左手から血がボタボタと落ちてゆく、それでも、力が抜けることはなかった。むしろ、なぜだか力が湧いてくる。そんな気さえた。そのまま、全身にも、言葉にも、力を入れる。

「返せよ……無関係の、人の、平和を、日常を、返せよ！！」

そして、ついに俺は立ち上がった。

「あ、あぁっ！」と、情けない声を出して、しりもちをつく桂先生。形勢逆転。

針腕を捕まえた、その瞬間から、全てがひっくり返されていた。

思わず、桂先生は、ほとんど悲鳴に近い声でわめく。

「な、なぜ立っていられるのですか！？ 腹をえぐられて、左手を貫かれて！ 出血だって、死んでもおかしくないのに！ こんな、こんな、なんのチカラも持たない小僧が！ なぜ！？」

ああ。自分でも解らない。

なんで、俺がこんな鬼人みちた行動がとれるのか。

この、体の奥底から湧き上がってくるものが何なのか。解らないことだらけだ。

正直まいつちまうよ。

けど、

「それでも、今、ぶん殴らなきゃならないのが誰なのか、それだけは、分かっているつもりだクソ野郎！！」

そして、俺はその強い意志を拳に変えて、すっかり怖気づいた桂^{ケモノ}先生の顔を、どこぞのラノベの主人公のように、思いっきりぶん殴る！

——ピリッ——

「ごがあッ！！」

ドゴッ！ と、鈍い音をたてて、吹っ飛ばされるバケモノ。その拍子に、左手にささっていた針も綺麗に抜ける。

「ありがとう！ おてがら、よッ！」

待つてましたとばかりに、会長がすぐさま炎の玉を投げつけ、追撃。

桂先生は、あっという間に炎に包まれた。

「があああああああああああああああッ！ くそッ！ くそがあああ！ なめるな人間風情があああアアア！」

絶叫。徐々に人間離れた声になってゆく桂先生。だが、そんなものは俺の耳には入っていないかった。

——なんだ？ 今の。

バケモノを殴った時に、拳に憶えた違和感。

ちくつと刺すような痛み。

それに、心なしか、体が熱い。

「それが一体なんなのか、知りたい？」

会長は、そんな俺の様子を横目で見て、何か含みのある笑みを浮かべる。

分かるんですか？——そう尋ねようとして、爆風に阻まれた。

「ガアアアアアアアアアアアアアッ！」

と、炎を振り払って、バケモノの真の姿が露わになる。

[illegible]

針の腕を突き出し、やはり首を狙ってくる。

「おかしな話だね。」

「一応言っておくけど、私は、初めて顔を合わせた時から、あなたがクリチャーだってことには気づいていたわよ。ただ、あのゴリラがあなただと、勘違いしただけ。だから、私だって、なめてもらっちゃ困るのよっ!」

そして、ようやく止まったバケモノめがけて、もう二、三発、立て続けに炎の玉をお見舞いする。

案外、根に持つタイプなんだ……

「白真君。君の感じている、その違和感の正体、教えてあげる」

「いいから！ それを含めて、聞きたいことはたくさんあるだろう」

から、後で全部教えてあげる。だから、とりあえず今は私の話を聞いて！」

今さらな気もするけど、確かに聞きたいことは山ほどある。でも、会長の、ものを言わせない真剣な空気を前に、自重することにした。

俺は、唯一許されている質問を尋ねる。

「分かりました。それで、えーと……」

しかし、いざ尋ねようと思うと、上手く言葉にできない。というか、この会長さんはテレパシーでもあるのか？ 俺は一言も、この違和感について話してないのに。

「コノ程度ノ熱サ……ヌルインダヨオオオオオ！」

！

会長から目線を外すと、バケモノが、炎の渦を切り裂き、脱出しようとしている。

「ちよっ、ヤバくないですか！？」

「ええ、ヤバいわね。だからさっさと答えを教えるわ。右手を前に出して！」

なのに、会長は追撃を加えず、平静を保ったまま俺への説明を続ける。

仕方なく、俺は、言われたとおりに右手を前に出した。

ズシャッ！

ついに、バケモノを閉じ込めていた渦が、完全に消し去られてしまふ。

マジかよ！

無傷ではないものの、あれだけ轟々と燃えていた炎をくらっても、まだバケモノは立っていた。

炎に強い体質か何かなのか！？

「人差し指でバケモノを指して！ 左手で右腕を支えて！」

体にたまっていた力が、風船の中の空気を押し出すように、一気に抜けていく。

俺が放った雷撃は見事命中し、バケモノの体を貫き通した。

「ギャアアアアアアアアアア……！！」

「目には目を、歯には歯を、だ。同じ腹の穴抜きで、かん、弁、してや……る……」

くらっ、とめまいがして、俺は倒れ——はしなかった。

よろけた俺を、会長が受け止めてくれたみたいだ。

決めゼリフを、とても思ったが、限界を超えて、なお無理やり動かしただ俺の体には、立つことは愚か、話す力すら残ってなかった。

* * * * *

会長は自分の膝に俺の頭を乗せ、俺の体をゆっくりと寝かせていく。

いわゆる、膝枕だった。

本当なら、会長のその白魚のように美しく、すべすべとした肌を、思う存分満喫したいとこだが、ご存じのとおり、今の俺にはそんな余裕はない。……無念。

今にも閉じてしまいそうな虚ろな目で、バケモノがいた方を見る。バケモノは、光る粒子となって、空高く飛んで行っていた。

脅威が去ったことを確認して、ホッと安堵の息をつく。

と、急に眠くなってくる。

——ああ、死ぬんだ。俺。

嫌な感じはしなかった。

ことを終えた、達成感というやつのおかげだろう。

だからって、当たり前だが、いい気分というわけでもない。

一番いいのは、朝起きて、これは全部夢でした。みたいなオチ。

なんだかんだ言っで、やっぱりまだ死にたくないしな。

いや、具体的には、兄貴を超えるまでは、死ねない、か。

だから祈ろう。

これらが全て、夢であることを。

ゆっくり瞼を閉じていく。

視界が、闇に支配されていく。

「おやすみ、そして、これからよろしくね。賢者の新入生君」
サウマン

意識が遠のいていく中で、最後に会長の声を聞いた——気がした。

雷撃 Ⅱ チカラⅡ（後書き）

いかがだったでしょうか？

章についてなんですが、shalku自身、まだその調整に悩んでいるので、ころころ変わるかもしれません。気が付くと、「編」みたいになってるかも。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

閑話休題

桜木白真〓サクラギハクマ〓（前書き）

ちょー短いです。

ホントは前話と合わせて投稿するつもりでしたが、

フツーに忘れてしまいましたwww（笑）

どうぞ。

閑話休題

桜木白真「サクラギハクマ」

——桜木白真——

『困っている人を見かけたら、迷わず手を差し伸べる。そういう人になりなさい』

小さい頃からウンザリするくらい、言われ続けてきたことだ。祖母は昔、カトリック教会のシスターをやっていて、俺と、八歳も年の離れた兄さんは、祖母独自の教育を受けて、育ってきた。朝の、始めのお祈りから、夜、寝る前の聖母賛歌まで。聖書の内容も、無理やり憶えさせられたもんだ。

だが、そんなハチャメチャな教育を真摯に受けていただけであってか、兄さんの聖人君子っぷりはすごかった。

道端のゴミをとって捨てるような小さいことから、銀行にいる時に来た立てこもり犯三人を一人でねじ伏せてしまうような大きすぎることで。本当に優しく、強い人だった。

そんな兄を持てば、弟である俺が憧れるのは自然の摂理で。それは、高校生になった今でも変わらない。いや、これからも、一生永遠に変わることはないだろう。

今は、世界中のたくさんの困っている人に手を差し伸べるべく、世界を転々としている兄貴。まったく、追い抜く側にもなってみるっての。

だから、俺の夢は、そんな兄貴を超えること。

今は足元にも及ばないけど、いつか、必ず追い抜いて見せる。

そこに、いかなる試練が待っているようにと。
必ず――

閑話休題

桜木白真「サクラギハクマ」(後書き)

いかがでしたか？

白真の過去についての詳しい話は、おいおい話すつもりです。
とうぶんはまだですけどね。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

日常と夢 「デジャヴ」 (前書き)

予約掲載の存在に初めて気づいた。
これ、実はすごいんじゃない？

そんな今更なことに感動しました。
この話は予約掲載じゃないけど。

それでは、
どうぞ。

日常と夢 「デジャヴ」

朝、お日様はようやく顔を完全に出し、雀がチュンチュンと可愛らしく鳴き始めた頃、カーテンの間から差し込むわずかな光に照らされ、俺は――

「デジャヴ!？」

――ゆっくりと、ではなく、はね起きた。

いつもと変わらない、自分の部屋。自分のベットにいる俺。

頭がぼーっとしたまま、見渡すこと約十分。

「て、あれ?」

やっとなんて。

「なんで、俺はここにいますのせう……?」

寝起き特有の幸せまどろみを放棄して、俺はパズルのピースを合わせるように、一つ一つ、昨日のことを思い出していく。

目覚め、時計、入学式、殺気、昼食、カラオケ、ボーリング、ゲーセン、鍵、夜の学校、警備員、怪物ゴリラ、生徒会長、炎、ケータイ、圏外、電話、エロ本、三沢先生、桂先生、バケモノ、針、腹部、救世主、実験物、怒り、拳。

そして――雷撃。

身震いした。

思わず意識が自分の右手に向く。

この手から、雷撃が、出る?

いやいやいやいや! まさか……ねえ?

「……………」

……………。

結果だけ言うと、雷撃は出なかった。

いや、よく考えてみたら、もし昨日のように勢いよく雷撃が出て
も、このアパートをぶっ壊してジ・エンドだったわけで、少しほっ
とした。朝からあの大家さんの世話にはなりたくない。

けっ、決して、クマのぬいぐるみ相手に変なポーズをとる自分の
姿が、シユールすぎて無性に恥ずかしくなったりしたからじゃ、な
いんだからねっ……！

……これから一日が始まるというのに、すでに半日分疲れている
自分がいた。

だがしかし、これで雷撃が出ないということは……？

「まさか……ホントに、夢オチ？」

落ち着いて考えてみれば、当然のことだったのかもしれない。

もし、夜でのことが本当だったとしたら、俺の体に傷一つないの
はおかしいし、家に戻っていることもつじつまが合わない。会長さ
んが俺を運ぶにも、俺の家を知っているはずがないわけで、何もか
もが成立しない。

バケモノとの戦い？ そんなことが、現実起こり得るだろうか。

「……何しているんだか。俺ってやつは」

そうだ。あれは、ちょっとリアルな夢だったんだ。

おそらく、昨日は鍵を見つけた後、そのまま帰ってきたんだ。
そっくに違いない。

「よしっ！ 朝食作るか！」

心のもやもやに終止符を打って、いつも通りキッチンに向かう。

が、

ピンポーン！ ピンポピンポピンポーン！

ガチャガチャ、がちゃ。

「おいゴラア白真あ——！ とつと来なさいよ——

！ 二日連続パジャマです。なんて、なめたこと言ったらタダじゃ
済まないわよあ——！」

「白真あ！ た、頼むからガチで早く来てくれ！ でないと、彩菜
が、俺の足を！ 足をおおおおおお。○×●■↑

——！」

直した時計は、きっちり正しい時間を刻んでいる。

今回は、どこぞのパジャマ姿のバカを庇ってはくれないらしい。

てことで、俺ピンチ。

「やつちまったあ——！ ——！ ただでさえ、すでに

半日分の疲れが溜まっているこの状態で、飯抜きであいつらの相手
をしたら、夢じゃなくてホントにぶっ倒れちまう！」

慌てて着替えて、鬼人あやなと半・死体しょうたのいる玄関へと向かう俺。

やっぱり今日も平和じゃなかった。

というか、結局デジャヴだった。

* * * * *

「そ、そういえば、日和は？」

猛ダツシュで、彩菜と二人、校門を駆け抜けた後（彩菜のサンドバックにされてのびてしまった将太は置き去りにしてきた。）、お仕置きと言う名の関節技をきめられて一息ついたところで、ずっと気になっていたことを口にした。

「はあ？ 今さら？」

「聞こうとしても、答えてくれなかったじゃん！」

「どこぞのバカのせいで走る羽目になったからでしょ！」
ぐっ、反論できない。

「ま、まあそれは置いといて——」

「あ、こら逃げるな！」

「閑話休題だ！ 執行猶予だ！ とにかく、日和はどうしたんだよ」
「……そんなにあの子のことが気になるわけ？」

なぜか不満そうな顔で睨まれた。いや、今おかしいことは言うてなかった……はず。こいつの地雷は複雑すぎてよく分かん。

「いつも四人で一つの我々が、仲間ひとり欠けて気にならないとでも？」

嘆息交じりに俺は答える。ていうか、チャイムそろそろじゃないっすか？

「……じゃあ、私がいなくなったら、同じように心配してくれる？」

「え、なにその死亡フラグ。そのまま戦場に赴いてどーんみたいな」

「そんなつもりで言ったわけじゃないわよ！ ……肝心のフラグは立たないし……」

「あん？ なんですと？」

「なっ、なんでもないわよっ！ とにかく！ どうなの、心配してくれるの！？」

補足しておく、『な、なんでもないわよ！』と『とにかく！』の間に、なぜか鳩尾ヒットを食らって、腹を押さえていたりする俺よく聞こえなかったから、聞き返したただけなのに……ぐすん。

ともあれ、これはちゃんと答えないと追撃をもらうパターンと見た。

「心配するに決まってるだろ？ お前は、俺にとって、大事な人なんだからな！」

「……ねえ、今のルビ変換、なんて読むのよ？」

「そりゃ、『大事な人』と書いて『ともだち』だろ。他に何かある？」

くだらだら話していると、教室の前まで来ていた。

「……はあ。そんなことだと思った。まあいいわ、それじゃあね」
なんとか機嫌取りに成功(?)。九死に一生を得るとはこのことだと思う。

「わかった。そんじゃあ——って！ だから日和殿は!？」

「私がどうかしたの？ 白真くん？」

「はいっ!？」

突然の背後からの声に、思わず変な声をもらしてしまったが、振り返ると、そこには張本人である日和がいた。

「あ！ 日和、なんで朝いなかったんだ？」

「へ？ 今日は自転車がパンクしちゃって使えないから一足先に学校に行くって、二人には言っておいたんだけど……聞いてなかったの？」

「あい、ほんと、ひあー、だ。たく、不要な心配だったわけか」

「なんか、損した気分だ。あー、もー！ 朝から踏んだり蹴ったりだ。」

「し、心配してくれたの？」

「そりゃもちろん」

「そつ、そつかあ……心配してくれたんだあ……えへへ……」

友達として、当たり前のことを言っただつたのだが、なぜか日和は思いつき照れているようだった。彩葉に限らず、年頃の女の子が考えていることは、よく分かん。

照れている日和をぼーっと見て、そんなことを考えていると。

パンッ！

「いつ!？」

頭を強く叩かれた。

「何奴!？」

頭をさすって後ろを振り向くと、

「朝から女子の体をなめまわすように見おって、いやらしい男だな、桜木」

出席簿を片手に、ニヤついた顔で俺に話しかけてくる美人がいた。俗に言う、ボン・キュツ・ボンな抜群のプロポーション。肩までのつややかで美しい黒髪。そして、黒のミニスカートと胸元がぱっくり開いた、主張の激しい服装。

まごう事なき、我らが担任の、三沢鏡子先生だった。

そのふしだらな服装はともかく、傍から見れば、文句のつけようのない、超が付くほどの美人教師。

だが、騙されちゃあいけない。

「先生と一緒にしないでください！ ていうか、『いやらしい』とか、あなただけには言われなくなかったよ!」

「なんだ桜木。それではまるで、私が毎日男女関係なく、生徒の体をなめまわすように見ているみたいじゃないか」

「『まるで』ではなく、事実を言っているんですよ!」

そう、この教師。はつきり言えば超が付くほどの変態なのだ。「超」美人なのに、「超」変態。本当に残念すぎる。

「バカな! なぜそれを日課にしているのを知っているんだ桜木!？」

「日課にすんなあ——！ あんたは教え子をどういう目で見て
いるんだ！」

「ムラムラ」

「日和い、——〇番だ！ 校内に変質者がいると——〇番するんだ
今すぐただちに早急にい！」

「……白真くん。嘗め回したいんだ……私のこと……」

「あれ、まだそこに着眼中！？ そしてなんかおかしな方向に修正
されている！？ いや、だから、違うつて！ 俺はただ」「お前と
一緒に寝たい」「だけなんだってちょおおおお！？ 先生、変な
セリフ被せないでくださいよ！ 日和が立つたまま気絶しているじ
やないですか！ ああもう女つてホントに分からねえ——！」

その後、俺の絶叫とともに朝のチャイムが鳴り響き、その場の茶
番はとりあえず収まった、のだが、おかげで俺はまだ授業前だとい
うのに、疲労度マックスで机に突つ伏すハメになりましたとさ。

あ、ちなみに、サンドバックな将太くんは結局遅刻したそうです。

* * * * *

「白真くん。その……、付き合ってください！」

ホームルーム終了直後に、荷物整理を行っていた俺のもとへ駆け
つけてきた日和は、開口一番、そんなことを言い出した。

日和の表情は、真剣そのものだった。瞳も、まっすぐ俺をとらえ
ている。

茶化すことなんて、できそうにもなかった。

だったら、それ相応の態度で、答えてやらなきゃいけないよな。

すう——っ、はあ——っ。

一つ、深呼吸をして、俺は覚悟を決めた。

そして、俺も日和の瞳をまっすぐに見つめて、自分の気持ちを、

正直に、伝える。

「いいよ——で、どこへ何をしに？」

「……白真くんは、もし真剣に告白されても、そう言って女の子の純情を踏みにじるんだろうね……」

日和から冷たい目で見られる。あ、あれ？　なんか今まズった？　俺。

「え、えーと、『今日はどこか行きたいところがあるから、一緒に付いて来てほしい』って意味なんじゃないのか？」

「それはね、そうなんだけど……はあー……本当に……はあー……」
「なんか、今のたった数分のやり取りで、かなり疲れていらっしやった。ていうか、もしかしくなくても、俺のせい？」

「あ、あおう。日和さん？」

「あ、うん、えつとね。厳密に言くと、白真くんと会って話したが、つている人がいて、その人に、三人でお昼を食べないかって、誘われているんだけど……」

俺と、話したがっている人？

「別にかまわないけど、彩菜と将太は？」

「二人は、クラスの人と食べるみたい。さっき廊下で言っていたよ」「そっか。じゃあその誘い、受けると思いますか」

バックを持って席を立ち、日和と共に教室を後にした。

日常と夢 「デジャヴ」(後書き)

いかがでしたか？

実は、→の決まり文句がビミョーに違ったりする。

「いかがでしたか？」と「いかがだったでしょうか？」の2パターンあります。

shallku自身、今気づいたのですが(笑)

今宵は今更な発見が多いのう。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

植物と炎 ⅡフタツノチカラⅡ（前書き）

どうぞ。

植物と炎 ⅡフタツノチカラⅡ

主婦や学生で賑わう商店街を、日和と並んで歩いている。

待ち合わせ場所のカフェテリアに着くまでの間、その会いたがっているという人について、俺は日和にいろいろ尋ねた。

が、日和は「会えば分かるよ」の一点張りで、一向に答えてくれない。

「そんな、答えられないわけじゃないんだろ？」

「うつ……そうだけど、私がだらだら説明しなくても、本当に、会えば一瞬で分かるから。今は我慢して。ね？」

ほら、ずっとこんな調子。

俺も、ムキになって聞くほどのことじゃないとは思っているのだが、相手のことを何一つ知らないというのは、どこか不安を覚える。相手の名も知らず、戦場に赴くようなものだ。

まあ、話をするだけで戦場っていうのは、大げさかもしれないが、そう、一人考えていると、

ぴた。

？

日和が、突然、足を止めた。

「どうかしたのか？」

「白真くん」

『戦場に赴く』なんて悪い冗談、言わなきゃよかったと、ホントにそう思った。

「ごめん。会いたくない人と会っちゃったみたい」

バタバタバタッ。

「！！」

日和が言い終わると同時に、周りの人たちが、一斉に倒れる。この商店街で立っているのは、俺と日和だけになった。

「なっ！　ちよっ、大丈夫ですか！？」

傍らに倒れている人のところへと駆け寄り、体を揺する。

何の怪我もなく、眠るように気絶していた。

その気絶の様子が、あの時の警備員と重なる。

夜の学校での出来事が、一気にフラッシュバックしてくる。

おい、待てよ。

ウソだろ？

これじゃあ、まるで、あの時の……！

「白真くん！　危ない！！」

日和の必死の声で我に返ると、

目の前には、俺に向かって鎌を振り下ろす、カマキリのようなバケモノがいた。

その目、その姿、その殺気。

迷いが、確信に変わった。

ガンッ！！

勢いよく振り下ろされた鎌は、俺がいた場所を強打し、コンクリートを粉々に砕いている。

日和の決死のタックルのおかげで、俺は地面を転がり、難を逃れた。

「大丈夫！？」

「あ、ああ。……でも、これって、やっぱり……」

「夢じゃないよ」

俺の隣で、日和はきつぱりと断言する。

「白昼夢とか、幻覚とか、そんなことじゃないよ。信じられないかもしれないけど、これが現実。そして——」

ふと、目線を外すと、話している日和の後ろに、カマキリとは別の、牛に似たバケモノ斧を持って襲い掛かってくるのが見える。

二体いたのか！？

「日和！　後ろに別のが——」

俺は慌てて叫ぶが、

ボオオオオン！！

「——そして、あの夜での出来事も、全て現実よ。白真君」

颯爽と現れた篠原生徒会長による爆発音で、俺の叫びはかき消された。

「会長！？　なんで、こんなところに……！」

「私が、あなた達とお昼を食べる予定だったからよ」

へ？　なんだって？

てことは、話って、会いたがってる人って、まさかこの事、この人だったのか？

「日和！　あなたのチカラ、性質上、牛のほうコイツが都合いいんじゃない？」

「はい！　カマキリ（こっち）、お願いできますか？」

日和のチカラ（……………）？

まさか……！

「おい、日和！　まさかお前も——」

「ちゃんと言うから」

日和の、今まで聞いたことのないくらい真剣な声に、思わず俺は黙ってしまう。

「この後で、ちゃんと全部話すから。だから、今は何も言わないで、ただ私たちを見ていて」

そう告げる日和の表情は——それこそ、戦地に赴く兵士のように、凛々しかった。

背を向けていた会長も、顔だけをこちらに向け、微笑んでいる。まったく。

そんな顔されたら、ノーなんて言えるわけ、ないじゃないか。

「——分かった」

だから、俺も同じように、真剣なまなざしで、しかし、笑顔で答えた。

「ありがとう」

日和のその一言を合図に、女子高生二人は、くるっと一八〇度回転。そして、自らバケモノ相手に突っ込んで行く！

誰よりも先に動いたのは、会長だった。

すでにその右手の中に仕込んでおいた炎の玉を、カマキリの左足めがけて発射する。

かなり至近距離からの攻撃だったため、敵の足元は簡単にすくわれた。

「キシャアアアアアアアア！」

お決まりの奇声を発しながら、盛大にしりもちをつくカマキリ。

だが、そんな姿勢でも、鎌を精いっぱい伸ばし、斬りかかんとする。

会長も、とつさに横に転がり避けるが、左脚にかすったように、擦り傷になっていた。

一方、日和は自分から距離を詰めには行ったが、会長のように先手必勝、と言うわけではなく、相手の牛が振り回す骨の斧を避けることに専念している。

しかし……知らなかった。

日和って、こんなに身軽に動けるんだな。

もともと運動神経がいいのは知っていたが、ここまで俊敏な身の

こなしができるとは思わなかった。これこそ、『蝶のように舞う』
ってやつなんだろう。

すると、ヤキが回ったのか、牛のバケモノは、両手に持っていた
斧を二つとも投げつけてくる。

日和は難なく避ける。

だが、あるうことか、斧の片方が俺に向かって飛んできた。

「え？ うそ、ちよつ、マジ！？」

ぼーっと他人事のように戦いを傍観していたせいで、体がすぐに
反応できない。

やばっ――

だが、

ドッゴン！

突如、左から飛び出してきた大木に突き飛ばされ、斧は俺の視界
から消えていった。

へ？ 大木？

なぜに大木？

目の前にある大木。その発生源を辿ると、

そこには、地に右手をつき、そこから這うように生えた木々を操
る、日和の姿があった。

色白のか弱い雰囲気を持つ日和と、地面で力強く蠢く大木という
組み合わせに、俺は目を疑わずにはいられない。

しかし、これも事実。

これが、日和のチカラ……！

日和の操る大木は、進行方向をバケモノに変えて、勢いをそのま
まに突っ込んでいく！

ゴンッ！ と鈍い音がしたかと思えば、あのいかにも重そうな牛

のバケモノが、吹っ飛ばされていた。
しかし、それだけじゃ終わらない。

ボオオオン！！

バケモノが吹っ飛ばされたその先には、いつの間にか会長が炎の玉をぶつけていた。

あれ？ カマキリは？ 会長はカマキリのバケモノとやり合っていたはずじゃ？

俺は会長がバケモノと交戦していた場所に目を移す。

「！」

そこに怪物の姿はすでに無く、光る粒子が空高く上がっていた。

あの短い間に、もう倒していたのか……！

「ブルワアアアアアアアアアアアアアアア！」

前後挟み撃ちの形で強い衝撃を受けたバケモノは、勢いよく地面にたたきつけられ、動かなくなった。

勝負あり、つてとこだろう。

日和の足元にあった木々が、地面の中へと消えていく。
会長も両手の炎を軽く振って消す。

「……すげえ」

思わずぼつりとつぶやく。

すごいのはもちろんなんだが、それだけじゃない。

とても、綺麗だった。

二人の容姿もそうだが、今はそれについてじゃない。

戦い方が、すごく綺麗だったのだ。

慣れとはとても恐ろしいもので、バケモノとの混戦が二回目とな

ると、傍観者としての立場から、目の前の戦いをじっくり観察・分析できるようになっていた。

日和も会長も、敵の行動をよく見て最小限の動きでかわし、攻撃を仕掛ける時がありったけの力を振う。それでも、息ひとつ上からず、ペース配分も考えている。

これが、何らかのスポーツの試合とかなら素直に感嘆するだけでいいが、そんな甘いものじゃない。

戦い。悪く言えば、殺し合い。

それを、平然とやってのける。

こんなのは一般の女子高生がやれるようなことじゃない。まるで訓練を積んできた兵士のようなのだ。

「大丈夫だった！？ 白真くん！」

「見たところ、目立った外傷は見当たらないわね。どこにも違和感はないかしら？ 白真君」

一息ついて、日和は俺の方に振り向くと、心配そうな顔をして尋ねてきた。会長も俺へと歩み寄りながら、心配してくれている。

「あ、ああ。大丈夫だ日和。先輩も、ありがとうございます」

「そう……よかった……」

「生徒会長として、自分の学校の生徒を気にかけるのは当然よ。白真君」

「いったい誰が信じるだろうか。」

こんな素敵な女子二人が、実は人知れずバケモノを退治している。なんておとぎ話を。

だれも信じないだろうな。

俺だってまだ頭が混乱している。会長だけでなく、今までずっと近くにいた友達が、バケモノ達と戦っていたんだから。

信じがたいことばかりだ。

そして何より――

「会長……」

「解っているわ白真君。昨日の夜も、なんだかんだ言って話してあげられなかったものね。とりあえずこの空間を出てから――」

その時だ。

「涼華さん！ 危ないです！」

日和の切羽詰まった声。会長の後ろ、会長を挟んで俺の前に、先ほどまで倒れていたバケモノが、ゆっくり拳を振るってきていた！ 会長は素早く振り向こうともするが、時すでに遅し。この距離では、どう動いたところでバケモノの拳が先制をとってしまう。

日和も焦って地面に手をつこうとするが、こちらは発動までの時間が遅い。

誰もが間に合わないと悟った。
が、

バチバチィ――ン！！

無意識に、ホントに無意識に、気が付いたら俺は、雷撃を放っていた。

会長直伝の構えもせず、ただ、右手を差し出しただけで。

日和も会長も、そして、俺自身も。みんなが驚きを隠せずにいる。
「ブギヤアアアアアアアアアア！！」

三人が絶句する中、至近距離から雷撃を受けたバケモノの悲鳴だけが、よく響く。

——そして何より、
俺自身もおとぎ話^{おとぎばなし}の中の登場人物^{でいせうぶつ}だってことが、
一番信じられ
なかった。

植物と炎 ⅡフタツノチカラⅡ（後書き）

いかがでしたか？

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

喫茶店 「セツメイ」 (前書き)

こつ、日常会話が上手く書けない。

それは語彙力だとか、表現力だとか、上手いせりふ回しだとか、いろいろあるみたいで。

修行あるのみだなあ。

そんなことを思いました。

どうぞ。

喫茶店 Ⅱ セツメイⅡ

「……おいしい」

「本当だ！ この紅茶、とってもおいしいです涼華さん！」

「でしょでしょっ！ ここ、穴場なの！ 誰にも言っちゃだめよ？」

アーケード商店街の一角にある、とある喫茶店。

そこで優雅に紅茶を嗜む、戦場帰りの高校生三人。

今、俺の目の前には美少女が二人。

店内にいる男達から向けられる刺々しい視線。

彼らの目は語る。

（テメエ、そのリア充っぷりは見せしめのつもりかぁゴルア！？）

店員の態度も、二人と俺とでだいぶ違う。

日和&会長の場合。

「ご注文はお決まりでしょうか？（にににこ。見方によってはニヤニヤ）」

俺の場合。

「注文まだつすかア？（小さく舌打ち。だるそうな顔で眼飛ばし放題）」

ご、ごめんなさい！ なんかスイマセーン！

分かります！ 皆さんの気持ちはものすごく分かります！ なんか今の俺勝ち組くさいですよ！ でもイチャついてるわけじゃないんです！ こう見えても僕ら戦場帰りなんですっ！

なんでだろう。ものすごく悪いことをしている気分になった。

「あ、あの会長。そろそろ本題に……」

ともかく、このままイチャイチャムード全開だと、あまりの視線の痛さに耐えられなくなるので、ここらで話題転換を試みた。

「あ！ ご、ごめんね！ 私も普通にデー、じゃなくて、お茶会楽しんでちゃって……」

「ん？ ああ……そうね。そろそろ話してあげないと、落ち着かないわよね」

そう言うのと、二人はカップを机に置いて、表情を引き締めた。

「さて、どこから話したものか……あ、先に言っておくけれど、これから話すことはすべて事実よ。今白真君が持っている常識は一切合切全部捨てて、覚悟して聞きなさい」

「は、はい……」

覚悟つてなんだ？ そこまでの話なのだろうか。

「ならよし。じゃあ、まずはやっぱり、『世界の姿』かしらね」

「『世界の姿』？」

俺が首をかしげる向かい側で、会長は静かに頷く。

「そう。白真君、この世界、『地球』という世界は、どうやって生まれたと思う？」

「ず、ずいぶん突飛な話ですね……そりゃ、ビックバンが起こって

――」

「ブー。不正解」

「えええー……」

「常識は捨てなさいって言ったでしょ？ そんなのに囚われていては、この先の話を理解できないわよ」

「は、はい。すいません」

「ならよし」

そう言った会長は硬い表情をくずして、俺にほほ笑みかけてきた。うわ。確かにこりゃモテるわな。

その笑顔が思いのほか可愛く、少々照れる。将太が興奮するのが、少しだけ理解できた。

「こ、こほん！」

？

すると、日和が大きめの咳をする。風邪だろうか？

「それじゃ続きを。質問は後でまとめて、ね」

「はい」

「世界は、神様によって作られたの」

「……」

「うん。そのコイツは昼間っから何バカげたことを言っているんだみたいな顔は止めてくれるかしら？ 一応、大真面目に話しているのだけど」

「いやあ、そう言われましても。さすがにそれは——」

「ある日、神様は世界を作りたくなりました」

「あ、完璧にスルーですか。しかも語り口調で行くんですか」

「ツツコミ厳禁！ で、神様は世界を作りました。それも、一つや二つではなく、かなり多くの数の世界を。そして、各々の世界で生まれた人々は、当然のように文明を開化させ、発展していききました。しかし、全ての世界が良い文明を築けたかと言えば、そういうわけでもありません。不運にも、あまり恵まれない世界の人々もいました。そのような世界は、神様からすればただの不良品。すぐに消し去っても構わないものでした。ですが、こうも世界同士で格差が広がってしまうと、バランスが崩れて、全ての世界が破滅してしまう。神様としては、せっかくうまくいった世界までも潰れてしまうのは、惜しいところがありました。そこで、世界のバランスをとるために、神様は、不運な世界の人々にこう言ったのです——」

まるで怪談話をしているかのような雰囲気で、一度言葉を区切る会長。

隣を見ると、日和がハラハラしながら会長の話を聞いていた。

「いやいや、あなたもう知ってるんでしょ。この話の結末。」

「それで？ なんて言っただんですか？ 神様は」

正直、話がどこぞのマンガのようで、いまいちピンとこない俺は、

特に意味もなく、会長を急かした。

それが、いけなかった。もうちょっと、身体を緊張させて聞いておくべきだった。

「『裕福になりたかったから、最も裕福な世界の人々を皆殺しにして、その世界を乗っ取っちゃえばいい』と」

！

「——気づいたみたいね、白真君。そう。神様が作り出した世界の中で、最も裕福で、最も環境に恵まれている世界。それが、私たちのいる、この世界なの。でも、神様もバカじゃない。一度にいくつもの世界から攻撃を受けてしまえば、この世界はすぐに破滅する。そこで神様は、私たちの世界の人間をランダムに、力を授けた」

「もしかして、それが——」

「サヴァン スキル
賢者能力」

今まで静かに話を聞いていた日和が、俺の言わんとしたことを代弁してくれる。

「魔法でも超能力でもないし、同時に両方でもある、神様のチカラ。それが賢者能力。そして、それを扱う人間こそが、『サヴァン
賢者』……白真くん、私たちのことなんだよ」

ゴクリ。

鳥肌が立つ。

話自体は突飛なのだけど、一応筋は通っていて、思っていた以上に信憑性が出てきた。

「昨日の夜や、ついさっきのバケモノ。彼らが異世界の住人、通称『クリーチャー
異界人』よ」

「クリーチャー……」

「クリーチャーは、どういう仕組みか知らないけれど、この世界に飛

んでくることができる。でも、いきなりこちらに入ってくるわけじゃないの。奴等は、その世界の着地点に『亜空間』と言うものを展開して降り立つ」

「亜空間って……爆発音や、クリーチャーの雄叫び、さっき周りの人が倒れていったのも、その亜空間の所為なんですか？」

「そのとおり。亜空間に居られるのは、クリーチャーと力のあるものだけ。無関係の人間は姿がそこにあるだけで、実際は亜空間にはいない」

「？」

姿はあっても、そこにはいない？

「つまりね、白真くん」

俺が理解できていないことに気付いた日和が、会長に代わって説明役を買って出る。

「そもそも亜空間っていうのは、着地点に作り出すものじゃなくて、着地点をこの世界から切り離すものなの。亜空間は『襲ってくるクリーチャーの世界』と『私たちの世界』のはざまにできる。私たちの世界の一部分を、世界同士の架け橋にする。で、そこには力を持つ者しか出入りできない。だから、無関係の人はその空間からはじき出される」

「はじき出されるって、あの気絶のこと？」

「ゲームをしていると、倒したモンスターがしばらく経つとそこから消えたりするでしょ？あれと全く同じ。私と涼華さんが戦っている間に、倒れていった人たちが亜空間からいなくなったの。体がまだ残っていて、それに衝撃を加えてしまっても、倒れた時点で亜空間からはじき出されているから、大丈夫」

うん、まだ完璧に理解したわけじゃないけれど、

「とりあえず、クリーチャーとやり合っている間は、無関係な人を巻き込まなくて済む。ってことだよな？」

「え？ まあ……うん」

正直、亜空間だとかクリーチャーだとか神様だとか、そこんこ

るはよく分からないし、どうでもいい。

だが、人を襲うバケモノが存在するということは事実だ。身をもつて体験している以上、否定することはできない。

「それだけ分かれば充分だ」

だから、今考えることは、無関係な人の被害の考慮。

「もうこれ以上無関係な人々の幸せを奪われるのは、ごめんだからな……」

そして、つい考えてしまう。

もし兄貴だったら、もつと上手にやれていたんじゃないかって――

「……くすつ」

？　なんか笑われた？

顔をあげると、驚いたような会長の顔と、くすくすと小さく笑う日和が何やら二人で内緒話をしている。それも、俺をちらちら見ながら話をしていて、かなり気になる。聞いていいのだろうか、それとも、女の子同士の秘密の会話には、無理やり入り込まない方がいいのだろうか？

「……ふふつ。ほら、白真くんはこういう人ですから、大丈夫ですよ」

「……ええ。本当にいい子なのね……ちょっとびつくり」

「あ、あのう、俺へんな事言いました？」

結局俺は耐え切ることができず、二人に尋ねた。

「いいえ、そんなことないわよ。白真君を信じられるかどうか、ちよつと日和と話していただけだから」

「信じられるかって……俺、信用されてなかったんすか」

思いもしなかったことを言われて、ちよつとショックだ。

「どうしても、ね。……サヴァンを信じるって、そう簡単にできることじゃないのよ」

そう言う涼華さんの表情からは笑みが消え、目がスツと鋭くなる。日和も表情を硬くする。

俺も触発されて背筋を伸ばす。再び三人の間に俄かな緊張感が漂

った。

「白真君。他のサヴァンと出会ったときは、少し警戒の念を持った方がいいわよ」

「なぜです？ 同じサヴァンなら、力のある者同士、仲間じゃないですか」

「その力が問題なのよ」

ボツ。

言うが否や、会長は人差し指を立てると、その先端からロウソク程度の火をだす。

「ちよつ！ 危ないですよ、こんな一般の方々の前で！」

「確かに、この力を人の多いところで盛大に使ったら、無関係な人達を、危ないことに巻き込んでしまうかもしれないわね。じゃあ、白真君」

ふつ、と会長は息を吹きかけて火を消すと、鋭い目で俺を見つめて言う。

「もし私がお金欲しさに、今ここにいる人達を人質に取って立て籠もる。なんて言ったらどうする？」

「なつ——」

今の会長の発言が、ifの話だってことはもちろん分かっている。しかし、その裏側にある本当の意味が分かり、俺は絶句した。

「分かったでしょう。自分の力を利用して、犯罪に走る人だっているのよ。みんながみんな、白真君のような考えを持っているわけじゃない。憶えておきなさい」

確かに、こんな鬼畜な力を持っていたら、ちよつとした警察など相手にならないだろう。

そう思うと背筋がゾツとした。

「敵は、クリーチャーだけじゃないってことよ」

冷静な口調で、物騒な事を言いのける会長。

その言葉は、同じサヴァンを探しだし、協力し合おうと考えていた俺の考えを、いともたやすく砕いてしまうもの。

世界の真実はそう甘くはなかった。

喫茶店 〃セツメイ〃（後書き）

いかがでしたか？

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします

三途の川 「オンスイ」 (前書き)

あんまり女の子と接してこなかったから、女の子のセリフや気持ちが書きにくい。

うち男子校だしなあ。

会う機会がない場合は、少女漫画とかも読んだほうがいいのか？

そこらへんどう思います？

教えてくれるとうれしいです。

ま、本編を、
どうぞ。

三途の川 Ⅱ オンスイⅡ

ドサッ

「……疲れた……」

たくさんの教科書でパンパンになったスクールバックを投げ出し、俺は勢いよくベッドへとダイブする。

今日一日、お日様の光を受けて続けた布団は、ポカポカでふわふわで、俺の疲れ切った体を優しく包み込んでくれる。

「これから、か……」

俺は布団に顔を埋めたまま、喫茶店の帰りでの涼華先輩との会話を思い出していた。

「それで、今後の予定なのだけど」

「今後の予定？」

味の割に手ごろな値段だなー、なんてことをぼーっと考えながら会計を済ませたところを、会長に話しかけられたため、俺はつい裏返った声で復唱してしまった。

「その力を手にした以上、今までの平和な日常に戻るのは、ほぼ不可能よ」

「なぜ言い切れるんですか？ 隠して生きててもいけるでしょうに」
「ムリよ。クリーチャーは基本、私たちサヴァンの近くスキルに姿を現すの。たぶん私たちのサヴァン能力を本能的に感じ取って、それを目印に来るんじゃないかしら。暗闇で遠くに光るものがあつたら、なんだらうと思うって近づいてみるでしょ？ それと同じだと思うわ。」

だから、こちらが気づかない限りは逃げられないのよ」

自信なさそうに言うことは、会長も全て理解しているわけではないのだろう。だが、もしそうだとしたら、俺はこれから、そのクリーチャーなるものと一生戦い続けることになるわけだ。

小一時間ほど前に起こった、あのハードな戦いを。

「それで、白真君は今後どうするつもり？」

「え？ 今後、ですか……」

ヤバイ。そういえば何も考えていなかった。高校生になってからありえないようなイベントが立て続けに起こって、そこまで頭が回らなかった。

会長と日和が話してくれたとおりなら、俺は嫌でも戦わなくてはならない。それは、もちろん自分の身のためでもあるし、格好つけてしまえば、この世界のためでもある。

だが、俺にそんなことができるのか？

「……力を手にした以上、戦うしかないのだと思います」

俺は俯き、低いトーンでしゃべりだす。

「……でも、俺はただ見ている事しかできなかった。先輩と日和が戦っている前で、俺は無力だったっ」

力を手にしても、何もできなかった。

頭では分かっているけど、体が言うことを聞かなかった。

ダメなんだ。

それじゃ駄目なんだ。

そんなんじゃ、誰一人として救えない。

こんなんじゃっ、兄貴を超えられない！

語尾に力が入り、拳を強く握り締める。

「せっかく得た力なんだ。これで今の平和を守るなら、俺は戦う

ことをためらわない。でも、今の無力な俺じゃ、何も守れやしない。
だから会長」

顔をあげ、しっかりと会長の目を見据えて、深いお辞儀をしながら言った。

「俺に、戦い方を教えてください！」

布団に突っ伏したまま、制服のポケットに手をつ込んで、ケータイを取り出す。

連絡先のラ行には、『涼華先輩』の文字。

あの後、快くOKをしてくれた涼華先輩とメルアドを交換すると、戦い方を教える代わりに、『会長』という呼び方はなんか偉そうで嫌だから、別の呼び方にしてほしいと言われたので、オーソドックスに『先輩』と呼ぶことにした。

トイレに行っていてあの場にいなかった日和にも、戻ってきてから説明をして、ちゃんと頼んだところ、やはり笑顔でこたえてくれた。

それで今日のところはひとまず解散して、明日の放課後からは、二人にみっちりしごいてもらう、という予定だ。

「……なんか、えらいことになっちゃったな……」

ごろん。と体を仰向けにして、右手をかざす。

この右手から、あの雷撃が放たれる。いや、今日の戦いを考えると、左手からも撃てるのか。

よく見ると、俺の両手がぶるぶると震えているのが分かる。それが、これからの戦いに対する恐怖心からの震えなのか、この

手でたくさんの人を救えることへの武者震いなのか。

それは、今の俺には分からない。

* * * * *

「ふあ……眠い」

「ちよつと。手で口を覆いなさいって、何度も言っているでしょ」
一体起きて何度目になるのか、俺はまた一つ欠伸をして目元をぬぐう。

今日もまた、例のごとく四人での登校なわけだが、俺はさっきから欠伸ばかりしていて、あまり三人の話に入れていない。

「まあ、白真も思春期ってこつた。あの白真が夜更かしするほど、気持ち良くなる動画だつてこぐぼりゅっ!!」

将太がニヤついた顔で何か言ってきたが、途中で呻いてよく聞き取れなかった。まあ彼の身に何が起こったのか、だいたい音で分かるよね。うん。だからあえて言わないよ。

「でも、確かにアンタにしては珍しいわよね。夜更かしは健康に悪いんだー、とかなんとか言つて、いつもそれなりに早く寝ていたじゃない。何やってたのよ?」

将太と入れ替わつて、今度は彩葉が俺に尋ねてくる。拳についている赤いものはきつと絵具か何かだろう。間違つても、血なんてものではないよね。うん。

……というか、そうであると信じたい。

「ふああゝ。別にいい?」

俺はごまかすように、欠伸をした。今度はちゃんと手で覆つて。

まあ、なぜ俺がこんなにも眠そうなのかと言えば、やはり昨日のことが原因だとは思えない。明日にも特訓が始まるのかと思うと、緊張してなかなか寝付けなかった。例えるなら、大事な定期テスト

の前日の夜みたいなの、そんな感じ。

だが、彩葉たちにそんなことを言えるはずもないわけで、俺は欠伸をしながら、その場しのぎの言い訳を必死に考える。

「『別に』って何よ。怪しいわね……まさか、将太の言うとおり、あんなものやこんなものを……」

「ま、そういうことにしといてもらって結構結構。ふああゝ」

「結構って！　ちよつと！　アンタそんなはしたないもののために夜更かしを！　……いや、この年頃の男にとってはそれがフツーだから、ここはむしろ普通でよかったとホツとすべき？　でもわざわざ夜更かしなんて……」

「ちよつ、なにになに何故、どうなされて！？」

眠くてうまく頭が回らず、言い訳が思いつかなかったからテキトーに答えると、彩葉がいきなり襟首を掴んできた！　のだが、締め上げるわけでもなく、そのままの状態でなにやらブツブツしだったので、今俺はなんとも中途半端な体勢である。

というか、顔が近い！　近いですよ彩葉さん！？　公衆の真ん前で、これはとてつもなく恥ずかしいんですけれども、って、聞こえています？！

……駄目だ、完全に自分の世界に入っちゃったよ、この人。

仕方なしに、横目で日和に助けを求めると。

「ど、どうしよう。白真くんも遂に一匹の飢えた狼くんに！　で、でも白真くんだったら、あんなことやこんなことをされても……いや、むしろそんなことまで……きやつ？」

あんたもか

い。

将太は——ってまだ気絶してんのかよ！　しかもニヤついた顔のまま鼻血だして倒れていると、残念ながら変質者の末路にしか見えないよ！　哀れすぎるよ！　てかぶつちゃけキモいよ！

幸い、まだ朝早い時間なのと、人通りの少ない道なので、周りには俺らしかおらず、誰にも見られていないようだ。今のうちに、目

を覚まさせない！」

「おい。もしもーし？ 彩菜さーん？」

「……さすがの白真も興味ぐらいはあるわよね。少なくともガチホモではないみたいだし。でも、やっぱりそういうのを見ているのは……」

呼びかけぐらいじゃ駄目か。

仕方なく行動に移そうと思い、彩菜の肩を揺すろうとした時、

「へーえ。朝っぱらから見せつけてくれるじゃない。隅に置けないわねー白真君」

声のした方を振り向くと、そこにいたのはなんとニやついた涼華先輩だった。

その意外すぎる人物の登場に、彩菜と将太一（声を聞いたらいきなり跳ね起きた）は啞然として、驚きを隠せずにいる。

そりゃそうだ。学校一のマドンナと謳われている生徒会長様が、いきなり声をかけてきたんだから。

だが見知った仲である日和には効果がないようで、今だマイワールド展開中。

「お、おはようございます。ていうか、先輩早いですね。いつもこの時間なんですか？」

「いや、いつもはもっと早いわ。日和もおはよう」

「ふえ？ え！ あ、お、おはようございます涼華さん！」

やっと気づいたよこの人。

「もっと早いって……家が遠かったり？」

「これでも受験生なのよ。朝の自習は頭がスッキリして、よく勉強に打ち込めるの。それに、生徒会の集まりもあるから。じゃあまた後でね、白真君」

「はい。受験勉強頑張ってください」

「また後で、です。涼華さん」

固まつたままの彩菜と将太にも軽く会釈をして、俺達から遠ざかっていく涼華先輩。少し先の角を曲がったところで――

「なんじゃそりゃあああああああああああああ
ああああ!!」

「ぐえっ！」

緩んでいた彩菜の手が突然強くなっただけでなく、将太まで掴みかかってきて、本格的に俺を締め上げてきた。

死んじゃう！
喉が潰れて逝っちゃう！
そして将太の鼻血まみれの顔が怖い！

「なんで！　なんでアンタがああ篠原生徒会長とそんなに仲良さげなの！　どういう事でどういう関係なのか、今すぐ説明しなさいいいいい！！」

「おまつ、見損なつたぞ白真あ！ 知り合いなら知り合いとちゃん
 と言つて俺に紹介して会長様の住所と電話番号とメアドを教えろお
 おおおお！！」

関係ってなんだよ！　そしてさりげないストーカー行為は自重しろ！　ていうか、苦しい……。

「ちよ……ギブギブ……」

「それに『また後で』って何！ 後で会って会長さんになに破廉恥な事をしようとしているのよっ！」

「お、おい！　もしかして、お前が珍しく夜更かしたのって、まさか会長と……白真、どうやらここらで俺とお前の長きにわたる戦いに、終止符を打たなくちゃならねえみてえだなあ……！」

お前らは俺が生徒会長と知り合いだってことだけで卑猥なことしか想像できるのか！　そして全く身に覚えのない回収不可能なバトルの伏線を張るな！　お前らとの十年の付き合いに不安をおぼえる

「
「
」
」

ガク。

ちーん。なんて音が聞こえた気がした。

「あわわわ！ ふ、二人とも手を離してあげて！ 白真くんの口から白い白真くんが！」

「え？ ちよつ、白真！ しっかりしなさいよ、ねえ！」

「くつ、白真……てめえの命、無駄にはしないぜ……」

三途の川つて、温水なんだね。温かさが身に染みて、気持ちいいや……。

無駄な豆知識を憶えた朝だった。

三途の川 「オンスイ」(後書き)

いかがでしたか？

次回、次々回ぐらいで新キャラ登場！

なるたけ次回に出せるようにします。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

亜空間 Ⅱ トックンⅡ (前書き)

遅れましたー！

予約掲載が一日ずれていたみたいです。

すみませぬm(ー)ー)m

なんてトラブルが起りましたが、

どうぞ。

亜空間 Ⅱ トッケン Ⅱ

「それじゃ、こちら辺で始めましょう」

放課後、校門の前で涼華先輩と合流し、練習にちょうどいい場所があるからと、先輩について行つたのだが……

「ここらつて、ここ町の運動場ですよ？　こんなだっ広いところでやるんですか？」

現在俺達は、近所の運動場に来ていた。ここのグラウンドは広く、遠くの方では子供たちが野球をやっている。

「そうよ？　ここなら万が一、特訓中にクリーチャーが現れても、広いからさほど迷惑にならないし、何より、最初の課題には都合が
良いから」

「何するんですか？　ていうか、日和は……？」

「あっち」

涼華先輩が指差す方へ振り向くと、なんかめっちゃ遠いところで日和が手を振っていた。

「とりあえず課題その一。『亜空間を使いこなせー！』」

ど^んど^んぱふ^ぱふー。

とは誰も言つてません。俺の妄言です。

「亜空間を使いこなす？」

「そつ。戦う前に、そのための場所を作れなきゃ本末転倒でしょう？　能力うんぬんの前に、基礎中の基礎を固めないと」

亜空間——クリーチャーと対峙する際に発動するフィールドのよ
うなもの。空間内で起こったことは現実世界には反映されない。ま
た、亜空間はサヴァン及びクリーチャーのみに対応され、一般人は
侵入を拒絶される。——だったかな？

「じゃあ、お手本を見せるから」

そつ言つと涼華先輩は、右手を挙げ日和に向かってぐつぱぐつぱ

と合図を送る。

それに答える形で、日和も同じ合図をしてきた。準備は万端らしい。

そして、涼華先輩が右手を横に屈いだ瞬間。

世界が薄い紫の膜に覆われた。

！

突然の変化。

半径五十メートルほどの薄い紫色をした半円ドームができたのだ。そよ風が止み、足元のア리가ぴたりと止まって、野球少年たちの掛け声も聞こえない。

これこそが亜空間。まるで別の世界に来たみたいだ。

「こんな感じかな。今は大体半径五十メートルくらい。本当は、もっと広げることができるけれど、あまり大きくすると、クリーチャーが反応してこっちに来ちゃうから」

俺は涼華さんの話を聞きながらも、視線は亜空間に釘づけだった。いやーなんとも不思議な気分だ。

「……ずいぶん熱心に見ているけど、もう三回目じゃない。そんなに珍しそうに見るほどでもないでしょう？」

「学校の時は急いでいた上に、夜で気づきませんでしたし、昨日はいきなり人が倒れていって、周りのことを気にしていられませんでしたから」

「なるほど。夜に来たときは、確か鍵を取りに来たって言っていたものね」

「はい。あ、夜の学校といえば、桂先生に空けられた腹の穴が、完全に塞がっていた件、どうやったんですか？」

「ふふっ。ずいぶん今更な質問ね。なんで聞いてこないのかなあつて、ずっと不思議に思っていたわ」

「あの時は、それ以上に雷撃のことでびっくりしていたのと、起き

た時は夢だと思っていたから。それで、あれは一体――」

――ブウウウン！！　ブウウウウン！！

その時、涼華さん胸ポケットにある携帯が勢いよく震える。電話つばい。

……携帯の震動で涼華先輩の豊かな胸が小刻みに揺れたのを見て、ちよっぴりえっちな、とか思ってしまったのは、まあ不可抗力として見逃してください。

『遅お――』

い！！』

「うおっ?!」「きゃっ?!」

涼華先輩が通話ボタンを押した直後、つんざくような高く大きい声に俺も先輩も思わずひるんだ。

声の主は言うまでもなく、

「ちよ、ちよっと日和。声大きすぎよ」

『だって、亜空間を開いた後私をほったらかしにしたまま、ずっと二人でいちゃいちゃいちゃいちゃしているじゃないですか!』

おお。いつもおとなしいはずの日和さんが怒鳴っていらっしやる。ていうか携帯なくても、ここまで聞こえてくるんですけど。

「いやいや、誤解だって日和。亜空間についての説明をしてもらっていたんだよ」

『それにしたって、長くなるようなら合図してくればいいのに、ずっと二人の世界に入っちゃっているんだもん』

「二人の世界って……」

しかし、ここまでムキになる日和は初めてだ。それとも、人知れず何か悪いことしちゃったかな?

「あのーごめん日和。そんなに嫌な思いをさせたのなら謝るけど……」

……」

『え? あ、や、ごごごごめん!　だ、大丈夫!　ホント白真くんは何も悪くないから!　取り乱しちゃって、ごめんなさい!』

逆に謝られてしまった。あ、向こうでちょー深くお辞儀している。

「大丈夫。私は日和を応援しているから、盗ったりしないわよ」

『と、盗るって！……うう、さっきのことは忘れてください……』

「忘れるって何を？ 盗るって応援って？」

「白真君はシヤラップ」

うおっ突然の発言禁止！？

「日和。今から私の亜空間を消して、また合図をしたら今度は白真君が亜空間を展開するから、あなたのところまで届いているか見てあげて」

『わかりました。じゃあ一旦切りますね』

日和との電話を切って、涼華先輩は俺に向き直る。

「今言ったとおり。ここから日和がいるところまで、およそ三十メートル程度。まずはこの距離から始めましょう」

言うが否や右手を軽く振って亜空間を瞬時に消す涼華先輩。そよ風が頬を撫で始め、足元のアリが動きだし、カキンという音と少年たちの元気のよい声が聞こえる。

今の、ちよつとかつこよかったな。

「今見せた亜空間をよくイメージして。なんとなくじゃだめ。細かく鮮明にね」

「細かく、鮮明に……」

俺は静かに目を閉じて、瞼の内側から亜空間を見ようと試みる。目を完全に閉じる直前に、涼華先輩が日和に合図を送る姿が見えた。

いよいよだ。一切の雑念を消して、亜空間のことだけを考える。

こう、上からすっぽり覆いつくす形の、綺麗な紫色の半円ドーム

……それが、俺と涼華先輩のところから、日和の元まで……。

よし！

俺は、今頭に浮かんでいる亜空間のイメージを保ったまま、腕を力強く屈んだ！

「えっ！ ちよっ！」

だがその瞬間、涼華先輩が驚きの声を上げる。

え？ いやいや、今のリアクションって、もしかなくてもミスった？ 自分的には、かなりいい線をいったと思ったんだけどな。

不安が増してゆく。

恐る恐る目を開けてみると――

「これは……予想外の結果ね……」

亜空間は作れていた。確かに作れていたのだが……

「あれ？ 涼華先輩……なぜに閉じ込められて？」

目を開けて、まず視界に入っただのは、人ひとりサイズの亜空間に閉じ込められている涼華先輩の姿だった。

「そのセリフ。そっくりそのままお返しするわ」

「え？ 痛あ！？」

先輩に近づこうと動いた時、『何か』にゴンッ！ と思いつきり頭をぶつけてしまった。

「痛ったあゝって、これは……亜空間？」

頭をさすりながら目の前をよく見ると、俺にも涼華先輩と同じように、小さい亜空間に閉じ込められていた。

「白真君。あなたこういうイメージをしたの？」

「えっと、上からすっぽり覆いつくす形の綺麗な紫色の半円ドームと、それが、俺と涼華先輩のところから日和の元まで広がっている感じを……」

「ということは――」

――ブウウウン！！ ブウウウウン！！

再び震える涼華先輩のむり――じゃなくて携帯。

「もしもし、日和？」

『あ、あの涼華さん。なんか、私の周りだけ亜空間が出来ていて、

しかもこれすり抜けられないんですけど……あ痛っ』

日和も亜空間に閉じ込められているようで、俺と同じように頭をぶつけたのか、スピーカーからは鈍い音が聞こえる。

『おそらく、『半径三十メートル』ではなく、『自分』『涼華先輩』『日和』と言う部分を強く意識したことが原因ね。だから個々だけを覆う、形の小さい亜空間になった』

「じゃあ、やつぱり」

「ええ、失敗ね」

少しでもイメージが足りなかったり、意識が緩むとダメらしい。俺の場合は、その力加減を調節する必要があるってことだ。

あれでも駄目なのか……とほほ。

「そんな気を落とさなくても大丈夫よ。逆に言えば、悪いのはその調整だけで他は完璧だし、自転車と同じで、一回できるようになれば、その後は楽勝だから。頑張つて」

落ち込んでいる俺を優しく励ましてくれる先輩。さすが生徒会長というか、優しいながらも力強い一言一言は、俺をやる気にさせてくれる。

「そうっすね。うし！ 今日中にマスターして見せます！」

「そうそう。その活きよ」

俺は再び目を閉じ、先輩は日和に合図を送る。

失敗して、涼華先輩と日和にアドバイスしてもらい、再び目を閉じるその繰り返し。涼華先輩も日和も、飽きることなく熱心に教えてくれ、俺が亜空間を完全に習得した時、すでに日は沈んだ後だった。

* * * * *

帰り道。

「今日は本っ当にお世話になりました！」

すっかり辺りが暗くなってしまったので、俺は二人を家まで送っ

で行っていくことになっていた。

とりあえず半径五十メートルほどの亜空間を展開できるようにな
ったが、本来はもっと大きくできなければいけないらしい。だが、
それは使っていくうちに、自然と距離が延びるようになるので、心
配無用だそうだ。

「にしても、涼華先輩は良かったんですか？ 俺のためなんかに、
貴重な時間を割いてしまって」

サヴァンとして戦わなければいけないことを理由にしても、受験
は待ってくれない。涼華さんは懇切丁寧に教えてくれていたけれど、
本当は迷惑なんじゃないかと思っていた。

が、当の本人、涼華先輩は、なぜかお腹を抱えて笑い出した。
は？ いやなんで？

「あはははっ……そんなことを気にしていたの？ もう、優しすぎ
よ白真君。そんなわけないじゃない。むしろ、いい息抜きになった
わ」

「そ、そうですか。でも、笑わなくなっただけいいでしょ！ なんか、
俺すごい恥ずかしいじゃないですか！」

「でも、そ、その、私は白真君のそういうところ……、す、す、
好きだけどなあ。なんて、ごによごによ……」

「ごめん、日和、最後の方聞いてなかったんだけど」

「あ、い、いや！ なんでもないよ！ うん、なんでもない」
「？ そうか？」

あゝダメだな。疲れていてロクに人の話も聞けんとは。

「ふふっ。白真君。日和は最後何を言ったかと言つとね——」

「うわ——っ！！ だめっ、しっ！ なしです！ 涼華さん
！ そ、それじゃ白真くん！ 私と涼華さんこっちだから——！」

「え？ あ、ちょおい！」

呼び止めようとしたが、日和は涼華先輩の腕を掴んで、脱兎のご
とく走り去ってしまった。

「……まあいつか。あゝ熱いお風呂に入りたい」

涼華先輩が言いかけたことがすごく気になりはしたが、後でメールで教えてもらうことにして、俺も足早に帰路についた。

* * * * *

「……行つたか」

夜。白真と日和達に分かれ、それぞれの姿が見えなくなった頃。電信柱の陰から少年は出てきた。

細身だが、よく鍛えられた体。身長は白真とほぼ一緒。鋭い目つきに、メガネをかけた、いかにも賢そうな少年だった。

彼は夕方、微弱な亜空間の気配を感じ取り、運動場にいる白真達の姿を見つけ、この時間まで三人を尾行していた。

なぜかと問われれば、理由は単純明快。

三人の実力を測るためだ。

（いや、正確には二人か……）

あの篠原涼華の実力は、この身をもって経験している。能力の扱い、その応用性。基本的な身体能力の高さと、強いメンタル。なかなかの苦戦を強いられ、この町に来てから、初めて一戦を交えた相手でもあった。

（やはり、あの人は使える。問題は……）

そう、問題は残りの二人。

今日の様子を見る限り、少年の方はド素人で論外。少女は、能力を見せていないため、一度戦ってみなければ、実力を測れない。

（明日、直説接触してみるしかないか）

すると、少年はおもむろに、携帯を取り出す。

その待ち受けには、彼自身を含め、五人の少年少女が笑顔で映っていた。

「必ず、強くなる」

少年は、ぐつと、携帯を持つ手に力を込める。

「必ず、今よりも強くなつて、そして今度こそは——」

しかしその時、彼はハツと気づき、続きの言葉を飲み込む。そして、なんとも言えない嫌悪感が襲ってきた。

今さら何を言っているんだ。

他者は、自分が強くなるための踏み台でしかない。

仲間を作るくらいなら、一人で強くなった方がいい。

もう、同じ過ちを犯さないためにも。

「——強いサヴァンに——」

暗い夜道に少年は独り。月は少年を照らしてくれるが、彼の前にある道までは照らしてくれない、彼の前は闇だった。

亜空間 Ⅱ トックンⅡ (後書き)

いかがでしたか？

来週は、ついにサヴァン同士の戦い！
最後に出てきた少年はいったい何者？
彼が戦いに執着するわけとは！

こっご期待！！

夜中はテンションがおかしくなるよ。ホント。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

口論 ⅡクリームパンⅡ（前書き）

お待たせしました。（待ってない？）一週間ぶりです。

前回、バトルの回と告知しておいたのですが、予定を変更して、メガネの少年の正体ばらしの一話に。

はりきって
どうぞ。

口論 Ⅱ クリームパン Ⅱ

「もつつ、どうしてそーなるのよ！」

翌日の昼下がり。

購買で売っているクリームパンがヤヴァイくらい美味だとかいう噂を小耳にはさみ、どれどれ食らってやろうじゃないかと胸を躍らせて教室を出たところ、なにやら知り合いの怒声が聞こえてきた。

音源は二組の方角。どう考えても彩菜のものとしか考えられないんだが……

「彩菜ちゃん、どうしたのかな？ 白真くと将太くん以外の人にあれほどムキになって怒るなんてこと、そうそう無いよね？」

同じくクリームパンを求め同行していた日和が首をかしげる。

彩菜は基本優等生で通っている。クラスからの人望も厚く、それなりに頼りにされている彼女が、ムキになって言い争いをしたり、思いっきり暴力を振うことのできる相手というのは、俺と将太か、眼を飛ばして絡んでくるような不良どもくらいだ。

だから、日和の言った通り、彩菜が普段俺達以外の人に対して感情を高ぶらせることは、まずない。いや、過去に前例がないわけじゃないんだが、その時は色々言い争う形になって、大変だった。

つまりは、今回もあまり良いことが起こっているとは考えにくい。

「一体何があつたのやら。あいつが完全に暴走する前に、ちよいと話を聞いてみるか」

* * * * *

廊下の角を曲がると、二組の教室前で彩菜を発見。

「言っているでしょ！ 私は渡されてなんかいないわよ！」

「それは違うね。僕は高橋先生に尋ねたが、君には確かに渡したとおっしゃられていた。先生が嘘をつくはずないだろう。どうしてもるんだ？」

「だから、知らないってばっ！」

そこで初めて彩菜と対峙している相手を見る。

第一印象は、真面目クン、と言ったところ。それはおそらく、メガネとその奥で鋭く光る瞳のせいなんだろう。その軽く睨みつけるような視線は、顔を真っ赤にして抗議している彩菜へと注がれている。

これぞまさしくザ・修羅場。

善は急げということだな。

「どうしたの？ 彩菜ちゃん」

「何珍しく暴走してんだよ」

俺と日和の声に反応して振り向く彩菜。よかった、青筋はまだ立っていない。

「あ！ ちょっと、二人とも聞いてよー！」

彩菜は俺たちの顔を見るや否や、完全にこちらを向いて、ホッとした表情で話しかけてくる。いつも頑固に一人で解決しようとする彩菜が、迷わず俺達にすがってくるところを見ると、どうやら相当手を焼いていたらしいな。

「おい片桐さん、他クラスの生徒まで巻き込——」

対峙していたメガネくんは、一方的に話を中断した彩菜を注意しようとしたが、俺と日和の顔を見て、なぜか途中で言いとどまった。そして、彩菜に向けられていた視線は、さらに冷ややかにかつ鋭くなつて、俺達を睨みつける。

いや、いくら会話の邪魔をされたからって、初対面の人にそんな怖い顔をしなくても……。

「何よいいでしょ！ 討論が言い争いに発展し、話が平行線になっ

てしまった時は、第三者からも意見を尋ねてみるのは大切よっ」

いや、第三者ちゃうやん。思いつきり俺ら友達やん。

「……そうだな、いいだろう」

え、いいの？

彩菜の支離滅裂な提案に、猛反対してくるタイプだと思っていたのだが、案外素直に受け入れてくれた。

「……まさか、向こうから来るとはな……」

なんか小声でブツブツ言っているメガネくん。相変わらず俺と日和を、いや、正確には日和か？ とにかく、厳しい表情でこちらを睨んでくる。

「それで、なんでそんなに怒っていたの？」

日和も相手の視線が気になるようだが、あえて無視して、彩菜から話を促す。

「そう、それなんだけど、「ちょっと待て」実は——って何よ稲垣！ アンタさつき賛成してたじゃない！」

話の出鼻をくじかれて、彩菜は再び声を荒げる。やべ、一瞬青筋立ったぞ！

で、その怒らした張本人であるメガネくん、どうやら稲垣というらしい。彼は彩菜の剣幕にたじろいもせず、淡々と言う。

「別に、その点で反対するわけではないが、僕はまず、そちらの二人との自己紹介から始めるべきだと思うけどね。間違っているかい？」

「ごもつともです、正論です。そして俺も相手の名前も知らずに睨まれるのはきついです。日和なんかビクビクしちゃっています。」

「ああんもうっ！ 分かっているわよ！ こっちが谷原日和で、そっちが桜木白真。二人とも七組で中学からの私の友達^{タチ}よ」

多少イラつている彩菜が早口で紹介し、俺と日和は慌てて会釈する。

やはり稲垣は厳しい表情を崩ず、上から下までじっくり見てくる。見方によれば、俺と日和を値踏みしているみたいだ。

「谷原日和、桜木白真……なるほど、覚えておくよ。僕は稲垣羽生斗だ」
うと

ハウト？

「変わった名前だな。ハーフ、もしくはクォーターなのか？」

「君に言われたくはないな。『白真』^{はくま}というのもあまり聞かない、珍しい名前だよ。……確かに僕の祖父はイギリス人だ。けれど、今はそんなことどうでもいいだろう。余計な気遣いは無用だ」

「むっ」

ギスギスしていた空気を多少なりとも緩和させるため、軽く話題を振ったのだが、コイツは分かっているように潰しづらい。なるほど、こりゃ確かにイラッと来るな。

「ええと、それで本題は？」

日和の一声でやっと本題に入る。やれやれ。つかそもそも、なんで俺らここにいるんだっけ？

「じゃ、話すわ。あたしと稲垣はクラス委員なの。クラス委員の仕事として、次の授業が教室移動だった場合、その教室の鍵を、担当科目の先生から受け取りに行くっていうのがあるのよ。今日は四時間目が化学室で、私はクラスの子と化学室前で待っていたのよ」

「僕は、三時間目が終わってすぐに職員室に鍵を取りに行った。しかし、先生が鍵はすでに片桐さんに渡してあると言っただけ。それで、僕も化学室へと向かったんだが——」

「彩菜も鍵を持っていなかった、と」

「そう。それでもめあいになって、結局授業は教室でやったんだけど、終わったら失くした鍵を探せって言われて——まあ、後はこの通りよ」

「……」

「な、何よ。そのリアクションは」

「いやぁ……ねえ？」

日和が慌てて将太を追い払おうとする。この空気の中、コイツまで加わったら、百パーセントロクなことにならない。最悪、暴力沙汰もあり得る。

しかし、俺と日和は舐めていた。この男が、そんな陳腐な想定内に、収まるわけがなかった。

「ああ、そうそう。彩菜、これ渡すの忘れてたわ。ほい。」
「は？　ちよっ」

パンを啜えたまま、そう言っただけで彩菜の方へ何かを投げ渡す将太。いきなりのことに、慌てて彩菜がキャッチしたそれは、

「化学室」と書かれた鍵だった。

「……」
「……」
「……」

俺ら三人だけでなく、稲垣も口をぽかんと開けて固まる。

「いやさー、化学の高橋が彩菜を探していたからよお、『俺が届けておきます』つつつて、もらってたんだよねー。それで、俺そのまんまトイレ行っちゃって。大も小もスッキリしたら、なんか忘れちまったんだよねー、悪かったなー彩菜。あっはっはっは——ぐぼおっ！」

初めてかもしれないな。日和まで将太を殴るのは。

三人分の怒りの鉄拳を受けた将太は、派手に廊下を転がって——
『うぎゃあああああああああ！　階段は死ぬってのぎゃあああああああああ——！！』
落ちていった。

振り返ると、いつの間にか稲垣の姿はなく、未開封のクリームパン（↑将太のやつ）だけがちょこんとおいてある。

「……いただきます」

なるほど、確かにここのクリームパンはおいしかった。

口論 「クリームパン」(後書き)

いかがでしたか？

ハウトがどうい子なのかをわかってもらつたための回、でしたかね。

次回こそは、バトります。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

襲撃 「ハウト」 (前書き)

やっと戦闘シーンだー！
正確には次回だけどー！

だがおかしい。当初はもっとシリアスな予定だったのに……あるえー？

ま、この作品はそこまで暗くなくてもいいか。と妥協した今回です。
どつぞ。

襲撃　「ハウト」

「悪いけれど、今日は生徒会があるから、どうにも行けそうにないわ。だから、二人で頑張つてね」

涼華先輩はそう言い残し、俺達七組の教室から離れていく。涼華先輩と話をしていると、相変わらず周りからの突き刺さるような視線が痛い。こればかりは、まだまだ慣れるのに時間がかかりそうだ。先輩がわざわざ一年生のクラスまで来たのは、他でもない放課後のサヴァン特訓の件だ。まだ始めて二日目の今宵は、涼華先輩は不在。ていうか、よく考えたら受験生だし、生徒会長だし、ただでさえ忙しい中付き合ってくれているのだから、これ以上我が儘を言うのは野暮つてものだろう。

よって、今日は日和と二人で特訓。なんだけれど、

「うーごめん白真くん。今日掃除当番で、思ったより時間がかかりそうだから、先に運動場へ向かってしてくれる？　なるべく早く行くよう心掛けるから！」

「それじゃ終わるまで待とうか？　二、三十分くらいなら、別に待つていられるぞ？」

「だめだよ。特訓なんだから、時間は有意義に活用した方がいいよ。敵は自分が成長するのを待つてくれるほど、優しくないから」

敵——クリーチャーは、サヴァンを目印にして、そこに亜空間を展開し、この世界に降りてくる。ただの一般人とサヴァンを、どうやって区別しているのかは分からないが、サヴァンが目印だと言うのだから、力がある以上、クリーチャーと接触せずに生きていくことは、まず出来ない。

力に目覚めたばかりだからと言って、戦いを拒むことはできない

のだ。だから、一刻も早く戦闘に慣れておく必要がある。

前に聞いたのだが、日和はこの戦闘に慣れるまで、たっぷり一ヶ月はかかったらしい。

「でも、白真くんには私や涼華さんがついているから、もっと早く慣れられると思うよ。だから、先に行つて、亜空間の練習を待っているよ」

「解つたよ。でも、なるべく早く来てくれよ？ 一人で運動場のど真ん中にポツンと立っているのは、少々寂しいからな。ハムスターなら五分で死ぬレベルだ」

「ふふつ、じゃあハムスターくんを寂しくさせないよう頑張るよ。バイバイ。後でね」

笑顔でこちらに手を振りながら、教室に戻っていく日和。俺も釣られて手を振ろうとするが……

「……（周りの男子による、人を殺せるレベルの視線）」

「……（周りの女子による、何か期待を込めた視線）」

……なんだかんだ言つて、日和は美少女だからね。さっきまで涼華先輩ともお話していたもんね。そうなるよね。

だが俺は、あえて、そう、あえて！

思いつきり手を振りかえす！（超笑顔）

「っ！」

「きゃ~~~~~~~~~」（女子による、黄色い声大合唱）
あ、なんか日和さんが赤くなっていっちゃる。

「~~~~~リア充は犯罪です」~~~~~

シュバツ！

「ひっ!？」

勢いよく飛んできたハサミが俺の頬をかすめ、つうつと赤い液体が頬をつたった!

違うんだ! 気分が良くなって調子に乗っちゃったとか、そういうんじゃないんだ! 決してモテない男の背伸びなんかじゃないんだ!

「そのお前の鈍感さがこいつらの殺意を駆り立てんだろおが。ったく」

心の声にまで答えてくれてありがとう通りすがりの我が親友!

「いや、お前のその心の声つつーやつ、ダダ漏れだから」

「うっそ?!」

「くくくくぐつちゃぐつにしいてやんよー」

「校内での追いかけて、暴力、およびハサミでの集団リンチはお控えください——!」

その日以来、俺はねぎを持ったツインテールの少女がトラウマになった。

* * * * *

「はう、疲れた……」

校舎裏のゴミ置き場で一人溜息をつく日和は、その言葉とは裏腹に、だらしなくニヤけた顔をしていた。

美少女らしかぬその顔は、赤の他人が今の彼女を見た時、間違いなく第一印象は「アブナイ少女」というカテゴリーに入れられるだろう。

しかし、第三者の目など、今の日和には眼中にない。

（えへへ……白真くんがあんなに笑顔で手を振ってくれた……これはもう……えへへ……）

高校一年生と言うのは、どうにも恋愛話に敏感なお年頃。特に、白真と日和は入学当初から行動を共にすることが多かったため、周囲からそういう関係だと思われるも、仕方のないことである。

そして、今回の白真の軽率な行動により、彼女たちの野次馬精神が爆発。日和はクラスの女子に、もみくちゃんにされながらの質問攻めを受けたのだ。

日和は、周りから自分と白真が友達の枠を超えた関係だと思われるていたのを知り、それはもういい気分だった。

しかし、

（ウソは言っちゃいけないもんね）

そのような関係ではないと、全て否定したのだ。このまま頷いて、クラス公認のカップルになってしまいたいという気持ちがあったかと言えば、ウソになる。

（でも、そんなの、正々堂々じゃないもんね？ 彩菜ちゃん）

頭をよぎる一人の少女の顔。一年前、彼女と交わした約束と握手。親友である二人が、同じ人に恋をしてしまった。だからこそ、彼女を裏切るようなアンフェアな行為は出来ない。いやしたくない。

正々堂々、勝負をして、思い人を手に入れるのだ。

「彩菜ちゃんに負けないためにも、早く白真くんのトコに行かなくちゃ」

ゴミを捨て、鼻歌を交じえながら、その場を去ろうとする日和。今日は、白真くんの亜空間を確認して、それから——などと考えていた、その時。

視界が、薄い紫色に変わった。

「!？」

いわずもがな、亜空間。白真は今町の運動場にいるはずなので、彼が展開したわけではないと、日和は一瞬で悟る。

上を見上げると、亜空間の最も高い円形の天井が見えた。言うことは、ここを中心に亜空間が展開されたことになる。

(ということは、敵がすぐ近くに――)

そう考えた矢先、背後から何かが迫る気配を感じた。

余計なことは考えず、日和はその場を飛び退く。

ヒュッ! と、何かが髪をかすめた。

だが、日和は紙一重でそれを躲す。そして地面を転がる際、右手を地面につけて、大木を発生させ、敵の第二撃に備える。

すると、案の定、敵が間髪入れずに放った第二撃が大木に当たり、日和の身を守った。

飛び退いた勢いで日和が立ち上がると、

「なるほど、君の持つ力は植物の類か……覚えておこう」

「!?!」

聞き覚えのある声が、背後から聞こえた。

慌てて振り返った日和が見たのは――

「稲垣くん!？」

「気配だけで攻撃をかわし、その間もしっかりと第二撃に備える……」

……どこかの生徒会長と似たパターンだな。教え込まれたか？」

驚きの表情を見せる日和をよそに、羽生斗は淡々としやべり続ける。

しかし、彼の話したその内容は、さらに日和を混乱させた。

「どこかの生徒会長？ 教え込まれた？ それじゃ、稲垣くんは涼華さんと戦ったことがあるってこと！？」

ここで日和が驚いたことは二つ、一つは口に出して言った通り、涼華がサヴァンだということを知っているという事。もう一つは、それを知っていて、涼華が放っておいているということとは――

「稲垣くんもサヴァンなんですよ？ だったらなんで私を狙うの？」

もしも羽生斗が人に化けたクリーチャーであれば、涼華が野放しにしておくなど考えられない。ということは、彼はサヴァンなのだ。亜空間を展開しているのが良い証拠である。

だとしたら、ここにいる両者はサヴァンであり、本来対立すべき関係ではないはずだ。しかし、目の前の羽生斗が日和に向ける視線は決して友好的なものではない。現に攻撃を仕掛けてきている。彼と出会ったのは今日の昼休みが初めてで、特別恨まれるようなことはした覚えがない。日和は、自分がなぜ彼の襲撃を受けたのか、解らなかった。

「なぜ？ 分からないのか？」

しかし、羽生斗はため息交じりに、怪訝そうな表情を見せる。どこか見下したような言い方だった。

「君たちが、君たち三人が行動を共にしているからだ。それ以外の何でもない」

当たり前だと言わんばかりの調子で、羽生斗は言い放つ。しかし、日和にはなぜそれが自分を襲う理由になるのか、理解に苦しんだ。
「どういう――」

日和は疑問に思ったことを、そのまま口に出そうとしたが、途中

で遮られてしまう。

彼女が意識を逸らした、その一瞬を逃さず、羽生斗が何かを飛ばしてきたのだ。

慌てて日和は体を逸らし、その攻撃をやり過ごす。体を逸らしたそのままの方向に飛び退き、羽生斗と距離をとる。

念のため、日和は地面に手をつき、戦闘態勢をとったまま、羽生斗を睨みつけて叫ぶ。

「どうして！？ 私たちが戦う必要はどこにもないのに！」

「戦うための理由なら、先ほど言っただろう。僕としては、抵抗せずにやられてしまうよりも、抗って、戦ってから倒れてもらった方が都合なんだけれどね」

羽生斗の表情は変わらない。むしろ、その瞳には、決意と言う名の光が強くなった気さえする。期待にそぐわない答えを返され、思わず歯ぎしりする日和。もはや、説得の余地は皆無だと思われた。

「……解ったよ。全力で戦ってあげる。でも、もし私が稲垣くんに勝ったら、ちゃんとした理由を聞かせて」

結局、日和は譲歩した。本当ならこんな不毛な戦いは避けたかったのだが、羽生斗の戦いに対する決意は思いのほか固い。だが、これでは戦うメリットもデメリットもあったもんじゃなかったで、このような条件を付けたことにしたのだ。

「いいだろう。僕も約束は絶対に破らない主義だからな。神にも誓える」

すると、向こうもその案に乗ってきた。

こうして、その羽生斗の言葉を合図に、二人のサヴァンは戦いの幕を開けた。

襲撃 「ハウト」(後書き)

いかがでしたか？

ハウトの口調に関して、いまだに安定していない。

他のアニメのキャラをモデルにしようにも、浮かんでこないんだよなあ〜これが。

日和はいくらでも浮かんでくるんだけど。

今回は、バトルオンリー、のはず。

お楽しみに。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

水の賢者 「エリート」 (前書き)

更新が遅れちゃいまして、誠に申し訳ありません。

ふざけた口調ですが、ちゃんと反省しているつもりです。

そ、その分今回は長いから！

楽しめるから！

あれ？ でも長すぎるのも問題？

まあとにかくにも。
どうぞ。

水の賢者 「エリート」

先制したのは日和。

羽生斗が返事を言い終えたその直後に、日和は地面を前方へ向けて蹴り上げた。

蹴り上げられた地面からは、草木が弾かれたように勢いよく飛び出し、目の前の羽生斗を襲う。

羽生斗は、日和の素早い行動力に感心しながらも、避けることなく、落ち着いた様子で腕を振り上げ、何かを飛ばした。

兩人から放たれた各々の攻撃はぶつかり合い、互いを相殺させる。ちりぢりになり、桜の花びらの如く宙を舞う葉やツタに交じって、日和の顔にも何かの欠片が当たった。それはひんやりと冷たく、頬を撫でるようにつたっていく。

「さすが、だな。口ではああ言っているけど、僕と戦う準備はとくにできていたのか」

衝突によって生まれた余波が、風のように吹いてきて、羽生斗の髪を揺らした。

目の前にはその場から一步も動いていない羽生斗が悠然と立っている。彼も日和も、未だノーダメージである。

——強い。

顔にこそ出していないが、日和の心は驚きと焦りの入り混じった、なんとも言えない不快な感情に支配されていた。

今の攻撃は日和の完全な不意打ちによるもの。羽生斗が言い終えてからおそらく一秒にも満たない、先手必勝の一撃。防ぐ時間など与えない、躲すなどもつてのほか。

日和は自分の奇襲が、快心の一撃にはいかなくとも、かなりのダメージを与えたと思っていた。

しかしどうだ。

羽生斗は傷一つないどころか、その場から一歩たりとも動いていない。腕を振ったただけだ。

特に驚くべきは、その精神^{メンタル}の強さ。

人間は本来、予想だにしない事態が自分の身に降りかかった際、身体が委縮して動くことができない場合が多い。

例を挙げると、道をごく普通に歩いていて突然足をかけられた時、たいていの人は頭で理解していても、身体を止められず、足を引っかけ転んでしまう。だが、人間には反射と言う機能も備えられている。無意識に自分を守ろうとする防衛反応だ。それが勝れば転倒を回避することも可能。しかし、日ごろからよほど精神面に気を使っていなければ、簡単にできたものじゃない。

しかし、羽生斗はこれを見事に対処した。そしてそれが何よりも、羽生斗の精神^{メンタル}の強さと、こなしてきた戦いの場数が多いことを物語っていた。

（強いよ、思っていたよりずっと強い。涼華さんに勝るとも劣らない、どうしよう……）

「……僕が君の一撃を防いだことが、そんなに驚きか？　ずいぶん正直な顔をしているんだな」

日和の肩がビクン！　とはねる。

「そ、その力……『水』だよな」

本心をいとも簡単に見抜かれてしまった日和は、落ち着きを取り戻すためにも、話題転換を試みた。

それに、どういうわけか向こうは攻撃をしてこない。余裕の表れなのか、ただ単におしゃべり好きなのか。そんなことをしていても相手に考えさせる時間を与えてしまうだけだというのに。そう思うと、日和は、容赦なく不意打ちなどという姑息な手を使った自分が、なんだか悪いことをした気分になった。

「確かにこれは『水』だ。けれど、それは完全に真実についてはい

ないな。僕の力をその程度にしか認識していないようでは、この後痛い目を見るぞ」

そう言くと、羽生斗は昼休みの時と同じような冷たく、本能的に恐怖を覚えるような視線を突き刺してくる。

その視線に日和は圧倒されそうになる。だが――

（気持ちで負けちゃダメだね。立ち向かわなきゃ！）

羽生斗の目から逸らしたくなる気持ちをグツと堪えて、日和もキツと睨みつけた。

先程から羽生斗が飛ばしてきた何か――それは紛れもない、人間が生きていく上で必要不可欠とされる『水』だった。

だが、もちろん、ただの水ではないのだろう。いくら勢いよく水鉄砲のように発射させたとはいえ、木の太い幹をへし折ってしまったり、草木を切り刻んだりする機能を、水が担っているはずがない。

「高圧水流――だよね？」

「ご明察だ」

超高圧水流切断機、と言う名の機械がある。

別名として「ウォータージェット」「アクアカッター」などがあるが、主に大がかりな工事や震災時に使用される技術だ。刃物の如く、コンクリートや鉄板を容易く切り落とせる強靱さを持っている。メリットとして、火力を使わずに安全面において信頼をおけたり、環境にも優しいとされる、優れた最新技術のたまものだ。

羽生斗は水を操るサヴァンである。そんな彼だからこそなせる技なのだろう。

思わず日和は顔をしかめた。羽生斗と会ってから、この表情になってばかりだ。眉間にしわがよるので、年頃の女の子としては今すぐにもやめたいのだが、状況が状況。嫌でもこんな顔になってしまう。

圧倒的に日和が不利だった。

どこぞに、モンスターを育成して戦わせるゲームがある。そのゲーム上のルールでは、『草は水に強い』などと言っているが、それは紛れもないガセである。

植物にとって、水は生きていく上では欠かせない食糧源だ。人が食事をするように、植物も水をもらってすくすくと育つ。

しかし、与えすぎは逆効果だ。

人間は食べすぎると太り、肉体的にも健康面においても害となってしまう。

その事實は植物にも当てはまる。水の与えすぎは植物の根を腐らせる原因となり、枯れ果てるまでのカウントダウンを早めてしまう。なので、水系のクリーチャーまたはサヴァンとは、相性が良いどころか最悪だ。

これだけでも脅威だが、不利な点はもう一つある。

それは「切断」の力。鋭利な刃物が相手の場合^{ケース}。

植物には筋肉がない。特別硬い表面を持っているわけではない。軟で弱々しい植物は、簡単に切断できる。根をこっそり切り落とすでもしたのなら、ほぼアウトだ。

それが、コンクリートも鉄板も綺麗に切断してしまう高圧水流が相手では、どれだけ太い大木によって作られた盾だったとしても、無いに等しい存在価値へと成り下がってしまう。

一昨日、牛似のクリーチャーとカマキリ似のクリーチャーを相手にした時、涼華と相手を入れ替えたのも、日和の力が刃物系の敵に適してなく、苦戦が目に見えていたためだった。

よって、水で、しかもそれを刃物のようにも扱える羽生斗は、日和にとってこれ以上ない苦手なタイプだった。

だが、なにも勝機が無いわけではない。この状況を打破できる方

法を日和は持っていた。

（高圧水流は脅威だけれど、要は伸びるナイフと同じ。私の戦いのスタイルを考えれば、相手の特性を逆手にとって、一気にたたみかけることも――）

日和は思考をフルパワーで働かせる。タイミングや、相手の攻撃パターンの予想。もし上手くいかなかったら、など。

しかし、その様子を黙って見届けていた羽生斗の一言によって、日和の思考回路は停止してしまった。

「そろそろおしゃべりも過ぎた頃だと思うんだが――君はどうだなにか僕への対策でも思いついたかい？」

「えっ？」

日和は耳を疑った。

――今この男はなんと言った？

「それじゃあ、まるで……まるで、私が稲垣くんへの対策を立てられるように、わざと私を攻撃しなかった。みたいな言い方――」

「そうだと言っているだろう」

日和の驚きにあふれた言葉を冷たく切り捨てるように、羽生斗はぶっきらぼうに言い放つ。

「君の力は確認済みだ。そして、その力は僕相手では脅威にならない。このままでは僕が勝つのは目に見えているだろう。だから君に時間を与えたんだ。僕に勝つための作戦を練る時間を」

日和は思わず頭を抱えた。羽生斗の考えていることが本当に分からない。

特に分からないことは、自分が戦う理由について、羽生斗は『集団で集まっているから』だということだ。

日和達の、サヴァン達の敵はあくまでもクリーチャーだ。そのク

リーチャーが強力であれば、利害が一致しているサヴァン同士が協力し合っても、なんらおかしくない。

だが、羽生斗はそれを忌み嫌っている。おそらく、過去にサヴァン関係でなにかしらトラブルがあり、サヴァンを恨んでいる——そう日和は思っていた。

だが、今の羽生斗のセリフのせいで、理解しかけていた考えはさらに混乱を極めた。

サヴァンに恨みがあるのなら、わざわざ相手が作戦を練る時間を与えたりなどしない。ご丁寧に自分の力を話す必要もない。それどころか、こっそり近づいてサクツと殺つてもいいくらいだ。

「聞いているのか？ さつきから僕は君に問いかけているんだが。早く返事をしてくれ」

考えすぎで頭がパンクしかけていた日和は、羽生斗の多少イラついた様子が聞いてとれる一言で我に返る。そして、大きくため息をついた。

（もういいや。もともと、話は勝ってから聞くって約束だったんだし……）

「なんで待つてくれたのか分からないけど、それも勝ってから聞かせてね？」

「さつき言っただろう。僕は、約束はちゃんと守る」

なにかしっくりこないなあと思いつつも、日和はついに動いた。

横方向に走りながら、日和は右手を羽生斗に向かって突き出す。それを見た羽生斗も、顔を日和に向けながら、同じく横に走り出し、二人で円を描くような形にした。

日和の右手からは草木やツタが勢いよく飛び出し、羽生斗を襲った。しかし、右手から出てきたツタと草木は、先ほど高圧水流と相殺になったそれよりも、明らかに量が少ない。

（右手から直接出す攻撃は、地面から直接出てくるものと比べて、量も威力も低下するのか……）

羽生斗は、日和の攻撃の変化に気付いていた。

自分が姿を隠して襲った時と、向こうが不意打ちを仕掛けてきた時、どちらも、地面に触れたところからの攻撃だった。

最初こそ地面と接している事が、彼女が力を使う条件かと考えていたのだが、そんな気の利かない力があるとは思えない。おそらくは、地面に触れずとも植物は操れる。しかし、その場合は地面に接した予期の攻撃と比べて、何か都合の悪いことがあるのだろう。出なければ、腕を振って攻撃した方が、断然やりやすいはずだ——羽生斗はそう読んでいた。

だから、羽生斗は日和の攻撃に対し、先ほどとなんら変わらない高圧水流を二つ飛ばした。

確かに、このままいけば、自分の攻撃は相殺されずに、日和の元へと届くだろう。

しかし、そんな甘い話があるはずがない。向こうだって、この程度のツタと草木では、自分の攻撃が通じないことくらい分かっているはずだ。

それでも、迷うことなくそうしてきたということは、この攻撃は罠で、本命は別にある。その時の保険として、羽生斗は二つの高圧水流を飛ばしたのだった。

すると、それを見た日和は、突然地面を後ろに向かって蹴り、そ

の際自分の右手から出る草木を、根元から切り離す。

元を失ってなお、彼女の攻撃はまっすぐ飛んでいき、高圧水流の前にあっけなく散った。その高圧水流は、日和がそのまま走っていたらぶつかったであろう進行上を通り過ぎ、背後にあった木々を切断した。

ゴオオオオオン！ と、木々は、まるで悲鳴を上げているかのような、すさまじい音を立てて倒れていく。

日和はすると、再び同じ方向に走り出す。

そして、羽生斗と円の直線状に來ると、やはりまた右手から同じように草木を出現させ、羽生斗へと伸びていく。

（何のつもりだ？）

相手は攻撃を仕掛けながらも、何かしらの準備を進めている、それは確かだ。だが、その明確な目的が分からない。

とにかく、今日の前に出された攻撃は罠であり、時間稼ぎだということには変わらないのだから、適当に流していいはず。そして、自分は、その準備の妨害を最優先すべきだ。

羽生斗は頭の中でそう結論づけると、攻撃はせずに、円の直線状にいる日和に向かって走り出した。

それはつまるところ、向かってくる日和の攻撃に、自ら突っ込んで行ったことを意味する。

「！？」

この行動に、日和は明らかに動揺していた。おそらく、また高圧水流でも飛ばしてくると踏んでいたのだろう。日和は走るスピードを速めた。

羽生斗は突っ込んで行ったが、もちろん自分からやられに行っただけではない。

羽生斗は、勢いをそのままにスライディングをして、体勢を低くする。

そして両手を一度合わせ、日和の草木が来た瞬間、合わせていた両手を思いっきり離れた。

スパンツ！！

軽快で高い音が響き、草木が散り散りに舞う。

両手を離れた時、手の中にためていた高圧水流が爆弾のようにはじけ、一気に草木裂いたのだ。手を離れた方向は上向きだったため、羽生斗に高圧水流が降りかかることはない。

囷の攻撃は打ち消した。目の前には日和本体がいることだろう。

羽生斗は本命の攻撃をさせないためにも、体を起こし、そのまま日和の元へと走り出そうとした。

だが、

（！　なんだ！？）

足が言うことを聞かない。

とつさに足元を見ると、羽生斗の足には、木の根がぐるぐると巻きついていていた。

いや、足元だけでない。辺り一面、太い木の根が地面から顔を出しており、もぞもぞと動いていた。

（スライディングをしている時には無かった……これが本命か！？）

「はあ、はあ……間に合ったよ……」

羽生斗はとつさに、声のした方向に振り返る。

そこには、息を切らし、へたりと地面に座りこむ日和の姿があった。

そこからは、あの太い根が地面を盛り上げ、突き出している。羽生斗はゆっくりと周りを見渡し、なるほど。とつばやいた。

「これが本命の攻撃か。ずいぶん大がかりだな」

彼が見たのは、自分を中心にした半径十メートルほどの円の中で、木の根が蠢いている様子だった。

* * * * *

日和の講じた策。それは羽生斗の動きを完全に封じることだった。羽生斗の攻撃は水で、なおかつ高圧水流でものを切ることができ。真正面からの攻撃を仕掛けても、その得意の高圧水流で切り刻まれてしまうだろう。

だが、それらの攻撃には、少なくともモーションがいる。高圧水流を生み出す場合は、手を振って飛ばしたり、指先で弾いたり、攻撃の際、それを手伝うように、なにか動作が必要な事を日和は見抜いていた。

例えば、涼華の炎の力は、指先に出すだけで、特別大きなふりが必要としない。涼華が今の羽生斗のように、巻きつかれてしまったとしても、指先に念を込めれば火がともり、それが木の根に着火してしまえば、やすやすと脱出できてしまう。白真も然り、体内に力を込めれば、身体の表面に雷撃が走り、巻きついていて根を黒こげにできる。

しかし、羽生斗の場合は水を出すだけだ。ノーモーションから出せるものは水だけで、高圧水流はその後の動作によって生じる攻撃。つまり、動きを捉えればこっちのものだった。

作戦は、円を描くように走り、足が地面を踏むたび、植物の根を

増強させる力を与えながらも待機させ、円を一周して戻ってきたら立ち止まり、力を一気に発動させる。

これで、たとえ羽生斗がどこにいても、円の中であれば捕まえることができた。

走りながらのところどころの攻撃は、羽生斗の読んでいた通り力モフラージュに用いられたもので、深い意図はない。

だが、誤算はやはり二撃目だった。何か企んでいることは、向こうも分かっているのだから、むやみに攻撃など仕掛けずに、てつきり様子見で、高圧水流を飛ばしてくると思っていた日和にとって、正面切つての突破は、心をひどく慌てさせるものだった。

しかし、その行為は結果的に、羽生斗が円の中心に自ら飛び込み、むしろ捕まりやすくなるという嬉しい誤算になったため、日和としてはラッキーに終わった。

そして見事に作戦は成功。羽生斗は、日和の手の中で踊らされた結果となった。

* * * * *

「あのね、稲垣くんはもう逃げられないし、攻撃も出来ない。稲垣くんの負けだよ。おとなしく降参して」

すっかり体を木の根に覆われてしまった羽生斗に、日和はお願いするように、上目づかいで話しかける。勝者が敗者に対してお願いするような口調だというのは、いささかおかしな話だが、それも日和の性格によるものだろう。そして、高校男子が百人見たら、百人全員を虜にしまいそうな日和の上目づかいに至っては、もう場違いだと叫び散らしたくなるものである。

しかし、そんな日和の行為に目も向けず、羽生斗は目を閉じたま

ま、何やら考えているそぶりを見せるばかりである。

「えっと……私も、自分の同級生に、こんな苦しいことをずっとさせたくないから、だから、素直に負けを認めて？ 稲垣くん」

本心からの言葉なのだろう。巻きつけられている本人よりも、日和の方が辛そうな顔をしていた。

「——君は、僕の言ったことを聞いていたのか」

「え？」

目を閉じたまま、突然話し出した羽生斗にも驚いたが、日和は彼の言っている意味が理解できずに聞き返した。

「君が不意打ちを仕掛けた、攻撃を相殺した時、僕が言った言葉を聞いていなかったのか？」

羽生斗は先ほどよりも語調を強めながら、目は相変わらず閉じたまま、日和に尋ねた。

「不意打ちの時……言ったこと……」
言われて、日和は回想を試みた。

「……僕が君の一撃を防いだことが、そんなに驚きか？ ずいぶん
と正直な顔をしているんだな」

「そ、その力……『水』だよ」

『確かにこれは『水』だ。けれど、それは完全に真実をついてはいない。僕の力をその程度にしか認識していないようでは、この後痛い目を見るぞ』

「……それが、どうかしたの？」

「分からないのか？」

羽生斗は、わざとらしく大きなため息を漏らし、話す。

「僕は『それは完全に真実をついてはいない。僕の力をその程度にしか認識していないようでは、この後痛い目を見るぞ』と言ったんだ」

「うん。ただの水だと思っていたけれど、高圧水流だったんだよね」
その言葉を聞いた羽生斗は、もう一度大きなため息をつき、言う。
「違うぞ」

「え？」

「僕の力を、見誤るな」

瞬間。大量の木の根が吹き飛んだ。

水の賢者 「エリート」(後書き)

いかがでしたか？

白真空気回。

というか、戦闘描写がほんとに下手だわ。

少しずつ、頑張っていきましょう。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

美鬼 「ダレカ」 (前書き)

読み返してみても、美鬼の容姿がイマイチ想像しがたいかもしれないと、作者自身そう思ったので、美鬼について詳しく語ります。

・和服姿

・猫耳 (↑ただし、これはニセモノで、あくまでもグッズ)

・角 (↑一本角で、ホンモノです)

つまり、猫耳カチューシャをつけて、その両耳の間に、一本だけ角がある感じです。

文章力が低くてすみません (――) m

では、これらを踏まえて、どうぞ。

美鬼 「ダレカ」

「違うにゃー。もっと手のひらから押し出すようにと言っているぜよー。言われたことも出来ないとか、お前はホントに無能のゴミクズ男じゃけん」

放課後。市内にある河原近くの運動場。

亜空間の中で、俺は右手に己の能力——『雷撃』を作り出し、前方にいる猫耳に和服姿という何をどうしてそのチョイス？　と思わず突っ込みたくなる格好の少女に向けて打ち出す。

青白い火花を散らした俺の雷撃はたっぷり暴れて、吸い込まれるように、少女めがけて一直線に襲い掛かる。

が、

「あまい」

目の前に迫る雷撃の槍を避けようとせず、むしろ少女は、それを叩くように乱暴に手を払い、俺の雷撃を弾いた。

バチィッ！　と、少女の手の中で大きく火花が散ったと思うと、雷撃はあさつての方向へ飛んで行く。

今ので通算二十敗目。

俺は、目の前の少女にかれこれ二十発も雷撃を打ち込んでいるのだが、全部弾かれてしまっている。

……ていうか。

「どうしてこうなった!？」

「うるさいにゃー」

* * * * *

時間を遡ること約二十分。

「……ぜえぜえ……もう、追ってきてないよな……」

両手を膝につけ、肩で大きく呼吸をする俺は、荒い息を吐き出しながら後ろを振り向く。

ついさっきまで俺をぐつちやぐちやにすべく、ハサミを手に鬼の形相で追いかけて回っていたクラスの一野獣（男子）共はもういない。校外に出れば俺の逃走勝ちだぜひゃっほー！ とか浮かれた考えでいたのだが、それでも一切の躊躇いもなく、むしろスピードアップして追いかけてくるところを見た時は、本気で焦った。ていうか、さっき振り返った時、学校内で逃げてた時よりも、ハサミを片手に追いかけてくる人数が増えて見えたのは気のせい？

「特訓前からこの疲れようは如何なものなんだ、まったく……」
まあ自業自得なわけですが。

グラウンドの中心に立ち、意識を集中させて右手を風ぐ。するとあっという間に亜空間が展開される。

亜空間の展開を、昨日の今日で完璧にマスターできるとは思ってもいなかった。俺は二人から、俺の呑み込みが早いからだとか、白真くんには才能があるだとか、いろいろお褒めの言葉を授かったけれど、やっぱり二人の教え方が上手かったおかげだと思う。良い師匠に恵まれて、本当にありがたいことです（しみじみ）

「大きすぎるかな？」

亜空間を縮小させるイメージ。すると、思った通りの大きさまで亜空間は萎んでくれる。こういう微調整も出来るようになったのだ

から、俺はサヴァンとして、少しずつだけど、確かに成長しているのだろう。

だが涼華先輩からは、「できるようになったところ申し訳ないが、むやみやたらと亜空間を展開するのは避けてほしい」と言われている。理由は前にも言った通り、自分の位置をクリーチャーにわざわざ教えるようなものだからだ。クリーチャーはサヴァンの気配を頼りにこの世界へ降りてくる。亜空間でも展開すれば確実にばれる。そして、今の俺にはまだ戦うための術も知識もない。この状態でクリーチャーと出会ってしまったえばその時点で俺の人生は完結。桜木白真先生の一次回作（来世）にご期待くださいーい、なんてことになってしまう。そんなのは勘弁してもらいたい。

だから、特訓中も、なるべく亜空間は小さめに作るようにと、釘を刺されている。日和曰く、半径十メートル程度なら、クリーチャーもあまり気づかないそうで――

「あ、ターゲット発見だにやー。お邪魔するぜよー」

「――って言ってるそばから早速の訪問者?!」

半径十メートルは安全地帯ではなかったの日和ちゃん!? と心の奥で嘆きながら、俺は声の聞こえた方を振り返ることなく、前方に向かって全力で走り出した!

「にゅ? ちょっと? 何処へ行くのじゃ!? お待ちになつて!」

なんか背後から奇妙で奇抜で奇怪な口調で奇声が飛んでくるが気にしない! ん? 立ち向かわないのかつて? 俺だってクリーチャーと出会ってしまったら、とりあえず戦ってみようと思っていたよ! けど昨日、そのことを涼華さんに言ったらただ一言、「次回作にご期待ください」と言われてしまって、要は遠まわしに、「どうせ戦っても死んじゃうから逃げなさい」って言われたんだよ!

ああそうさ！　自分が雑魚だって分かっていたさ！　けどやっぱり正直傷つくよ！　でも死にたくないから逃げるよ！

「だから、決してクリーチャーと顔を合わせるのが怖いとか、そう言うんじゃないんだからごふああ！」

一通りの言い訳とちよつとした自虐をツンデレなセリフで締めくくろうとしたが、自分が作り出した亜空間の壁に阻まれ、ゴンッ！と強く頭を打ってしまった。ていうかアホすぎるだろ俺。いつからこんな残念な人になってしまったんだ。

「やつと止まっただのじゃ。ていうか、お前頭湧いてるのかにや？　とてつもなく痛い子だったでしゅよ」

「うおっ————！　言うな！　分かってるよ！　ちよつとパニくっちゃったんだよ！　だからそんな悲哀に満ちたトーンで話しかけるな——って、え？」

先程から奇妙で奇抜で奇怪な口調で奇声を発している方へと振り返ると、そこにいたのは、小学校低学年ほどの小柄な身長に、和服姿の可愛い少女だった——ある一部分を除いて。

「とん。りコーン？」

「角じゃぼけえ」

軽く脳転にチョップされる。色白で柔らかい小さな手からの攻撃は、痛いというより気持ちよかった。

「え？　君は……あれ？　クリーチャーは？」

「くリーチャー？　なんやねん。あんなゲボのような輩と我を勘違いしておったのか。レディに対して失礼極まりない奴でござす」

少女は手を腰に当ててほんのり赤い色をした頬を可愛らしくぷう

と膨らませ、茶色のくりくりとした目で俺を睨みつける。怒っているみたいだけど、かわいいだけで威厳は全くない。

そんな女の子の仕草を見て、俺は、今まで体中を縛り付けていた緊張感が緩んでいくのを感じた。警戒心も薄れていき、心は落ち着きを取り戻す。俺の直感が、この子は敵ではないと告げていた。理由なんてものは特にないのだが、しいて挙げるなら、「可愛らしすぎるから」だろうか。危険な気配を隠しているようにも思えなかった。

余裕を取り戻した俺は、努めて優しい声色で話しかける。

「あ、ああ。クリーチャー呼ばわりしてしまったことは謝るけど、それで君は？ 一体何者なんだ？」

「うにゅ？ 今更な気もするが、拙者の姿を見て驚かないのだからか？」

「さんざん気味の悪いものは見てきたからな。君クリーチャーぐらいの子にはもう慣れたよ」

本心だ。あんなやつらと比べればちょっと変なところなんて気にならない……口調を除いて。

「それもそうじゃのう。わたくしの名前は『美鬼』。一般的に言われる、『鬼』ですわ。主の命令の元、お前の手助けに来たんだにやー」

「へえーそうかー、鬼なのかー……ってはい？」

そのへんてこな口調のせいで危うくテキトーに流してしまうところだったが、なんか聞き捨てならないトンデモ発言が聞こえたぞ。

「じゃから鬼じゃけん。それがしは、ゴミクソで能無しでバカの大王でゴリラの鼻くそのようなお前を鍛えるために来たのでござる」

「ご、ゴミクソって……」

笑顔で人の目の前で思いつき罵倒するなあ——！と、叫びたいところだが、さっき自虐しきったこともあり、心は想像以上のダメージを受けていたため、俺は意気消沈するよりほかなかった。

「というか、落ち込むより先に突っ込むべきことがあるだろう、白真！」

「鬼って、なんだよ。まあ頭の角からしてそんな類かとは思っていただけ、本物か？」

「クリーチャーがあるんやから鬼がいてもおかしくないやろ」

「そりゃそうだけど……もう一つ質問。えっと、美鬼が鬼だとして「鬼じゃ鬼にや鬼ですわ！」あーもう分かったからダダこねるな！んで、鬼がサヴァンの特訓相手になるのか？」

途中でじたばたし始めた美鬼をなだめながら俺は尋ねた。

亜空間の中に侵入できたってことは少なからずいつも能力持ちなわけだ。そして、誰かに頼まれて俺を鍛えに来た。たぶん涼華先輩あたりの差し金なんだろう。問題は、美鬼が自身のことを「鬼だ」というのは冗談なのかそうでないのか、そして鬼だとして、サヴァンがサヴァンやクリーチャー以外の敵と戦って効果があるのか。その二点に関しては、俺一人では判断しかねるものだ。

「にゅっ！ おぬし、拙者を信用できぬと申すか」

「いやあ、まあ、小っちゃいし可愛いし子供だし華奢だし。あと純粹に俺のためになるのか疑問。まああの人の差し金なんだから、何かしら考えがあつてのことなんだろうけど」

「にゅー、鬼もなめられたものでしゅ。——分かったにや。お前じや、みーの足元にも及ばないってことを分かせてやるき」

そう言つと美鬼は、俺の元からとてと離れていき、距離がだいたい十メートル程度のところで立ち止まると、にひひと悪戯を楽しむ子供のように怪しく笑いながら言つた。

「さあ、私^{わたくし}に向かつて、あなた様の全力を打ち込んでみなさい！
全てこの右手でちょちょいとあしらつてやるぜよ！」

「だーもう分かったよ！　どうなっても知らないからな！」

「最初っからそういえばよいのでござる」

なんで今の俺の声は聞き取れるんだよ。

「んじゃ、いつくぞー！」

「おー！」

ここだけ聞くとまるで野球してるみたいだな。とかホントどーでもいいことを考えながら、俺はボール、ではなく雷撃を撃ち放った。

* * * * *

んで現在ですはい。

「話にならないにやー……ちょっと、一旦全員しゅー！」
全員って俺だけだろうが。

と、本当は大声で言ってやりたいんだけど、息が上がって声が出ない。まるで持久走でもしてきた気分だ。予想以上に俺の体力は削られていた。

美鬼の前まで来て思わず膝をつく。

「遅いわい。バテバテやないか。最初の威勢はどこへ行っただんじゃ」
呆れたと言わんばかりの表情で、美鬼は俺を見下してくる。

予想以上に美鬼は強かった。それも、圧倒的に。

どういう原理か知らないけど、俺の雷撃を右手一本で弾いてくる。ただそれだけ。それ以上は動かない。雷撃が手のひらに激突して、その反動で後ろによろけたりさえしない。約三十発雷撃を放って、

放ち続けて、

俺の完敗だった。

「言ったにやる？ 足元にも及ばないと」

座りこんでいる俺に向かって、美鬼はまた、にひひと悪戯っぽく笑う。

「……本当だな。ごめん、正直見くびってたよ。美鬼のこと」

「気にしちゃいけないぜよ。ただ、見た目で人を判断するのは、今後やめた方がいいじゃろうな。命にかかわるからにや」

本当にその通りだ。その通りだよ。

結局俺は甘かったのかもしれない。昨日の今日で亜空間を完璧にマスターして、浮かれないように注意していたつもりだけど、どこか真剣みが薄れていたのかもしれないな。

途端、心に気持ちの良い風が吹いた気がした。

「いろいろ、工夫すればよかったな。俺ってば、ただただ美鬼に向かってバカ正直に雷撃を放っていただけだった」

「やっと気づいたのですね。ホントお主は低能じゃ」

「悔しいけど、その通りだな」

「……？」

あれ？ 美鬼から返事が来ない。

ふと横を見ると、美鬼がじっと俺の顔を見つめていた。

「……何？」

「……」

いや、なんか言えよ。何と云うか、すごい気まずいんですけど。

「……やっぱりお前は似ているな……」

「え？」

美鬼は掻き消えるほどの小さな声で、ボソツと何かつぶやくと、目を逸らしてスタスタと歩き出す。

「って、おい！ どこ行くんだよ」

俺が呼ぶと、美鬼は足を止めて、俺の方を振り返った。

「——え？」

振り向いた美鬼の顔を見て思わず驚きの声をあげてしまう。

その表情は、先ほどの悪戯笑いとは対照的な無表情で、ひどく大人びた顔つきをしていた。気のせいか、目つきも少し鋭くなっている。

「——強くなれ、白真」

「え？」

今までのふざけた口調でなく、透き通るような美しい声で、美鬼は俺に話しかけてきた。

なんだ？ どうしちまったんだ、美鬼？

「強くなれ、白真。この世界にはいずれ、サヴァンとクリーチャーの枠を超えた、運命の戦いが訪れる。そして、その戦いはそう遠い話ではない。その時、お前はあの戦いの最前線に在るべき存在だ。世界のすべては、お前にかかっている」

「み、美鬼？ お前、何言って——」

「お前は、選ばれし人間だ。お前の存在は、この世界に光を与えた。『神は二物を与えない』お前はあの定義を見事にひっくり返した存在。我々の希望だ」

「おい美鬼！ 突然どうし——」

俺は、ある違和感を感じ、途中で言葉を切った。

——なんだ？

この口調。どこかで聞いたことがある（……………）——！

「学校に戻れ、白真」

「え？」

声をどこで聞いたのか、誰のものだったのか、思い出そうとした矢先、再び美鬼が口を開く。

「校舎裏で、お前の仲間である谷原日和が、サヴァンの稲垣羽生斗と交戦している」

「何だつて！？」

俺は、反射的にケータイを取り出し、時刻をみる。

ここに来て、かれこれ四十分は経っていた。

いくら掃除とはいえ遅すぎるし、日和は人を待たせて道草を食うようなやつではない。

俺は素早くケータイをしまい、走り出そうとするが――

「聞け白真！ 羽生斗との戦いは、お前を必ず強くする。そして、お前と同じように、彼もお前との戦いで強くなる。ただし間違えるな。強さとは単純な力量だけではない。彼はそこで躓き、自分を見失っている。だが、お前は違う。その意味を充分理解している。お前と彼の間にある差はそこだ」

確信できる。今俺の目の前にいるのは、美鬼ではない。

美鬼ではない誰かの、心の底を見抜かれるような、純粹で、まっすぐなその瞳に、俺は吸い込まれるように見入ってしまった。

一刻も早く、日和を助けに行きたいのに、今ここで動いたら一生

後悔する——そんな気がして。

「これは試練だ。お前自身が成長するための試練。大事な人を守り抜くための試練。そして、白真が真に白真でいるための試練。その最初の試練は、谷原日和と稲垣羽生斗を助けることだ」

そう言うと、美鬼ではない誰かは、座りこんでいる俺の方へと歩み寄ってくる。その間も、俺は誰かの瞳から目が離せない。

誰か（・・・）は俺の前名で来ると、しゃがんで右手を伸ばし、俺の左頬に優しく触れる。

すると、表情を緩ませて、誰かは悲しげに微笑んで、また口調を変えて話しかける。

「他人任せでごめんなさい。私も、できることなら、今すぐあなたの力になりたいと思っている。心の底から思っているわ。けれど、今はまだダメ、あなたが強くなるその日まで、私は真の意味であなたに会うことはできない。はは……本当に他人任せよね」

ひどく優しい口調で、ひどく悲しそうな笑みで、誰かは語る。

「次に会うときには、おそらくあなたは全てを知った後。だいぶ先になるけど、私の言った言葉は絶対に忘れないでね。あなたが無事であることを、日々、祈っているわ」

「っ!？」

そう言い終えると、美鬼の体は突然強い光を放ちだす。俺はとっさに目を強くつむつた。

「ごめんね」

それが、最後に聞いた誰かの声だった。

* * * * *

「——！！」

がばつと俺は勢いよく跳ね起きる。

辺りを見渡して、状況を整理する。どうやら俺は、河原近くのグラウンドの真ん中で、堂々と寝ていたみたいだ。

「……美、鬼？……」

俺は、つい先ほどまで一緒にいた少女の名前をつぶやく。しかし、だだっ広いグラウンドには俺以外誰もいない。

あれは夢なのか——それとも——

カサツ。

「？」

俺が立ち上がると、太もも辺りに置いてあった二つ折りの紙切れが地面に落ちる。

何気なく紙を拾って、その中を開けてみた時——俺は目を見開いた。

そこには——

『あれは全て現実のこと。今すぐ学校に戻って』

体中に衝撃が走った。

美鬼も誰かも、夢なんかじゃない！ 全部、確かにここであったことなんだ！

と言っことは――

「日和っ！」

俺はその紙切れを握りしめたまま、走りだす。

走りながらケータイを取り出し、時刻を見る。

（時間は美鬼と会ったところから動いてない！　つまり、まだ学校を出てからそんなに経っていないはずだ！）

それならと、俺はスピードをさらに上げる。おそらく、あの誰かが時間を調整してくれたんだ――俺が二人を救えるように。

「いいぜ」

俺は紙切れを持つ手を、さらに強く握り締める。

「救ってやる。あの二人を救ってやるよ。こんなゴミクソで、能無しで、バカの大王で、ゴリラの鼻くそのような俺だけど、アンタが美鬼が祈ってくれるっていうのなら、俺はどんな運命にも立ち向かってやる！」

前方を見る。目的地の学校はすぐそこだ。

「待つてろよ。日和、稲垣羽生斗！」

美鬼 「ダレカ」(後書き)

いかがでしたか？

ていうか、前書きすみませんでした。

実は今回の話、行き当たりばったりで描いたものなのです。

というのは、shallkuは基本。何日も前に話を書いて、投稿
日当日にその日出す話の見直しをして、投稿しているのですが、今
回の話はその見直しの時点で、

「これは違う！」

とか思ってしまったために全部書き直し、こうして遅れてしまった
わけです。

だって、当初は美鬼なんてキャラいませんでしたから。

ホント、行き当たりばったりです(汗)

でも、最終的に、直してよかったと思っています。重要な伏線もち
やんと張れたし。

それとも、失敗ですかね？

そこらへん、答える気がありましたら、教えてください。

次回は、ついにハウトと白真が激突です！

お楽しみに。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

間章 「オニゴツコ」(前書き)

すみません。ハウトと白真激突しないっす。

それと、重要なお知らせが。

もう、23:00に更新できないので、今回から月曜の0:00に更新することになりました。

……すみません。

とにかく、
どうぞ。

間章 Ⅱ オニゴツコⅡ

静寂に包まれた廊下に、一つの足音と、ポタポタといった水滴の音がこだまする。

その足音は、速くなったり遅くなったりと、不規則なペースで響き渡り、また、それに比例して水滴が刻むリズムも変化する。

やがて階段側まで来た日和は、一度背後を振り返り、誰もいないのを確認すると、壁に背を預けてその場にどかっとな腰を下ろした年頃の女子としてはあまりにも遠慮のない座り方であるが、そんなことを気にしてられるほど、今の日和は余裕などなかった。

「ぐっ……！」

肩で大きく呼吸すると、右手で抑えていた左肩に激痛が走る。日和は呼吸すら満足にさせてくれないのかと、真紅に染まった自身の左肩を恨めしく睨んだ。

今、日和は校内を逃げ回っている。先ほどまで自分が縛り上げていたはずの羽生斗から、追われるようにして逃げていた。

日和が亜空間を学校全体まで拡大させたのには二つの理由がある。一つは、羽生斗と一定の距離をとりやすくするため。もう一つは、校内のどこかにいるはずの涼華に援護を頼みたかったからだ。

しかし、涼華が駆けつけてくる気配はない。日和が羽生斗の存在に警戒しながら、自ら生徒会室へと出向くと、不運にも、今日の生徒会活動は校外で執り行なわれているようだった。

不在と知った日和は、慌てて生徒会室から出ていこうとする。出入り口が一つしかないこの部屋で羽生斗と鉢合わせしてしまえば、逃げ場はなくなり、袋の鼠と化してしまうからだ。

だが、日和がドアノブを回し、勢いよく部屋から飛び出すと、見

計らったように高圧水流が飛んできて、日和の左肩を切りつけていったのだ。

そして今、羽生斗を軽く撒いた日和は、だらしなく座りこんだまま、思考を巡らせている。

（稲垣くんは、今日涼華さんが校内にいないことを知っていたんだ。そして、私が生徒会室に様子を見に来ることを予想していたから、すぐに私のもとに辿りつけた。……うんうん。きっと、今日私を襲うと決めた時から、この展開を予想していたのかも）

ふと、制服のポケットから可愛らしいハンカチを取り出し、傷を負った左肩をそれで縛るといふ簡易な応急手当をしながら、日和は冷静に頭を働かす。

（亜空間から出たら、周りの人からは、いきなり血だらけの人が現れたみたい映ってしまうけど、この際はしょうがないよね。悔しいけど、稲垣くんの方が数枚上手だし。ひとまず逃げなきゃ――）

刹那。日和のすぐ横を高圧水流が駆け抜けた。

高圧水流は廊下の行き止まりに勢いよく衝突し、派手な音を立ててコンクリートを粉碎する。

ゾグン、と。日和はその身を氷海に投げ出したような悪寒に襲われた。

「……まったく。いつまで逃げるつもりだ。僕は戦うために来たのである、君と仲良く鬼ごっこをするのが目的ではないんだぞ？」

背後から聞こえてくる声。それは、狂気に満ちているわけでも、憤怒に支配されているわけでもない。軽いあいさつとなんら変わらない声色だった。

少なくとも、今が戦いの最中だということを、全く感じさせない程度には聞こえた。

その言葉に本能的な恐怖を感じながらも、日和は羽生斗の言葉の端々に、どこか悲しみの念を感じたのだが、今は深く考えないことにする。それよりも、

（早く逃げなきゃ！）

コツコツ、と。徐々に大きくなる足音と近づいてくる気配に押されて、日和は左肩をより一層強く掴んで、一気に目の前の階段を駆け下りた。

羽生斗は、そんな日和の姿を見つけても追おうとせず、その遠ざかっていく後姿を静かに見送る。

「……まだ逃げるのか」

大きなため息とともに、羽生斗は思わずそうぼやいた。数々のサヴァンを相手にしてきたが、やはり皆自分が不利になると、戦わずに逃げを優先し始める。もちろん、それは最良の判断なのだが、それでは戦うわけでもなく時間をムダに浪費してしまうことになり、力をつけるには非常に効率が悪くなってしまふ。戦うことに意味を成す羽生斗にとって、これは由々しき問題だった。

しかし考えていても仕方ない。逃げられたら、完全に見失う前に追いつかなければならないのである。羽生斗はまた一つ大きなため息をつきながら、特に急ぐわけでもなく、悠々とした足取りで、階段を下って行った。

間章 〓オニゴツコ〓（後書き）

いかがでしたか？

重要なお知らせが、前書きと別にもう一つ。

shalluku。定期テストが近づいてきてしまいました。

よって、来週と再来週（7月4日と7月11日）は、更新できませんん。

頑張れば11日は更新できるかもしれませんが、どうかなあ……
できても今回みたいに短いと思います。

あまりぶつ切りにしたくないからなあ、ここらへん。

代わりに、夏休みに入れば、もっと早く多く更新できるようにしたいと思ってます。
週2くらいには。

ということで、よろしく願います。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

登場 「ヒーロー」 (前書き)

長らくお待たせいたしました。

本当は昨日の0:00に更新するはずだったのですが、予約掲載が一日ずれていたみたいで……真に申し訳ございません。

しかし！

夏休みに入るので、週2の更新をやりたいと思っています！
木曜か金曜、時間は変わらず0:00にしようかなと。

おいおい、活動報告で連絡します。

てことぞ、
どうぞ。

登場 「ヒーロー」

空は夕刻の時。

亜空間内は、薄い紫色の壁に覆われているが、外界の様子が全く見えないシャッターと言うわけではない。外の様子も近づけば見えるし、力を持つ者ならすり抜けることも可能だ。

日和は廊下を走りながら窓の外を横目で盗み見た。焼き付けるような真つ赤な夕暮れの空は、薄い紫の壁を通すと若干暗く見える。

幸い、亜空間が施されていたのは学校の敷地内のみで、広範囲にわたっているわけではない。日和が自身の亜空間を加えてもこの規模なのだから、羽生斗はそうとう小さく亜空間を作ったのだろう。おそらく、範囲を大きくして、街に出払っている涼華に気付かれるのを恐れたのだと、日和は予測した。

つまり、羽生斗は涼華を厄介な相手として認識している。日和自身も、彼女の強さは百も承知なので、避けなくなるその気持ちは十分理解できた。

だが、逆に言うと、味方につければ彼女ほど心強い人はいない。情けない話だが、今の自分の実力では、どうしても羽生斗に遅れをとってしまう。羽生斗が本気で自分を殺るつもりなら、誰かに援護をもらうなり、亜空間外に逃げるなりするしかなかった。

日和は、階段を駆け下りて、勢いそのままに校舎から飛び出した。正門の外には自分と同じ制服を着た、何も知らない一般人が帰路に着こうとしている。もちろん、彼らには亜空間内の様子など見えていない。

（このまま駆け抜ければ――）

外に出られる！

そう考え、一段と地面を蹴る足に力を込めた、刹那。

ヒュン、と。日和の上斜め後ろから何かが飛んできて、日和の進行方向上に着地した。

（――！）

日和の足は、たった今、スピードを上げるように脳から命令を受けたばかりである。今さら急ブレーキをかける余裕など、どこにもない。

前に出された右足が何かを踏んづけ、それでもなお収まらない勢いのまま、入れ替わるように左足を出したところで、日和は初めて、踏みつけたものの正体を認識した。

（足が……離れない……！）

右足の下にあったのは、スライムのようにドロドロとした、粘性のある液体だった。それに足をとられ、あと数歩の校門が急に遠く感じる。

日和は、とつさに左手を地面につけ、木の根を発生させる。それを自分の右足まで這わせ、地面の下から右足を持ち上げようとする。だが、木の根がスライムに触れると、地面の下の蠢きが止まってしまった。それは、スライムの粘着性を前に、自然の力が屈してしまったことを意味する。

どうやら、負傷している左肩のダメージが思いのほか大きく、最大限の力を出せていないらしい。

「そんなっ」

このトラブルは予想外であり、さすがに日和は狼狽えそうになった。

しかし、手がないわけじゃない。近くの木々に手をあてて、力を分けてもらうようお願いをすれば、足りない分を補うことができるはずだ。

日和は、一瞬自身の脳裏によぎったマイナス思考をすぐさま打消し、地面につけていた左手を木々に伸ばそうとして――勢いよく引

つ込める。

シュツ、と。先ほどまで日和が伸ばしていた左腕の位置を、高圧水流が通過していった。

亜空間の壁に当たった高圧水流は、パアッン！ と、高い音を飛沫をまき散らして、消滅する。それは、基本、能力によって生まれたものが、亜空間外に出ることはないことを物語っていた。

「いい反応だ」

背後からの声。

今日、幾度となく聞いてきた声だというのに、未だ慣れることのできない声。

日和はあえて、ゆっくり振り返った。そこに大きな意味はないつもりだったが、きっと落ち着くため故に、無意識に行ったのだろう。「足、速いんだね」

臆することなく、まっすぐに羽生斗を見つめて、日和は言った。

「廊下や階段は走っていけないと習わなかったのか？ 非常階段を使っただけだ」

羽生斗もまっすぐに日和を見つめる。視線がぶつかり、火花が散るなどと言う描写をたまに見かけるが、今の二人はそれに近かった。二人は見つめ続ける。十秒にも満たない間のことだったが、当の二人には、十分にも一時間にも感じられた。

「私を殺すの？」

先に沈黙を破ったのは日和の方だった。

月並みのセリフだが、そこに畏怖の念はない。むしろ、普段の日和からは想像もつかない、やり返してやるといったような、力強い

意が込められていた。

「そんな物騒なことはない。というか、サヴァンと言えど僕は高校生。見る人から見ればまだガキと言われる年齢だ。軽々しく『殺す』なんて口にするものじゃないだろう……」
「というか、僕はそこまで危ないヤツに見えるのか……」

対して、羽生斗は深い溜息をつく。自分を殺人鬼扱いされたことに、思いのほかショックを受けているようだった。

女の子相手に殺気を立たせ、校内を追いかけていたら殺人鬼扱いされて当然だろうと思うが、どこまでも礼儀正しく清楚に育ってしまった日和は、相手が落ち込んでいるのを見て、思わず謝罪を述べてしまう。

「あ、いや、そんな、気にしないで！ お、思わず口から出ちゃったと言うか他意はないというか……痛っ」

日和は両手をぶんぶん振って否定しようとしたが、左肩に忘れかけていた痛みが走り、小さく悲鳴を上げる。

イタタタ……と左肩をさする日和を見て、羽生斗はまた深い溜息をついた。その顔には、先ほどのまでの殺気は感じられない。

（……ここらが潮時か）

今のたった一分程度のやり取りで、羽生斗は、自身にまもっていた緊張感を、一気に解かれてしまったように感じた。

見つめ合っている間はよかった。自身の神経が隅々まで研ぎ澄まされ、戦いに対して、一定以上の興奮状態にあることが、自分でもよく理解できていた。しかし、日和が慌てて謝罪を述べているところを見て、思ってしまったのだ。

——こんな純真な女子相手に、自分は何をやっているのか、と。

なんだかんだ言っで、日和はまだ高校生だ。そこにサヴァンと言
う、ちよつと変わった個性を持つていただけの女の子なのだ。

何より、今の日和が彼女と被って仕方ない。羽生斗は、自分がこ
のような考えに至ってしまったら、その日はもう戦うことができな
いと、分かっていた。

つくづく甘い。結局、僕は誰も傷つけられないんじゃないか――

「痛むのか？」

日和は驚いて顔をあげた。先ほどの強い口調、全身を縛り付
けられるような殺気。それらが今の彼には微塵も感じられず、むし
ろ他人を氣遣うような、優しい声色だったからだ。

「……」

「そんなに身構えなくてもいい。今日はもう戦う気分ではないから
な。もつとも、簡単に信じてもらえるとは思っていないが……気休
め程度だが、包帯だ。くれてやる。目障りなら今すぐここから消え
よう」

羽生斗は日和の沈黙を、自分に対する拒否反応ととったらしい。
実際の日和は、驚きのあまり茫然としていただけなのだが。

「ちよつ、ちよつと待って！　そういうつもりじゃなくて。ちよつ
とビックリしただけから……」

まだ新しい包帯を日和の傍らに置き、その場を去っていこうとす
る羽生斗を、日和は慌てて呼び止める。いきなり態度を変えた理由
はわからないが、これはチャンスだと思った。

追う、追われるの関係でまともに話ができなかったが、今は違う。
羽生斗がなぜ攻撃してくるのか。なぜサヴァン同士慣れ合うのを嫌
うのか――ずっと抱えていた疑問に、落ち着いている今の羽生斗な
ら、答えてくれるんじゃないかと考えたのだ。

羽生斗はもう一度立ち止まり、顔だけで振り返る。

「なんだ。僕の気持ちが変わらないうちに、逃げたほうが賢明だぞ」
やはり、もう殺気は感じられない。

ならばと、日和は尋ねた。

「聞かせて？ どうして、多数で仲間を作っているサヴァンの仲を裂こうとするのか」

その日和の質問に、羽生斗はあからさまに顔をしかめた。それは、悩んでいるというよりも、どこか苦しんでいるようにも見える。

しかし、この反応で十分だと、日和は思っていた。

（これだけ嫌がるそぶりを見せるんだから、やっぱり、過去に仲間関係で何かあったんだ……それはつまり、もともとは稲垣くんにもサヴァンの仲間がいたという事。上手く説得すれば、私たちの力になってくれるかも……）

日和は、もともと羽生斗を仲間に入れるつもりでいた。

当初の予定では、羽生斗を木々の根で縛り上げていたあの時に、この提案を持ちかけるつもりだったのだが、あっさり解かれてしまったため、一度は諦めた提案でもある。

けれども、今はこうして、尋ねる機会を設けることができている。彼の古傷に触れるかもしれないというリスクはあったが、やはり、先にこの疑問をはっきりさせる必要があったのだ。

しかし、日和が思っていた以上に、羽生斗の古傷は深かった。

「……約束が違う」

「え？」

ぼそりとつぶやいた羽生斗の言葉に、反射的に日和は聞き返す。そして、その時になってから、日和は、羽生斗から殺気が再び出ているのに気づいた。

「約束が違うだろう。その質問は、君が僕に勝利した時の戦利品として扱うはずだったものだ。そう約束した」

「え、でも……」

「でも何も無い。僕は約束を破れることが、この上なく嫌いだ。そんなに聞きだしたいのなら、僕から勝利をもぎ取れ。何なら、まだ相手をしてやる」

言うが否や、羽生斗は戦闘態勢に入る。その目には、先ほどまでは無かった怒りの感情も宿されていた。

羽生斗が再びいきり立った原因が分からないほど、日和は鈍感ではない。あの質問がいけなかったのだと、日和はすぐさま理解し、そして後悔した。

彼なりに、その過去に気持ちの区切りをつけていたのだろう。しかし、日和の質問が、羽生斗の決意を揺るがしてしまったのだ。相手が触れてほしくない話題を、積極的に振っていかうとすれば、嫌われるのは当然である。

「前に言った通り、殺しはしない。だが、お前は僕のパーソナルスペースを侵しすぎた。その分の代償は受けてもらうからな」

（まずい……！）

羽生斗は本気だ。今は完全に怒りが心頭に発してしまっている。

提案はおろか、謝罪も聞き入れてはくれないだろう。

日和は羽生斗の放った粘着性のスライムのせいで、身動きが取れない。徐々に体力も削られ、力を最大限に使っても、太刀打ちするのは難しい。

あと数歩で亜空間から出られるというのに、その距離が再び遠くに感じる。

何か手はないか——日和が再び思考を巡らし始めたところで、

「終わりだ。なかなかの實力だったぞ」

タイムリミットの終了を知らせるかのようになり、羽生斗から高圧水流が放たれた。

（あ——）

高圧水流は、まっすぐ自分に向かって飛んでくる。もう、避けるだけの余裕はない。

（やられる——！）

全ての手が潰され、日和は思わず、ぎゅっと固く目をつぶった。その瞬間。

バチバチィ————ン——！！

黄色く光る雷撃が、日和の目の前まで来ていた高圧水流を一閃した。

「——！！」

羽生斗は、大きく目を見開き、雷撃が打ち込まれてきた方向に目を移す。

そして、その目は、校門近くの、両手を膝につけて大きく肩で深呼吸をしている、一人の少年をとらえた。

少年は荒い息を整えて、顔をあげる。ぽかんと気の抜けた表情で自分を見つめる日和と、睨みつけてくる羽生斗の顔を、それぞれ一瞥し——笑みをこぼした。

それは、さながらこの場を、雰囲気、楽しむような、なんの含みもない純粹な笑み。

笑顔を浮かべたまま、桜木白真^{ヒトロー}は登場した。

「――助けに来たぜ。二人とも」

登場 ⅡヒーローⅡ（後書き）

いかがでしたか？

相変わらずセリフがくせえ。でも、そこがイイ。

次回は白真vsハウト。

そして、ハウトがサヴァン同士の仲を裂くその理由。

どうぞ期待です。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

二人 ⅡカオアワセⅡ（前書き）

約二か月ぶり。

もちろん、お気に入りが減っている。
ただでさえ少ないのに。

……がんばろう。

どうぞ。

二人 Ⅱ カオアワセⅡ

「白真くん……」

日和は俺を見てなお、未だ驚きの表情で固まっている。

無理もないだろうな。美鬼に言われて学校を目指したものの、運動場と学校は結構な距離があるし、どんなに走っても、亜空間の気配はなかなか感じ取れなかった。案の定、亜空間の規模はたいして大きくないし、もう二人の決着がついてしまったんじゃないかとヒヤヒヤしたものだ。日和も、助けに来るのは俺じゃなくて涼華さんだと思っていたのだろう。

「今さらお前が来たところで、助けることなどでき……待て。『二人』だと？」

稲垣は俺の言った『二人』というワードに食らいつき、呆れた表情から一転、怪訝そうな顔をして、睨みつけてきた。

その視線から逃げるように、俺は二人の服装に目を移す。両者ともに、派手な汚れ方をしており、それは、二人の戦いがいかに激しいものであったかを物語っていた。

しかし、二人では汚れ方が違う。赤と茶。血の色か泥の色か。日和の痛々しい左肩を見ると、どうしようもなく怒りが込み上げてくるが、美鬼の言葉を思い出して即座に怒りの炎を鎮火する。

『羽生斗との戦いは、お前を必ず強くする。そして、お前と同じように、彼もお前との戦いで強くなる。ただし間違えるな。強さとは単純な力量だけではない。彼はそこで躓き、自分を見失っている』
『最初の試練は、谷原日和と稲垣羽生斗を助けることだ』

美鬼が何者なのか。信用できる話なのか。疑問は尽きてやまないけれど、俺は自然と信じることができていた。根拠なんてない、直感的なもの。そういう類は案外バカにできないからな。

だから、

「そう、『二人』だ。日和と稲垣（おまえ）の、二人を助けに来たんだよ。俺は」

さらっと、あたかもそれが当然であるかのように、俺は答えることができた。

即答されるとは思わなかったのか、稲垣はとっさに言葉が出てこない。俺もビックリだよ。さらっと言いやがって、かつこいいぜ、俺。

しかし、意外にも、日和の表情には変化がなかった。てつきり「えっ？ えっ？」と、頭上にはなマークを浮かべて、あたふたすると思っていたんだが。それどころか、コクコクと俺に向かって頷いてくる。

もしかして、日和はすでに、稲垣について何か知っている――？

「お前はバカなのか？ 僕を助ける？ この場には、クリーチャーなんて存在していない。彼女は僕が傷つけたんだ。それとも、日本語を正しく使えないほど低能なのか？」

稲垣が俺に向かって、吐き捨てるように言い放つ。その口調は何かごまかしているように聞こえた。

俺が言った、『助ける』の意味を理解していながら、稲垣は、それを拒んでいるということか。

それなら――

「そんなこと、分かってる。お前が日和を傷つけたことくらい、百も承知だ。けどな」

俺は一度言葉を切って、わざとらしく間を空けて言う。

「——お前も、誰かに、何かに、心を傷つけられたんじゃないのか？」

俺の含みのある言葉に、稲垣があからさまな動揺をみせる。冷静沈着が売りの稲垣コイツがこれだけ揺らぐんだ。相当深い傷とみえた。動揺している稲垣をよそに、俺は日和の表情を窺う。日和はまたも、俺に向かって頷いていた。

てことは、日和も稲垣の傷の深さを知っているのか。だが、俺はその内容までは知らない。こればかりは、本人に聞くしかないか。

* * * * *

「——お前も、誰かに、何かに、心を傷つけられたんじゃないのか？」

白真の言葉を聞いた瞬間。羽生斗の体中に衝撃が走った。自分がなぜサヴァンを狙うのか、その理由を、誰かに打ち明けたことはないはずだった。

そう、自分から言うはずがない。なぜなら、理由を話さないのではなく、話せないのだから。

それは心の枷。絶対に破ることのできない、自らに科した掟ルール。羽生斗の脳裏に、自身の携帯の待ち受けである、五人の少年少女の姿がよぎる。

あのころの笑顔を、喜びを、幸せを、楽しかった思い出を。

一瞬で奪われた。

自分が恐れたために。

自分が弱かったために。

自分が信じきってあげられなかったために。

自分が、約束を破ったために――

……いやだ。

もう、あんな辛いことは、いやだ。

他人が、仲間が、大切な人が、

傷つくなんて、

耐えられない!!

ゴッ!

* * * * *

ゴッ!

「!」

日和とアイコンタクトをとっている最中、突然、鈍く大きい音が聞こえ、俺は反射的にその音源に目を移す。

そこには、いつもの涼しげな表情からは想像できない、鬼気迫った表情の稲垣が、すぐ近くの木に向かって、拳を突き出していた。

さっきの音は、木を殴った時のものらしい。そして、その拳は――

「おつ、おい！」

その震える拳からは、真つ赤な鮮血が、涙のように静かに流れ落ちていた。

汗も尋常じゃない。ついさっきまでサウナに入っていたかのように。しかし、その汗は、サウナで流す汗より、幾分も不健康に見える。

「おいっ！ 出血しているぞ！ ええっと、ハンカチハンカチ……日和、その包帯を——」

俺の一言がよほど聞いたのか知らないが、拳の出血は思っていたよりもひどい。俺がポケットからハンカチを取り出し、日和から包帯を受け取るうとした時、稲垣が口を開いた。

「僕に関わるな……」

その声はかなり低く、そして凄みが増していた。本能的に体が委縮してしまうくらいには、恐怖を覚える。

でも、止まるわけにはいかない。アイツは何かに苦しんでいる。傷つけられ、ボロボロであるはずの心を、必死にごまかしている。そんな事、あの兄貴に鍛えられた俺が、助けないはずがない！

静止していた左手を再び動かし、包帯を受け取ると、俺は稲垣に向き直った。

「それは乗れないご相談だな。最初にも言っただろ？ 俺は、お前を助けるに——」

言い切る前に、水の塊が飛んできた。

「——！」

俺はとっさに右手を振り、雷撃を飛ばす。

音もなく迫った突然の攻撃に、俺は反応が遅れてしまい、結果、目の前での相殺になってしまった。

余波が俺を襲う。弾き飛ばされそうになったが、顔の前で腕をクロスさせてガードし、両足に力を入れて踏ん張っていたため、多少の後退ですんだ。

水——これが稲垣の力か。

「殺すぞ」

やはり低い声で、稲垣は言う。その目は、視線だけで人を殺めることが出来そうなほど、鋭い。

「これ以上、僕にかかわれば命の保証は出来ない。本気だ。自分でも、力加減ができるかどうか怪しい——最終警告だ。僕に人殺しをさせたくないのなら、本当に助けたいのなら、一刻も早く、僕の前から失せろ」

言い終えると、稲垣は出血している拳を、ギリツ、と。さらに強く握り締める。もう涙なんて可愛いレベルじゃない。血は勢いを増して、とめどなく流れ続けている。

（どうする……？）

拳を思いつき壁にぶち当てて、血をドクドク流しても気に留めないほど、稲垣は猛り立っている。こいつに対して反発的な態度をとれば、多少、怒らせてしまつかもしれないとは思っていたけれど、これほどとは予想外だった。

（どうする……？）

一度退いて、稲垣の心が落ち着きを取り戻した頃に、もう一度訪ねるか？

今の稲垣は、本気で人を殺りかねない目をしている。余計な事を口走れば、彼自ら宣言した通り、怒りにまかせて突撃してくるかもしれない。怪我を負った日和を気にかけて、攻防を繰り返すなんて器用なこと、俺には出来る自信がなかった。

だが、同時にこつとも考えられる。

今を逃してしまつたら、もうチャンスはないんじゃないか？

この場を引いて、稲垣が落ち着きを取り戻し、後日再び尋ねたところで、身の上話をおいそれと話してくれるとは思えない。むしろ、今回の件のせいで、さらに警戒されてしまうだろう。無理やり聞き出そうものなら、今回以上に稲垣が暴走する可能性も否めない。

究極の選択。日和の安全を優先するか、戦闘を経ての稲垣の事情を優先するか。

……いや、待てよ？

（優先？）

「くつ、はははは！」

「「！？」」

そうだ、そうだよな。何勘違いしてんだ、俺。

こんなにも、簡単な話じゃないか――

「は、白真くん？」

「……」

突然笑い出した俺に、双方の視線が向けられる。日和は困惑した様子で、稲垣はさらに鋭さを増した目で。

俺はひとしきり笑うと、稲垣を見据えて言い訳を始める。

「はは……いや、ちょっと。自分のアホさ加減に、呆れを通り越しておかしくなっちゃって」

「アホさ加減？」

そうだ。俺は、自分から宣言しておいて、それを忘れていたんだ。「この場を退くか、戦うか。稲垣（おまえ）が切羽詰まった勢いで捲し立てるから、俺自身でもわかんなくなっちゃまっていた」

稲垣から目を逸らさず、口も動かしたまま、ゆっくりと日和に近

づいていく。

「ここに駆けつける前から、揺るがない決意を胸に秘めてきたっていうのに」

日和の隣に来た俺は、ごく自然にその場にしゃがむ。

「それに、その決意はここに来てすぐ、言葉にしたじゃねえか」

包帯を捨てた左手で日和の肩を掴んだ。「ひゃっ！」っと可愛らしい声が聞こえたが体よくスルーだ。

「ちっ……！」

何せ、向こうは俺の真意に気付いたみたいだからな。

バチツ、と。俺は右手から日和の足元に貼りついているスライムに向けて、微弱な電気を走らせる。

結果、綺麗にスライムは滑り落ちた。

「走れ！！」

俺が叫んだのと、日和が走り出したのは、ほぼ同時だった。

「くっ！」

ワンテンが遅れて、稲垣が日和に向かって高圧水流を飛ばす。

が、

「させるか！」

俺は日和の盾になる形で高圧水流の前に立ち、雷撃を放った。

銃の発砲にも似た大きな音とともに、雷と水は一瞬にして相殺し合う。だが、たかが一瞬とは言え、人ひとりが数歩の距離を移動するのには十分な時間だった。

そして、日和無き後に残るのは、対峙した俺と稲垣のみ。

「改めて言っぜ」

二人だけの戦場と化した亜空間で、今一度、俺は決意する。

「お前を、絶対に助ける」

二人 『カオアワセ』（後書き）

いかがでしたか？

お久しぶりです。いろいろ言いたいけど、それは活動報告で。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

足 ⅡアドバイスⅡ（前書き）

久々の更新。

お気に入りユーザーにしてくださった方々、ありがとうございます
感謝です！

まだまだ未熟者ですが、今後ともよろしくです。

……これ前書きで書くことじゃない？

それでは
どうぞ。

足 〃アドバイス〃

合図などなかった。

羽生斗と白真。二人の意志は能力という形で具現化され、ぶつかり合い、さながらゴーストタウンのような亜空間に音を生んだ。とはいえ、その音は破裂音という名の不協和音であったが。

羽生斗は右、左と交互に高圧水流を繰り出す。その一連の動作は一切のムダがなく、わずかなタイムラグさえ許さない。そして、ある程度の場合数を踏んできた彼にとっては、この一見むちゃくちゃに見える攻撃方法でも疲労を感じることはなかった。

そんな羽生斗を相手に、能力発現からわずか四日しか経っていない白真が真正面から太刀打ちできるかと言えば、もちろんNOである。

「つつ！」

間髪入れず襲い掛かってくる高圧水流を、白真は走りながらひたすら避ける。避けきれないものは雷撃を放ち相殺させた。

せわしく動き回る白真と、一步も動くことなく攻め続ける羽生斗。完全に攻守が分かれた今、どちらが優勢など尋ねるまでもない。

そう。尋ねるまでもない、はずだった。

「チツ！」

大きな舌打ちをしたのは、攻め続けているはずの羽生斗だった。始めに怒涛の攻撃をしかけ、敵のスタミナを奪う。動きが鈍くなってきたところで、標準を下半身、ないし脚に集中させ、深手を負わせる。そして、身動きの取れなくなった相手にとどめを刺してフイニッシュ——それは、羽生斗が持つ数多の戦術の一つだった。シンプルかつ効率的という理由から、羽生斗が頻繁に使う戦術でもあ

る。力量の底が知れている敵ならば決着も容易くつくので、白真に對してもこの戦術で挑むことにしていた。

だが、

（まだ走れるのか——！）

その計画は予想外にも、初段で躓いてしまった。

動き、避け続ける白真の顔には、未だ苦悶の表情は見受けられない。それどころか、避けるスピードが増しているようにも見えた。

二手・三手先を読んで羽生斗は高圧水流を繰り出す。しかし、その読みを超えるスピードで、白真は避け、雷撃で相殺させる。

どう考えても、四日で身につけた代物ではない。

たった四日で、サヴァンの戦いに馴染めるわけがない。

誰かにみつちりしごいてもらわない限りは。

（これを篠原会長が？）

とつさに思い浮かんだ人物は涼華だ。羽生斗は昨日、涼華、白真、日和の三人の特訓風景を目撃している。日和と白真の存在と力量を知ったのも、その時だった。

（だが、昨日だぞ？ 昨日の今日でここまで進歩するものなのか？）

羽生斗が昨日見た時点では、白真はまともに亜空間すら使えなかった。それがどうだ。高圧水流を前にしても臆することなく、相手の動きを逐一捉え、あまつさえ自身の能力を正しく駆使している——たった一日足らずで、人はここまで成長できるものなのだろうか。羽生斗は、今その敵を目の前にしてなお、信じられなかった。

さらに、疑問は他にもある。

（仮に篠原会長がこの男をここまで鍛え上げたとして、それはいつだ？ 今日一日中この男を見張っていたわけではないが、授業中は少なくとも会えないはずだ。昼休みは、片桐さんとの口論のさいに

僕と共にいた。放課後は篠原会長がすぐ学校を出たから会えるわけがない。なら、一体いつ——いや、待て)

そこまで思考を巡らせたとき、彼はある一つの仮説に行きついた。おそらく、彼が最も恐れている仮説に。

(やつは、本当に、篠原会長に教わったのか——?)

逆転の発想。

今ある選択肢のほかに、別の選択肢を見出す。そして、その真新しい選択肢に、人は過度な期待をするものである。

(そうだ！ これで全員とは限らない！ もし三人のほかに、四人目が存在したら？ その四人目が、白真こいつを短時間でここまで成長させられるほどの力量だとしたら?)

実を言えば、羽生斗のこの推理は半分正解だった。白真を鍛え上げたのは、涼華ではなく美鬼。四人目と言えは四人目ではある。しかし、彼女がワケあって白真の手助けをできないことを、彼は知る由もない。

(桜木と一戦を交え、僕が隙を見せたところをついてくるとしたら、この攻撃方法はまずい。プランを変更しなくては!)

* * * * *

(むちゃくちゃ過ぎるだろこんなのっ!)

稲垣に宣戦布告した次の瞬間には、俺の顔のすぐ横を高圧水流が駆け抜けていった。

コンマ一秒たっぷりフリーズし、頬に生暖かい雫の存在を認識してからようやく本能が回避命令を下してくれた。

そのおかげで、第二撃が俺の身体を赤く染めることはなかったが、その後、稲垣のスイッチが入ったらしく、高圧水流が打ち付ける電ひょうりゅうの如く猛ラッシュで飛んできた。

現在、それを俺が避け続けて、たっぷり五分は経っていると思う。
(にしても、美鬼様様だな)

一時間ほど前の、美鬼から受けた特訓内容を思い出す。

—*—

「なつてない」

「は、はい？」

「なつてなさ過ぎるにゃー!!」

美鬼との特訓中、俺が彼女に五発ほど雷撃を打ち込んだあたりで、ヤツはそう叫んだ。

「何やねん！ 全っ然ダメじゃありませんこと！ 軽い応用くらいは効かせて来てくれると思ったのに！ ぼけーと突っ立って雷撃かまして顔だけシリアスになりおって、バカの一つ覚えかー！」

なんか自称鬼がいろいろ叫んでいるが、今の俺にはその言葉まで耳を傾けている余裕がなかった。繰り出した雷撃がことごとく弾かれる。まるで目の前を飛ぶうっとおしいハエを手で払うように。

舐めていた。今まで相手にしてきた、桂先生や牛型のクリーチャーに、少なからず悲鳴を浴びせていられたことで、どこか心が大きくなってしまうていたことを自覚した俺は、目の前にいる少女にただただ焦りと恐怖を感じていた。

「聞いているかにゃー？」

「おわっ！」

気が付くと美鬼の顔が目の前にある。とつさに後ろに跳ばうとするが――

「遅い」

その前にがつちりと、美鬼に腕を掴まれてしまった。

すると、美鬼は俺の額へと手を伸ばし、

「痛ッ！」

唐突にデコピンしてきた。

小さくて細い指に似合わず、かなりの衝撃が俺の額に響く。

「いきなり何！？」

掴まれていない手で額を抑え、大きな声で怒鳴ってしまう。雷撃を弾かれてショッキングな状態で、いきなりのデコピン。恐怖や怒りもそうだが、俺はただ単に混乱していた。

「解りませんこと？　今のであんた、いつぺん死んだで」

「――え？」

先程までとは違う、真剣みを帯びた美鬼の表情に、出てくるはずだった言葉が引つ込む。

その表情を見て、俺はハツとする。

美鬼はさっきまで俺から十メートル離れた場所で雷撃を受けていた。

俺が美鬼から視線を外したのは五秒ちよつと。

そのわずかな間に足音を立てず、気配を消して俺の目の前に来ることなど可能なのだろうか？

「そして僕はお前にデコピンをした。もしこれがクリーチャーだったらどうする。デコピンがナイフだったらどうするんじや」

自分の置かれていた状況がやっと呑み込めて、全身が震えあがった。

「お前は勘違いをしているにや」

さらに美鬼は畳み掛ける。

「特別な力を得て、それで誰かを護ることができると思いました？　得した気分でしたの？　はつきり言っぞ、そんなものは幻想

じゃ。サヴァンとは神に選ばれた専売特許などではない。神の気まぐれにより、戦うことを強制された哀れな人間にすぎん。平和をいくら求めたところで、サヴァンとしての本能が邪魔をする。戦いに身を投じていなければ気が済まなくなる。ヒーローになれるのではなく、ヒーローであり続けなければならない。それを自覚していない以上、能力スキルを持っていても宝の持ち腐れ、弱くて当たり前だにや。他人どころか自分さえ護れないにや」

美鬼の言葉一つ一つが俺の胸に突き刺さる。思えば、俺がクリーチャーと遭遇した時はいつも日和や涼華先輩が傍にいた。俺自身が能力を使っただのは二、三回だけで、実際にクリーチャーに立ち向かっていったのは、二人だ。

能力を持つていながら、まだ俺は『護られる』側にいる。その現実を突きつけられて、怒りにも似た悔しさが、心の底から湧き上がってきた。

「助けはしないが、成長のための手助けはしてやるにや。異論は…ありませんわね？」

「……よろしく、お願いします」

* * * * *

「ちょこまかとっ！」

稲垣は二、三手先を読んで高圧水流を飛ばしてきている。そしてその読みは確かに当たっている。なのに、なぜアイツの攻撃が俺に届かないのか。

それこそが、あの美鬼との小一時間の特訓で一つだけ教わったアドバイス。

『手以外からの電気の放出、および扱い』

両手からだけでなく、身体のほかの部分からでも電気が放出でき

る。

例えば、足。

足の筋肉を微弱な電気で刺激し、本来筋肉が持っている力を最大限に利用する。

人間の力というのはそもそも、一〇〇%全力を出すことはできないようになっていいるらしい。身体が力に耐えられず、崩壊してしまうからだとか。

そのリミッターを微弱な電気で無理やり外し、筋力の増強を促す。よって、通常の人間ではありえない速度での回避を可能にした。

（最初慣れなかったよなあ、これ。やった後バランス感覚がヘンになるし、やり過ぎで足何度もつったし、気持ち悪くて吐きそうにもなった）

けれど、慣ればこれほど便利なものはない。美鬼に言われて学校に向かった時もこの方法のおかげで早く駆けつけられたしな。

ちなみに、なぜ俺の足はリミッターを外しても崩壊しないかと言うと、美鬼曰く、

「自分の能力で死ぬバカはいないにや
」
だそうです。

そうとは知らず、稲垣は高圧水流を飛ばし続ける。体を動かすよりも能力を使う方が体力を削るのだから、アイツは俺以上に疲れているはずだ。

（そろそろ反撃させてもらっぜ）

右足に力を籠め、避けていた時よりも速いスピードで稲垣の懐に入った。

足 〃アドバイス〃（後書き）

いかがでしたか？

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

敗北寸前 「イチジキュウセン？」（前書き）

2週間ぶりですかね。

0時に予約投稿をしちゃうと、みんなその時間帯に投稿するから、新着小説のすぐ後ろに行っちゃうんだよね！。

でも、0時に1番よく人が見るのも事実。

11時じゃアクセス数が少ない。

1時だと、誰も見ない。

そう考えた結果の0：30！

前書き長くなりましたが（↑いつものこと）
どうぞ。

敗北寸前 「イチジキュウセン？」

「――！」

俺の突然の突撃に、稲垣は慌てて飛び退こうするが、
「はあっ！」

能力によって加速された俺の右足がそうはさせない。

ブウンと低く唸りながら風を切る右足が、稲垣の顔面に迫る。しかしさすが稲垣と言うべきか、回避不可能と判断した稲垣は、とつさに左腕で顔をガードした。

ボゴツ、と。鈍い音が響き、稲垣の体が蹴り飛ばされる。左腕一本ではガードが甘かったみたいだ。

「ぐっ……！」

そのまま転倒すると思ったが、稲垣は強引に体を反らせ体の軸を正位置に戻し、片膝をつく形で後退する。

攻守の均衡が崩され、入れ替わった瞬間だった。

俺はさらなる追い打ちをかけるため、勢いよく地面を蹴り、掴みかかるように襲い掛かる。

殴るわけでもなく、蹴るわけでもなく、掴む。

「――！」

高圧水流を飛ばそうと構えていた稲垣は、急きよ体勢を改め、地面を転がって俺の両腕から逃れた。

（さすがだ！）

敵ながらあっぱれ。俺のこの行動心理を読まれるとは思わなかった。

* * * * *

白真の蹴りによって攻守の均衡が崩れた今、『守』は羽生斗であり、『攻』は白真となった。ならば、白真の攻撃が蹴り一つで終わるはずがない。追撃を仕掛けてくるであろうことは、容易に推測できた。

羽生斗は無理やり体勢を整えて、敵の追撃より早く高圧水流を放つ構えをとる。

しかし、いざ白真と正面对峙となった時、異変に気付く。がら空きだ。

白真の体はスキだらけだった。拳を振りかぶっているわけでもなく、雷撃を撃つわけでもなく、両手をただ前方に突き出しているだけ。胴回りも下半身もまるで無防備。あれでは、どうぞ切り刻んでくださいと言っているようなものではないか。

稲垣は訝しむ表情を見せたが、視線がある一点を捉えた時、その目が大きく見開かれる。

両手。

白真が突き出してきた両手が、火花を散らしている。

（電流が流れて……そうか！）

それからの行動力は羽生斗本人も驚くほど俊敏だった。羽生斗は弾かれたようにその場を飛び退き、勢い殺さずそのまま一定の距離をとる。

白真の両手は標的を失い、結果当て所なく宙に浮いている。白真はそんな自分の両手を見て、次に逃れて距離をとった羽生斗を見て、同じように目を見開き驚いていた。

羽生斗はうまく距離をとることができたことにホッと胸をなでおろすと同時に、体中に戦慄が走ったのを感じた。

両手から散らされた火花。『掴む』という行為。

（間違いない……やつは、僕を気絶させようとしていた！）

羽生斗が見た白真の両手が散らした火花の正体、それは、手の内に溜めこまれた電気によるものだった。

（両手に電流を流しておき、スタンガンの要領で僕を気絶させようとしたのか。あれならば高圧水流も殴るように相殺できるし、なにより、僕の体に触れるだけでいい。なるほどそれは――）

羽生斗の目尻がつり上がり、拳が強く握り締められる。

（――それは舐められたものだな）

白真のとった戦法は決して疎まれるようなやり方でない。むしろ称賛に価すべきであろう。力量で相手に敵わないことを理解した上で、それを補う方法を模索し、実行に移している。自分より格上に対する振る舞い方がよく分かっているということだ。

しかし、稲垣が憤りを覚えた矛先はそこではない。

なぜ甘い？

それだけ頭が回るくせに、なぜ肝心なところで甘い？

羽生斗の高圧水流によって切り付けられた日和の右肩。羽生斗が日和に負わせた傷はそれだけではなかったのだが、白真はそちらの傷ばかりに目がいつていて、気づくことはなかった。

それに気付かなかったのが、白真にとって最大の過ち。

もう一つの怪我――日和の脚が、赤く腫れて熱を帯びていたことに気付けたなら、白真は「スタンガンもどき」などという戦法はしなかっただろう。

「だから君たちは……」

羽生斗の口から、静かに言葉が紡ぎだされる。その一つ一つは厳かな雰囲気を纏っていた。

そして、

「君たちは、弱いんだ――！」

言葉を爆発させた羽生斗の背後で、水道の蛇口が爆発した。

* * * * *

羽生斗に避けられ、思わず感嘆の息を洩らした俺がそれに気付いたのは、奇跡に近かった。大きく距離をとった稲垣に視線を戻した時、ヤツの背後に見えたもの。

蛇口。

水道の蛇口が、カタカタカタと何やら小刻みに震動していた。
「……？」

蛇口の震えはどんどん大きく、小刻みになっていく。

（何だ？）

「だから君たちは……」

「え？」

稲垣のつぶやきにより、注意を蛇口から稲垣に引き戻される。けれど、それがまずかった。

「君たちは、弱いんだ……！」

バアッ！ と、稲垣の背後にあった蛇口が吹き飛び、大量の水が噴射した。

「なっ！」

消防車のポンプのように、凄まじい量の水が、目の前の稲垣に襲い掛かる。

しかし、常識を超えてこそそのサヴァンである。

（水が、稲垣を避けてる！）

勢いよく噴き出す水は、まるで生命を宿しているが如く、稲垣を

避けている。

たちまち辺りが水浸しになり、水たまりがあちこちに出来上がった。

「桜木、君は二つの過ちを犯した」

「過ち？」

なおも止め処なく溢れ出る水の音をBGMに、稲垣は俺に話しかけてくる。

俺はそんな稲垣に意識を集中させつつ、手足に電流を流して、静かに戦闘態勢に入った。考えなくても分かる。蛇口があんな勢いで破損するのはあまりにも不自然。稲垣がやったのは確実だった。

「一つは、僕にとって最高の舞台を整えさせてしまったこと」

稲垣は水を操るサヴァンだ。水たまりに覆われたこの地帯は、稲垣のテリトリーも同然。俺は敵の陣地に一人で突っ込んできたようなもの。

でも、勝機はある。

水は電気をよく通すのだ。

水浸しのこの地帯は、稲垣のテリトリーであると同時に、俺にとっても都合のいいフィールドになった。これならば、水たまり全体に電流を流しておくことで、稲垣を容易く感電させることができる。両者に有利なこの状況。

つまりこの勝負、

「二つ目は――」

「早いもん勝ちだつてことだ！」

俺は稲垣の言葉を遮って、足元の水たまりを踏みつけた。

ちゃぷん。という音を合図に、足に溜まっていた電気が一気に放出され、水溜まりを通して稲垣へと向かっていく。

（もらった！）

勝利を確信して、頬を緩ませたその時、

バシユツ、と。水たまりが一気に蒸発した。

「――!?」

白い煙がもくもくと立ち上がり、あっという間に濃い霧が視界を奪い、二メートル先も見えなくなる。

（水蒸気!?）

霧を払いのけようと、両手で顔の前をパタパタと仰ぐが、全く効果がない。辺り一面が白い世界に覆われ何も見えないことへの焦りと不安が、湿度が上がりじめじめとした空気と同調し、汗となって身体から滲みでる。

「人の話は最後まで聞け。だから自ら窮地に立つようなことになるんだ」

霧の奥から、稲垣の声が響く。

声のする方向に稲垣がいるのか？ けれど、話しながら動いているのか、声だけでは場所が上手く特定できない。

「君が言った、『早い者勝ち』というのも一理ある。僕が水を振るのが先か、桜木が電気を通して感電させるのが先か……しかし」

稲垣の話に耳を傾けていると、霧が少しづつではあるが晴れてきた。さらに視界を良好にするため、両手で霧を払いのけていると、
「がつ！」

突然人影が現れ、俺の鳩尾に思いつき蹴りを入れてきた。

無論、稲垣によるものに他ならない。完全に虚を突かれた俺は、いとも簡単に蹴り飛ばされ、無惨にも水たまりの上をジャパジャパと転がる。

「この場合、そんな回答は求められていない。別に君の過ちという訳ではなく、むしろ僕の犯した過ちだから……ああ、ちなみに今の蹴りは先ほど蹴られたことへの返報だ」

「くっ……」

ゆっくりと立ち上がり、蹴り飛ばされた方を見るが、すでに稲垣の姿はない。

「話が逸れたな。君が犯した過ち、その二つ目は――」

とにかく動こう。霧が晴れてきた今ならば、人が目の前にいるのに気付かない、なんてことにはならないはずだ。

ふと右方向に気配を感じ、首だけをそちらに向けると、稲垣である人影が目に入った。

（いた！）

両手に電流を流したまま走り出そうとした時、足にスライム状の水が纏わりついてくる。

けれど、俺にそんな足止めは効かない。それは、日和についたスライムを電気で外した時に証明されたはずだ。

なので、構わず足から電気を放出しようとした、瞬間。

スライムの水が、一瞬にして焼けつくようなお湯へと変化した。

「なっ！ がアああああああああ！！」
絶叫。

足全体が灼熱のお湯に浸かり、俺の肌を焼かんとする。一刻も早く抜け出そうと足を振るが、スライムがべったりとへばりつき離れない。

思わず両手でスライムを引き剥がそうとするが、熱くて触れることなど敵わない。

俺はただただ絶叫するしかなかった。

十秒ほどでスライムが解かれ、俺は足を押さえてその場で崩れ落ちる。

いつの間にか霧は完全に晴れていた。

「――二つ目は、僕の能力スキルを見誤っていたことだ。誰も、『水』を操るなどとは言っていない」

呻く俺の目の前に立ち、見下す形で稲垣が話し出す。

俺は見上げることすらできない。

「僕の能力は『液状操作スキル』。水に限らず、ガソリンだろうと油だろうと液体であれば意のままに操ることができる。液体に粘り気を足

したり、水温を調整することもまた然りだ」

ようやく痛み慣れてきたが、立つことはできず、俺は顔だけを稲垣へと向ける。

「水蒸気の発生もこの力の応用によるものだ。水たまりの水温を限界の九十九度まで引き上げて、これを投下した」

そう言つて、稲垣はポケットから取り出したものを俺の方に放り投げてくる。

俺の近くまで転がってきたのは、銀色に輝くオイルライターだった。

「ライターの火によつて九十九度だった水温は一〇〇度を越える。それが水たまり全土に渡り、一気に水蒸気へと気化したんだ。もつとも、君の足に密着していたスライムは、七〇度程度だけだね。さて、これでタネ明かしは終わったわけだが」

言葉を区切ると、稲垣は右手に小さな水の渦を作ると、さらに一歩俺に近づく。

「桜木。君の敗因は観察力不足と思考の甘さにある。谷原の足も、君と同じように火傷を負わせていたんだが、気づかなかつたみたいだな……結局、僕の力を誤認した時点で、勝敗は決まっていたということだ」

（まずい！）

雷撃を放つてこの窮地を脱しようとするが、足の火傷のせいで上手く集中できない。いくら稲垣でも命まではとるようなことはないだろうが、能力を出したということは、まだ俺に攻撃を加えるつもりだということだ。入院レベルの怪我を負わせられてしまうと、今後稲垣に近づくことさえままなくなる。それだけは、絶対に避けたかった。

でも、それでも、体は言うことを聞いてくれない。

「今後、君がサヴァンとして生きていくために、一つ忠告をしておく」

稲垣は一度大きく深呼吸をして、表情を一層険しくし、俺へと告

げる。

「仲間を作るな。それがいかに親しい仲でもだ。結局、他人に頼ることは己を弱くするに過ぎない。仲間がいることが当たり前になれば、いざ一人になった時何もできなくなる。それに、仲間がいるからって必ず助けてもらえるとは限らない。人の心はいつでも不安定だ。裏切らないという保証はどこにもない。結局、皆わが身が可愛いんだよ。追いつめられれば、約束も破るし、仲間を売ることだって躊躇わない。人とはそういう生物だ。だから――」

「……裏切られたのか？」

そんな俺の一言を聞いて、稲垣が急に言葉を詰まらせる。俺が日和を亜空間内から逃がす際に言った含みのある発言の時と同じように、稲垣の肩がビクつとはねた。

「お前は、過去に仲間裏切られたから、こんなことを――」

「君の質問に答える義理はない！」

俺の言葉を全否定するように、稲垣が声を荒げる。突然大きい声を出されたものだから、俺も驚いて言葉が詰まってしまった。

「……もういい。少し喋り過ぎたみたいだ」

稲垣はかぶりを振ると、改めて俺を見下し、小さな渦巻を発生させた右手を、俺の頭上へと持ってくる。

「もちろん、殺しはしない。殺人鬼じゃないんだ、法は守る。ただしばらくは動けなくさせてもらう。新入早々申し訳ないけどね」

「くっ……！」

まずい、このままじゃ本当に入院するハメになってしまう。俺は最後の気力を振り絞って、雷撃を放とうとするが、

「……たいしたものだな。ここに来てまだ戦闘意欲があるのか。だが」

持ち上がりかけた俺の右手は、稲垣に軽く蹴られたことによって最後の気力を取り払われてしまった。

「ぐっ」

「もつと自分を大切にしたいほうがいい。無理をしない方が怪我也早く治るだろう」

完全に、挽回の手はなくなった。

俺は覚悟を決め、ぎゅっと強く目をつむる。

「それじゃ、次に会うときは、他人同士だ」

稲垣の手が俺の頭を捉えようとした、刹那。

ぴゅっ、と。稲垣と俺の間を何かが通り過ぎた。

「誰だ！」

稲垣の声に触発されて、俺も目を開ける。

まさか、日和が涼華さんを連れて、助けにきてくれたのか？

そう思い、飛んできたものへと目を移すと、

——そこには、何やら難しい文字が書かれたお札が地面に突き刺さっていた。

「……」

なにこれ？

お札が飛んできた方向を振り向くが、そこには誰もいない。

「誰だ！ どこにいる！？」

稲垣がもう一度、お札が飛んできた方へと呼号する。しかし、返事どころか誰の気配も感じない。奇襲もこれきり音沙汰なしだ。

これは……俺を助けたのか？ それとも、第三者による奇襲なのか？——なんと中途半端な空気が流れ出す。稲垣も最初は焦りを見せていたが、なんの反応もないので、顔が訝しむ表情へと変化していた。

「……まさか、四人目……」

稲垣が何かぼそりとつぶやいているが、良く聞こえない。体勢を変えて、羽生斗のつぶやきを聞き取ろうとした時、

俺と稲垣が見ていない、反対方向に、もう一つ別のお札が見えた。

「はえっ?!」

俺の間の抜けた声に反応して稲垣が振り返り、お札を見て同じように目を見開いている。

——このお札はいつここに刺されたんだ!?

さらに、

「足元にも!？」

稲垣の驚愕で見開かれた視線の先には、もう二つ、別のお札が存在していた。

(何なんだ一体!?)

その時、

俺を囲むように地面に突き刺さっていたお札がいきなり光出し、次の瞬間には、

俺は宙に浮いていた。

正確には、俺が横たえていた部分の地面がすっぽりとなくなって、穴になっていた。

「へ？」

まともなりアクションなど取れるわけもなく。

俺は虚空の闇へと落下した。

敗北寸前 「イチジキュウセン？」（後書き）

いかがでしたか？

前書きに書きたいこと書いちゃうから後書きに書くことがなくなっちゃう。

あ。なんか『書』って字が多いね？
どーでもいいですね。スイマセン。

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

三島先生 「ツメタイマナザシ」 (前書き)

分かっています。ええ、分かっていますとも。

話の進みがちょー遅え。

だって、23話目でまだ入学してから4日しかたっていないんだぜ？
もうグツダグツダですよ。こりゃ読んでてダルくなるわ。
予定では20話ぐらいで『能力解禁編』は終わるはずだったのに…
…ホント、どうしてこうなった……。

愚痴はこれぐらいにして、
どうぞ。

三島先生 Ⅱ ツメタイマナザシⅡ

「……ま……ん」

誰かの声が聞こえる。

意識が半ばない状態の俺にはその程度にしか認識できない。

重たいまぶたを少し動かすと、闇の中に光が差し込む。それがひどくまぶしく思えて、反射的にまた瞼が閉じようと抵抗をする。

「はく……ま……ん……」

だいぶ頭がさえて来て、徐々に瞼が開かれる。その先に――

「白真くん！ 大丈夫！？」

――心配そうな顔をして俺の名前を呼び続ける、友の姿が映った瞬間、ついさっきまでの稲垣との戦いが俺の脳内を駆け巡り、意識が一気に覚醒した。

「そうだ、アイツは！？」

「きゃ！」

俺が飛び起きると、俺を覗き込むようにしていた日和はとっさに身体を引き、危ないところで頭突きをかわす。

周りは白いカーテンで覆われていて、日和はそのすぐ近くで椅子に腰かけていたらしい。寝ていたのは白いベットの上。そして、ほのかに香る消毒液の匂いが鼻をつき、ようやく自分がどこにいるのかを理解した。

「保健室？」

「そうだよ。教室で倒れていたのを三島先生が見つけてくれて、ここまで運んできたの」

「へえ、三島先生が……」

三島先生は確か、将太のクラスの担任だったか。ファーストフー

ド店で彩菜と一緒に担任の愚痴をぶつぶつとこぼしていたのを思い出す。

（なんか……懐かしいな）

四日前。たった四日前の出来事だというのに、もうずっと前に思える。それだけこの三日間が密度の濃い時間だったということなんだろう。

サヴァンとして生きる——それは、クリーチャーと合いまみれていない間の普通の日常を過ごしていても、人並みの『平穩』を過ごしている事にはならないということなのか。

—*—

『サヴァンとは神に選ばれた専売特許などではない。神の気まぐれにより、戦うことを強制された哀れな人間にすぎん』

『平和をいくら求めたところで、サヴァンとしての本能が邪魔をする。戦いに身を投じていなければ気が済まなくなる。ヒーローになれるのではなく、ヒーローであり続けなければならない』

—*—

かつて美鬼もそう言っていた。今回の一件で、その言葉の意味を痛感すると同時に、なにやら俺の中で対抗心が生まれる。美鬼の言った言葉の意味は、おおよそ賛成できる。でも、それで本当にサヴァンを『哀れな人間』と決めつけられるのだろうか？ それを決めるのは早計ではないのか？ 上手く言葉にできないけれど、もっとこう、サヴァンになることは、悪いことだけではないんじゃないか？

「白真くん？ どうしたの？ どこか痛むとか？」

「あ、いや、なんでもない。ちょっと考え事」

日和の声で我に返る。今考えるべきことはそんなことではないし

な。目の前のことから順に行かなきゃ。

「それで、俺はどこで倒れていたって？」

そう、まずはそこだ。

「だから、保健室。将太くんの教室、五組で倒れてたよ」

「五組？」

確かあの時、俺が稲垣にとどめを刺されかけたあの時、姿の見えない第三者の介入によって、俺は穴（？）に落ちたはずだ。「落ちるっ！」って思ったその瞬間から記憶がないから、多分吸い込まれるように落ちてからすぐ気を失ったんだろう。どうして気を失ったのかは不明だが。

「私がいなくなってからまた校内に戻ったの？」

「いや、そうじゃない。なんというか――」

日和がいなくなってからこの顛末を話そうとした時、ガラツ、と。保健室の扉が開き、誰かが入ってくる。

保健室の先生かな？　と思っただ、その人物が俺のベットのカーテンを勢いよく開けたところで、その推測がハズレであることが分かった。

「調子はどう？　白真君」

「涼華先輩！」

入ってきたのは涼華先輩だった。予想外の人物の登場に、とっさに次の言葉が出てこない。

そんな俺の心境を察したのか、日和が補足説明をしてくれる。

「私が呼んだんだよ。白真くんが逃がしてくれた後、下校途中のクラスの子に見つかっちゃってね。ここに来て、肩の傷と脚の火傷だけ軽く治療してもらって、ケータイで涼華さんと呼んだの。それで、ここで待っていたら、三島先生が白真くんを運んできたんだよ」

なるほど。確かに亜空間を出た先はすぐ校門だったし、あの時間帯は下校途中の学生でいっぱいだった。目につくなという方が無茶

な話だ。

「俺、来てからどれくらい寝てた？」

「二十分くらいよ」

答えたのは涼華先輩だった。

「一度、白真君が寝てる間に私もここに來たわ。その後日和から話を聞いて、君たちが戦った校門近くと、羽生斗君の教室、下駄箱を調べに行つてたのよ。さすがに、彼本人はもう居なかったけれどね」
そこで一度言葉を切ると、涼華先輩は一つ大きな溜息をつく。そんな物憂げな表情でさえ神秘的で綺麗だと思つてしまう。

「二人に話しておくべきだったわね。私としたことが、迂闊だったわ……こんなに早く情報を掴まれるなんて」

だいぶしよげ返つてゐる先輩を見て、俺は場違いにも感心してしまった。クリーチャーと一戦交えている時や入学式で壇上に上がつていた時の、凛々しくしつかりしている先輩の姿しか見たことがなかったからだろう、先輩のあからさまに落胆した様子は新鮮だった。

「……」

「……」

「……」

しばしの無言。俺と日和は先輩の次の言葉を待つていたのだが、

「……白真君、なんにもないの？」

「えっ、俺待ちですか!？」

「普通女の子が落ち込んでいたら、さりげなくフォローして、好感度アップを狙うものでしょう？　しかも、相手は噂の美少女生徒会長だし」

「自分で言いますか、それ」

何を言い出しているんだこの人は。

「全ての男子がそういう思考を持っているわけではないと思いますけど……」

「ええー？」

「『ええー？』って、ええー？」

涼華先輩の雰囲気突然ガラツと変わり、正直戸惑う。日和の方へ目くばせすると、困ったように微笑していた。ああ、あの笑い方は困っているように見せかけて、自分も楽しんでいる時の笑い方だ。「先輩って、本当はけっこうラフな性格だったりします？」

「いいえ？ 近づくことさえ躊躇うほど、清楚で由緒正しい高嶺の花的な存在を演じているけど？」

「演じてるんじゃないですか！」

俺のツツコミに先輩がコロコロと可愛らしく笑う。口元に手の甲を当てて、クスクス。みたいな上品な笑い方では決してない。なるほど、この人の本性が見えてきた。

もう一度日和に目を移すと、やっぱりさっきの困り笑顔。こいつ、知っていたな。

「えー、もったいないなあ白真君。そこで一言、『先輩に罪はありません。先輩の美貌の罪に比べれば、その程度の罪、可愛いものですよ。キラッ』みたいなことを言ってくれたら、案外コロツといっちゃったかもしれないのに」

「そう言われたいんですか？」

「ううん。思いつきり引く。ドン引く。無いわ〜って思う」

「じゃあ言わなくていいじゃないですか！」

あとドン引くってなんだ。それと『キラッ』って自分で言うな。ウインクはマジ可愛かったけど。ドキツとしたけど。

「ウインクして白真君をドキツとときめかせるため以外に理由なんてないわ」

「くっそ思うツボかよこんちくしょー！」

男の純情を弄ばれた。ていうか、俺の中の涼華先輩のイメージがだんだん崩れていく。

「ウインク、ウインク……は、白真くん！」

「そのピースした左手を目元に持って行ってあまつさえウインクなんてするなよ頼むからマジで収集つかなくなるから」

「うう」

先輩の真似する気満々だった日和は、渋々体勢を崩す。ていうかね、そんな顔真つ赤にしてやられてもこっちも困るから！ 恥ずかしいなら無理しないでいいから日和ちゃん！ 君そんなキャラじゃないから！

「それより、本題に入りましょうよ！」

「日和。白真君って、ひよっとして朴念仁？」

「ええとつてもものすごく朴念仁です」

「ほ・ん・だ・い！」

今どきの女子高生はこうも人の話を聞かないのだろうか。女子高生の娘を持つ世間のお父さんの苦労が少しわかった気がする。今どきの男子高校生が言える事じゃないけど。

「ごめんごめん、怒らないで。ただ、ここで話はできないわ」

「どうしてです？」

「どうしてって、そりゃ——」

そこでガラッ、と。再び保健室のドアが開かれる。音に釣られて振り向くと、男が一人、ドアの近くに立っていた。

端正な顔立ちに、真面目さを強調させるようなシャープな眼鏡をかけ、気品を感じさせるスーツを着こなす、いわゆる、『デキる人』のオーラを身にまとった一人の教師。

どこかで見た気がするけど……誰だっけ？

「桜木。足の火傷はどうだ」

「あ、はい。水ぶくれになってるけど、歩くのには支障ないかな、と……」

「そうか。なら早くここから出る。保健の安田先生はすでにご帰宅されていて、本来ならば閉めなければならぬ保健室を、お前個人のために空けているのだからな。人の迷惑を考えろ」

「えっ、あ、すいません！」

およそ親切とはほど遠い無表情と感情の欠片もない淡々とした声を前に、思わず頭を下げてしまう。俺はすぐにベッドから降りた。「足、本当に大丈夫？」

「ああ、平気」

足首辺りは水ぶくれになっていて触れると痛い、幸いにも足の裏は無傷のようだった。体を支えようとしてくれた女子二人に軽く礼を言い、保健室を出る。

「なぜ私の教室でお前が倒れていたのか、その理由と経路を深く尋問したいところではあるが、今回は新入生という立場と篠原の主張に免じて無効としよう。ただし、これ以降、風紀を乱すような行動はするな。次があれば、その時は職員室で話を聞く。以上だ。下校しろ」

教師が生徒に向けるにはいささか冷たすぎる視線を俺にぶつけ、例の如く濃淡のない口調でそう述べると、背を向けて行ってしまった。

「ていうか、『私の教室』って……」

「ええ。今のが三島先生。会ったことなかったかしら？」

「はい。まだ三島先生の授業は受けてないですから」

まさかとは思ったが、やっぱりあの人が三島先生なのか。確かに、将太が苦手そうな人種だ。俺もあまり関わりたいとは思わない。

「怖そうな先生だよ……将太くん、可愛そう」

日和も俺と同意見のようだ。まだ若いのに、貫録があるというか、正面向き合つと軽く委縮してしまうような威圧感を放っている気がする。

「そうね。私も直接話したのはまだ二、三回ぐらいだし、融通が利かなそうよね」

「二、三回？」

「担当する学年が違えば、あまり会うことがない先生も多いわよ。特に、三島先生は去年ここに来た先生だし、生徒会長として会ったことは初めてかしらね」

あれで新米の部類なのか……お家柄が厳しいとか？

「……あれ？もしかして、俺、目えつけられた!？」

「どうかしらね。まあ、あの人一度話した生徒は絶対に忘れない人

だから、ある意味目を付けられたってことになるかしらね」

「怖そうだし、私苦手かも……白真くん、ふぁいとっ」

「ええー……」

うふふふ、と。楽しそうに笑う先輩と、小さく応援する日和。

こんなことで応援されても……。まあ可愛いからいいが。一方で、先輩は上品に笑っているけど楽しんでいるに違いない。間違いない。

「それじゃ、私たちも行きましょう」

そういうと、涼華先輩は下駄箱の方へと歩き出す。しかし、俺と日和はその後に続かなかった。

足音が聞こえないのに気付いたのか、先輩が顔だけを振り替えり、きょんとした表情を向けてくる。

「どうしたの？ 何か忘れ物？」

「あの、涼華先輩。俺たちこれからどこに行くんですか？」

「ん？ そりゃ——」

おもむろに、涼華先輩は財布を取り出すと、その中から名刺サイズの紙を引っ張り出し、俺と日和に見せてくる。

『喫茶 エリカ く心地よい休息をあなたに』

「コーヒーがおいしい、穴場の喫茶店に、ね」

三島先生 「ツメタイマナザシ」(後書き)

いかがでしたか？

今回はちよいと短いかな？ いつもだって10000字いかないくらい短いけど。

はあどうしょ。グダグダだ。

このままだとこの物語書き終わるのかなりかかりそう。

500話くらい行っちゃうんじゃないかな？

……言い過ぎか。でも、300は行く気がする。

というわけで、どうかお付き合いのほどよろしくお願いします。見捨てないでえ！

誤字脱字、評価、コメントは厳しめをお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1741s/>

白滅の賢者

2011年11月28日00時48分発行